

きて其裏面を見れば明治二十八年三月京都市参事會
建之とあり。

此が羅生門の遺址なるか此れが綱が武勇を顯し、舊
蹟なるかと暫しは呆るゝばかりなりしが猶も四邊を
觀察せしに門の跡もなく又其らしき所をも見受けず、
只大なる石の標が汚なき溝の縁に立つのみなり傍に
木挽小屋あり筋向に肥料販賣所あり石橋の手前には
角に理髮店と簾屋あり石橋を渡りて向には立塲茶屋
あり又左やはた右やなき谷觀世

音菩薩往來安全といふ石立てり。
如何さま此處は舊平安城廓の南
門にして京都市内より續ける千
本通り盡頭東は今來し方の東寺
西へ行けば向日町停車場の方に
出づ可く南に曲れば上鳥羽に出
で、同じく大阪に達す可く北は
即ち千本なり所在を記



(塔の寺東)

せば京都府葛野郡大内
村大字八條にて大阪京
都間の往還に當るなり。
全く羅生門に鬼が出て
人を傷ひしものか綱が毛だらけの鬼の片腕を取りて

歸りしものか其の邊の事は明治の教育を受けしもの
は八歳の童子も解すべし思ふに其鬼と云ふは山賊夜
盜の類ならん續世繼物語に桓武帝最初に此門を造ら
せ給ひしが其後度々破損して圓融帝の御時倒れたる
儘造立の事なしと記せり是に依りて所謂鬼の腕を取
りたりといふ綱の主人の源頼光の世に在りし時を考
ふるに頼光こそ圓融天皇より以下五朝に仕へし人に
て羅城門破損して倒れたる頃と符合するなれ圓融帝
の治世は日本紀元にて千六百三十一年以降十五年間
に亘りぬ斯の如く次第に追究する時は荒廢したる門
の中に盜賊住みて旅人を惱したる事實は推測するに
難からずかゝる事ありしにより、後の人羅城門を憚り
て羅生門と改め奇怪なる物語を後生に貽したるなら
んが思へば罪深き所業なれ劇ならばとにかくに諺と
して斯かる怪異は餘りに好ましからず嘗て谷本文學
博士は云へりオペラと能と似たる所は僅かに其表情
が抽象的に止ると云ふ點のみなり能は愉快なるもの
なるも舞臺及背景が單純にして靈異劇と宗教劇のみ
多きが缺點なりと然り羅生門の如きは即ち怪異劇な
り。

可笑しきは此羅城門遺址の溝の中に家鴨多く泳ぎて
啾々と叫ぶ有様は恰かも予を見て遠路の所を痴氣に

も尋ね來りしよと嘲るが如く思はれて腹立しければ、コレ家鴨能つく承れ、諸國記は作者が那邊に迄心を推きたるかを探らんが爲なり。又文章の勢をも知らんが爲めなり。多少諸曲家に趣味をも持たせんが爲めなりと罵れど、家鴨は一向平氣にて予の顔を眺めて矢張り啾々ど叫びぬ、エー、己れ話せぬ奴かな馬鹿め！

鬼の出た出ぬは兎もあれ、京より大阪まで自轉車を走らす人にして此處を通らば、把手を抑へ羅城門の舊蹟を眺むるも、時に取つての興なるぞかし。やがて穿鑿終りたれば、元來し道に引つ返せしが、此邊は街も淋しく、撤して農家なり。殊に東寺の門前には、安宿が軒を並べけるが、こは又最下等の人の寝泊りすると覺しく、現に予が通り掛りし時にも、盲目の乞食が子供に手を引かれて、其宿に歸り來るを見受けたり。かゝる陋巷なるにも拘はらず、寺は眞言宗總本山にして、教王護國寺と稱し、日本有數の堂々たる巨刹なり。東寺と稱する所由は此れより二町ばかり西にも、又寺ある故、東の方を東寺といひ、西を西寺と唱へしなり。

護國寺の門を入りて正面にあるは金堂なり。覗き見るに、本尊は藥師如來にして、脇は日光菩薩と月光菩薩となり。次に講堂ありしが、本尊は大日如來にして、頭には能の時に天女が戴く天冠といふものと同じきを冠り、

兩手を合せて印を結べり。次に又食堂ありしが、千手觀音を安置したり。物好にも目を皿の如くして、尊體の周圍より八方に出でたる千の手を見しに、皆空手なく、錫杖、斧、鐵劍、拂子、鈴、蓮華の花、燭、燭等種々の物を持ちたり。また廣き境内の一隅、松杉鬱蒼たる中に、超然として五重の塔立てり。其下半部は綠蔭の中に蔽はれて見ぬがれども、三重あたりより其姿を顯して、此寺の標榜となる風情甚だ雅なり。流車にて京都を行き過ぎる時、尤も早く目に留るは此塔なり。諸には、春雨の音も頻りにふくる夜の鐘も聞ゆるわかつきに、東寺の前をうち過ぎてとあるが、拂曉近き頃の此寺の有様は如何松林に塔鐘の聲、茅屋固より夜色沈々、其中を悠然として進み來る渡邊綱の勇氣も亦嘉す可し。彼が人々に向つて御前を立つて出でけるが立ち歸りかたがたは、人の心を見ちのくの安達が原にあらねども、こもれる鬼を従へずば、二度又人にど大氣燄を吐きたるも亦怒すべきなり。

猶諸に羅生門を見わたせば、物すさまじく雨落ちて、俄にふさくる風の音にどあるが、さても作者は能くこそ形容したれ。此邊を文章と實地と對照して、後に論ふ時は、流石に又別種の興なきにしもあらず。

寺内に池ありて、蓮葉を多く蓄ふ。されば夏時に至れば、曉を侵して、馥郁たる香を慕ひ來る士女、引きも切らず

といふ蓮花の清さを看取して方に不染の心を知ると云ふ事あれば佛家に取りては此上なき眺めなる可し。蓮池の邊に辨財天外二三の祠あり又私立古義真言宗聯合高等中學校等ありて事々に本山の威嚴を現せり。北門を出でて六孫王權現の祠に詣で、池の鯉魚の類なきを賞し其より西寺を志して田の畦を辿り行く途に淨藏貴所の塚ありやがて西寺の門を過ぎりて後に引返し七條の停車場まで戻りし時には最早疲勞して一足も進まざれば側なる腕車にうち乗りておとなしやかに念佛唱へつゝ歸りぬ。

(其二十三) 泉涌寺 『舍利』

……舍利殿……先帝御陵……獨鈷水……今熊野……



泉涌寺舍利殿

十二月二日御舍利を拜せんとして泉涌寺に向ひぬ。電車に乗りて七條まで行き其より伏見街道にかゝり今熊野町の巡查派出所の角を左に入りて一橋尋常小學校の塀に傳ひくへ行けば左大ぶつきよみづ山しな道「右せんゆう」とどうふくじ道と刻める石立てり此邊茅屋球にして道は一步一步と爪先上りになり松の風鳥の歌も次第に清らかにて漸く寺近くなりぬ最早家もなし前山の翠黛愈々明らかなり。

京都の社寺をそこはかどなく歩き廻りたる中には外目にも其衰退したるさを見え透かれていどしく心を惱まし、事もありしが當寺に來りて始めて寺てふものゝ威嚴に感じたり先づ東山といふ額を掲げたる正面の大門は横三十三尺梁行二十九尺ありこは是れ永祿十一年御所の南門をば當寺に寄附せられたるな

りどぞ其れより寺中に入りて見るに、さしもの廣域も隈なく掃き清められて塵一つだに見出されず。凡そ斯の如き淨地は伊勢神宮より外に見る事はざるが、是は全く今上皇帝の御父君の御陵なるが故ぞかし。御陵の入り口は堅く塙を立て、常人の入るを許さざるは尤もなれども、方丈の門にまでも「拜觀禁制無用の者入るべからず」との札を立てたるは驚く可き權式なり。唐門の前にも「無用之者不可入」といふ制札あり。嘗に此殿あるのみならず、園内寂々として更に人の來る可き氣色なきには、事問ふ便もなく大いに困じたりしが、如何にもして謠曲に關する舍利殿のみは見出さる可らず。例の手帳と鉛筆とを手を持ちながら歩きめぐれば、焉んぞ知らん己が目の前にある二つの堂の中の一つが舍利殿ならんとは、是ぞ本尊の釋迦佛牙舍利を安置したる桁行六十尺、梁行五十四尺の建物なるが遺憾にも外より密に戸を閉しあれば、他の佛閣の如く覗く事能はざるには、太く落膽せり。證方なさに今一つの佛殿に行きて見しに、是は本尊は單に釋迦佛としてありしが、楹子窓の中より覗く事も出來、探幽の手になりたりといふ。天井の龍も幽に見るを得たり。ざるにても怨めしき哉、わが目的とする舍利殿の中は見る事を得ずして却つて關係のなき佛殿の方のみ拜みたりとて何

かせんと思ひしが、又心付きて見れば、是れは大なる煩惱にて、われ誤りて、當寺に取りては辱くも此釋迦如來こそ即ち本願なるべけれ。此佛殿も同じく桁行六十尺、梁行五十四尺あり。又浴室と額を打ちたる建物あり。堅く戸を閉せり。又泉涌水屋形と云ふものあり。見るに小社を造り下は岩にて清水を湧出す。此の水屋形の天井にも別所如閑といふ人の書きたる龍ありしかど、僅かに頭顱のみを示し、餘は剥げて見えすなりぬ。それも無理ならず、此の水屋形と佛殿とは寛文八年徳川家綱公の再興に係り、二百四十年を経過せしものなりとぞ。舍利といふ謠は此泉涌寺の舍利殿の事を叙したるものなり。「日を重ねて急ぎ候間程なく都に着きて候まづ承り及びたる東山泉涌寺に參り、大唐より渡されたる十六羅漢、又た佛舍利をも拜み申さばやと存じ候ふ」とはワキ僧の所望なるが予とても其の如くならく十六羅漢は何處に候ぞ、舍利殿も拜みたく候ふと呼べど、叫べど誰とて答ふるものもなく、四萬六千坪の大寺域は風も吹かず音もせず、空々寂々たり。さればとて餘りに狂すれば先帝并に御歴代の御陵故不敬に當る可し。案じ去り案じ來りて事茲に至れば有繋の我慢も弱り果て知らざりき、斯の如くんば、又何か前々に工夫もありしものを、今日數里の遠足も何の効もなきかと恨

然として芝生の上に憩へば山雲の秀氣は峰を傳ひ梢を渡りて身を包むにぞ心氣忽ち恢復す。かくて先帝の御の方を伺ひ先にも拜したるを又重ねて拜し跪つきて合掌する事稍久し。拜し終りて謹みて御陵の敷を算ふれば左の如し。

四條天皇御陵、後水尾天皇御陵、明正天皇御陵、後光明天皇御陵、後西院天皇御陵、靈元天皇御陵、東山天皇御陵、中御門天皇御陵、櫻町天皇御陵、桃園天皇御陵、後桃園天皇御陵、光格天皇御陵、仁孝天皇御陵、孝明天皇御陵。

四條天皇は八十七代にまし、後水尾天皇は百七代におはせり。此百七代の天子より以下先帝までにて御陵は十五なり。先帝は慶應二年に崩御あらせられ、又英照皇太后は明治三十年に崩御せられ給ひしが、是れも當寺後山に御陵あり。豈夫れ恐れざる可けんや。其より少し蹊路を下れば弘法大師の獨鈷水あり。此邊は最も幽邃にして、溪川の音聞え紅葉の名残、其處此處に殘れり。舍利の謠に「げに聞けや峰の松谷の水音すみ渡る嵐や法をつたふらん」とあるは、此邊の景色に副ひたる好文字なりかし。又同じ謠に「月雪の古き寺井は水すみて庭の松風さへかへり」と云ふ。其寺井は前に記せし水屋形を以て之に比ふべけれ。獨鈷水を見小高き所

にある三寶大荒神をも音訪れ、再び元の道に戻らんとせし時、漸くにして一人の老翁に會ひし。故腰を低くして舍利殿の事を聞きしに、毎月八日には堂を開けて僧の勤行ありといふ。さては八日に來れば御舍利を拜すべかりしに、と口惜しさは又一倍せり。予は京都附近を遠足する時には、京都名所圖繪等の書を前以て一覽すれども、今日の如く舍利殿が八日に扉を開く可し等の類は更に記してなき。故斯くの如きの恨事あり。是れに付けても、名所案内の書を著す人は自ら足を運び、細かに聞き審かに尋ね、社寺の縁起行事等を明らかにして欲しけれ。

舍利殿の事は甚だ遺憾なりしが、詮方なきに辭して山積きの今熊野觀音に詣りぬ。此處は西國十五番の札所に、有名人なるが謠にも多く引用せらる。熊野の謠にも「大悲擁護の薄がすみ熊野權現のうつりませす、御名も同じ今熊野稻荷の山の薄紅葉」とあり。是れ熊野御前が清水より遙に南の方を見たる時の景色なり。又融の謠に「スキさて〜音羽の嶺つゞき次第々々の山なみの名所々々を語り給へシテ語りも盡きし言の葉の歌の中、山清閑寺今熊野とはあれぞかし」とあるは、今の京都の六條の邊より東山を眺めての間答なり。それ東山は洛東三十六峰の總稱にして、其形は嵐雪の所謂蒲團きて

ねたる姿なり。まづ如意嶽の山脈より指折り敷へて月待山あり、華頂山あり、音羽山あり、月待山の麓に銀閣寺あり、華頂山の下に智恩院あり、音羽山に清水あり、次第に南に走りて阿彌陀峰に太閤垣あり、其より今熊野となり、稻荷山に消ゆ、稻荷山も亦小鍛冶の謠に引用せらる。猶清水の附近には歌の中山もあり、又心ばそ鳥部山もあり、是等を案すれば東山は謠によりて其美を稱せらるゝもの、と謂ふ可し。されば謠曲家は借金を質に置いて、もこの洛東の名區に遊ぶべきの義務あり。

斯様にさかしくは説くもの、實は某とても今熊野は始めてなり。折から日は全く暮れたれども遙かの山腹なる碧瓦を指して、あれこそ觀音堂と教へられたる時にはいと嬉しくて忽ち其方に足を向けぬ雲近くして鳥低くの比喩は今熊野に適すべきか寔に此邊より山深く人聲稀にして全く世塵を絶てり。漸くにして堂に至りしに小なりと雖も御本尊は十一面觀世音なり、白衣の順禮が此處に來りて祈誓を疑らすかと思へば、何となく崇高の念の深くな



るも道理不かし。御詠歌を見るに「ひかしよりたつともしらぬ今熊野佛のちかひあらたなりけり」とあり、次第に暮色迫りければ程なく下山しけるが當寺にも後堀河天皇の御陵あり、寺の名を觀音寺と唱へ、准別格本山に列す。忘れ難きは此寺の門前なりき。後は山前は藪見上ぐれば月輪の山の翠綠は爵蒼として長へに碧落に接す。

(其二十四) 新京極誓願寺 『誓願寺』

熱開場裏……三千佛名會……説法……



(極京新)

十二月六日は新京極の誓願寺に行けり。此處は道近ければ電車にも乗らず五六町歩めば早くも當の誓願寺に着きぬ。當寺の事を記す前にまづ告ぐ可きは新京極の今の有様なり、「お母アはん、連れでつてんか」「お前は昨夜も行たやないか」「だつて、妾玉乗の見世物がもう一度見たいさかいに……」

新京極誓願寺

……よ、お母アはんお行きいなと少女の母に迫る其目的地は抑も何處ぞ言ふまでもなく新京極なり。獨り少女のみならず京都の人のすべてが物見遊山といへば多く新京極に出掛くるなり。お上りさん田舎者赤毛布連も京都停車場を下りて神社佛閣に詣で日暮れば京極に飛込むがならひなり。東京ならば淺草の奥山大阪ならば千日前横濱ならば伊勢崎町通名古屋ならば大須觀音神戸ならば楠公社と云ふが如き巷にて寄席あり芝居あり講釋場あり玉突屋あり其他飲食店見世物雜貨店等軒を列べて群集常に右往左往し肩摩殺撃する所が新京極なり。境を立つれば三條の橋より四條の橋までにて約三町程の間を雜沓するさまは千日前よりも一層密なり古は此邊は寺ばかりなりしが、明治の初年に區域を限り一つの熱鬧場を作りしにて是は當時の知事榎村正直氏の計畫になるものなり。謠にある誓願寺は實に此の京極のドン／＼デヤンデヤンの騒々しき中に悠然として安立するなり。若し人ありて誓願寺の謠には地各歸るのりの場人のシテ實にも妙なる稱名の數々地「虚空」に響くはシテ音樂の聲地「靈香」煮してシテ「花ふる雪」とあるに如何に時經ればとて香烟變じて天歎羅屋牛肉屋鶏肉屋の異臭となり、鐘磬の聲が三味鉦太鼓の音となるとは餘まりに奇し

き變化ならずやと訝らばそは直ちに辨するを得可し。まこと謠に作りたる當寺は今の元誓願寺通小川にありしを天正年中に此所に移したるなり。天正といへば織田信長が隆々たる勢を以て上洛せし時にて當寺のみならず草堂行願寺も亦同年間に一條より今の寺町に移されしなり。案するに中世に至りて京都の上の方にありし寺は續々として今の寺町通に轉居したるなるべし。

やがて誓願寺の門前に立ちて熟く見れば正面には念佛塙黃葉竺庵書といふ額を掲げ又南無阿彌陀佛の六字の額を縦に置かれぬ。當寺は淨土宗西山派の本山なれば南無阿彌陀佛こそ唯一の標榜なるべけれ。掲示の札を見るに十二月四日ヨリ八日マデ午前八時始三千佛名會とあるにぞ。さてこそ念佛の聲聞ゆるなれ。予の家亦た淨土宗に縁あるものなれば折こそよけれいざや詣らん。南無阿彌陀佛

堂内に入れば數百人の善男善女は僧の音頭に連れて、皆一齊に念佛を稱ふる状いと殊勝なり。まづ正面を見れば丈餘の阿彌陀如來あり。天蓋懸り銅盤垂り大燈籠立つなど總て佛閣としての裝飾に於て至らざるなし。又尼講中誓願講等よりの供物もありさ。かくて此金碧燦爛たる佛壇の前には老耄雜僧長老和尚碩學各列を

正し袈裟衣の折目整然として頻りに念佛を稱へ居けるが見るからに、いづれも皆悟道を得たるらしく、心は明鏡の如く曇りなく、光明遍照十方世界に洩るゝ方なき御僧共なり。さればこそ信者も皆一齊に跡に續いて正眞の念佛をば稱ふるなれとは思はれたれども、只一つ解せざるは當日の念佛唱ふる人は僧にもわれ信者にもわれ、皆一度の念佛ごとくに一度づゝ立ちては又た疊に膝を突き、膝を突きては又立ち上り、始終間斷なく、口と身體とを動かす事なり。よしさらば此事を聞きて見ん、又三千佛名會の所由をも知りたし、佛壇の兩側にある聯の文字の解釋も尋ねたし、例の燈籠を振りて衆人稱坐の中を掻き分け、前の方に進み行きて、僧に問ひしに答へて曰く

三千佛名會とは午前八時より正午頃まで、過去未來現在を千宛ツマリ三千の念佛を唱ふる事なり。念佛の本願は煩惱心を去るがためにして、煩惱とは貪慾と瞋志と愚痴との迷を云ふ。然れども此念佛も只口にて稱ふるのみにては本願にならざる故、身體を苦しめて行をなすなり。即ち禮拜に身業禮拜門と口業禮拜門と意業憶念觀察門との三つあり。口に念佛を唱ふるは言ふまでもなく、口業禮拜なり。或は立ち或は膝を突き、間斷なく身を動かすは身業禮拜なり。

かくて心には露些かも他を顧みず一念に彌陀佛を信するは是れ意業憶念なり。扱念佛の間に大音中音小音とあり、此大中小の句切目の間に至れば音頭を取る僧はカチと音をさして其意を告ぐ。其れ我宗にては極樂世界にある八功德水といふ池の水が波打つ如くに念佛せよといふ教なり。又設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺といふ聯の文句は淨土宗三部妙傳大經十八卷の中に



あるものにして其意は設し我佛を得れば十方の衆生は安樂に極樂に生ずるを得。然れども若し念佛すとも業滿たざる者は悟る事能はずして、心は常に迷境にあるといふ教なり云々。

さて佛法の難有さよ。此故にこそ經政の謠にも「平の經政成等正覺と申ひたまふ難有さよ」とあるなれ、又敦盛の謠にも「何の故とかいふなみの聲を力にきたりたり、十念授けおはしませ」とあり、又誓願寺の謠に、「稱ふれば佛もわれもなかりけり、南無阿彌陀佛の聲ばかり、至誠心深廻向發願の鐘の聲耳にそみて有難や」とあり。

寔に人は極樂と娑婆とを問はず、至誠心深心を守らずんばある可らず。至誠なれば必ず衆人に信用を得可し。かるが故に予は殊に此誓願寺の謠を好む。も此謠は一逼上人が熊野權現の示現により、誓願寺に來りて御札を弘めんとする折に和泉式部の幽靈現れたることを骨子として作りしものにして、單に文章として見ても味ふべき價値あり。又此の謠に「所は名におふ洛陽の花の衣の今更に心は空にすみぞめの夕の鐘の聲々に稱名の御法」といふ文句あり。是れ古の元誓願寺町にありたる當寺の有様を叙したるものにて、所謂空を悟りて諸念消え佛に向ひて一燈明なりとの意なるが、當時の御僧も尙は且つ斯の如く芝居の薄ドロの鳴物樂隊の音楽或は女の力持の見世物にて、ハー、イツチャ、イツチャ、よいとさこれわいさのさと、ペンペゴ三味線の響きを聞きても泰然自若として心は空にすみぞめの衣を身に纏ひ朝暮念佛三味に行ひ澄さるゝこと天晴れの出家と言ふ可し。さて僧に質問終りて元の道場に戻れば此度は念佛止みて住職ども覺しき人の床几に腰を掛けて頻りに説法するなりけり。有聲に雄辯なるものにて、「お互に修業も出來ず又悟りも開けないといふのは誠に哀れ果敢ないもので、木に譬ふればマア枯木ぢやな併し枯木



一心になつて念佛をさへ唱へれば生木よりは却つて早く阿彌陀様が極樂に導いて下さるのぢや云々」と諭さる言葉の切目毎に、
 一ひんしんしん
 念へた
 唱へた
 聴衆はさも其心を得たる如く、忽ち低聲にて念佛を唱へて、隨喜の涙に咽ぶものゝ如し。此説法と謠にある「唯一すちに念すならば其れこそ即ち決定する」と云ふ文の同一意なるも面白し。

更に退いて道場の額を見れば日本四十八願所第四十八番とありて例の御詠歌を刻せり。即ち極樂は壽命無量にながければたのしみも又つさることなし」とあり。總じて一寺には一首づゝを限りて尊重せらるゝ御詠歌ありと覺ゆ。又此寺の門前に「迷子みちしるべ」といふ大なる石の標を見るならんが是れは此京極の熱鬧場にて迷子になりたる場合には其子の親來りて住所姓名を紙に記して此石に貼り付くるためなり。かくすれば彌陀の導きにて迷子も必ず早く元に戻るといふ迷信といへば迷信なれども斯る所に此用心あるは感ずべきなり。程なく誓願寺を出で、人込の中に入り賑やかなる諸

興行物の前を一巡しつゝ芝居は明治座と歌舞伎座と
 此二つが京都の最上なるものなるが其れも此一廓に
 あり又大虎座といふ喜劇専門の芝居あり夷谷座とい
 ふ源氏節の小舎あり此外数々の寄席講釋場等看板を
 見るばかりも辛勞なり。

(其二十五) 松原橋 『橋辨慶』



通にありて皇國醫祖五條天神宮といふ石立ち前には
 下駄屋と砂糖屋と綿屋とあり扱神殿を見るに大己貴
 命少彦名太神天照皇太神と三柱の神の名を記し
 たる額かゝり奥に神鏡二つあり燈籠四つ垂下りぬな
 は牛若が例の下駄を穿きて先に行くに辨慶が長刀を
 持ちて跡を跟ける所の額あり又社務所にも同じく辨
 慶牛若の圖の衝立あり此方は辨慶が五條大橋といふ
 提灯を提げたり實にや清水には阪上田村磨あり五條
 天神には辨慶ありて誦うたふ人の足を止む然れども
 彼は日本有数の殿樓なり此は殆んど祠の少し大なる

ものにて、いたく狭く而も荒廢せり。是は西塔のがたはらに住む武藏坊辨慶にて候我宿願の子細あつて五條の天神へ丑の時詣でを仕り候ふと辨慶が松の木如き手を合せて當社に祈誓を凝らし、頃は必ずや今よりも莊嚴なる社なりしならん世も末になれば神佛衰へて予の如き影辨慶來りて境内を蹂躪す何ぞ夫れ慘なるや。



(橋大條五)

當社は又の名を天使社と云ふ神社といふ書に依れば、少彦名太神が大己貴命と天下を經營し、其後蒼生のために療病の法を定む云々とあり、即ち其二神は當社に鎮座せしますより、さてこそ皇國醫祖五條天神宮等の稱呼は起りしなるべけれ。是にて一通り觀察を終りたれば、當社を出で、松原道を通ぎて松原橋に掛らんとする所にて橋の袂を見れば、行燈に伊勢萬としたる雞肉屋あり、橋に出づれば、今までの狹隘なるに引替へて四望廣潤前には東山あり、下は鴨川なり。山水の美一言にして形容し盡すべくもあ

らす、まづ橋を渡りてからの事にせんとて行過ぐれば、橋下に疏水運河の流れあり、恰も此處は開門に當る所とて、三道四道の水落合ひて、其の音雷の如く、附近の建物は震慄して大地鳴動す。蓋し覗き見るだも物凄し。時既に四時暮色は、森々迫りぬ。

因に云ふ、三條の橋も四條の橋も皆大橋の外に別に三條小橋、四條小橋と云ふものあり。大橋は加茂川に架し、小橋は高瀬川にかゝる。松原橋にも亦小橋あり。此小橋の邊人家稠密して道狭く、人の往來頻りなるは、東京の京橋八丁堀界隈にも似たらんか、但し橋辨慶の謠に、御曹子牛若丸の詞として、明けなば寺に上るべし、今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に立ち出で、川波をへて、忽ちに月の光を待つべしと、いふ波の氣色は、それが夜嵐の……と言へる文句あるを見て、直ちに今の五條の大橋と思ふは誤なり。今の松原橋こそ古の五條の橋なりしことは、既に前回夕顔の項中に於て詳記したれば、こゝには省きつ。

其はさて措き、夜半此の橋の上に立ちて、上は三條四條下は五條の橋を眺むるに、各橋いづれも電燈炳然として、緑樹光を浴びる。其の間より電線縦横に交叉して、宛然蜘蛛の網の如く、美景譬ふるに物なし。而も橋頭には旗亭酒家高く、莖を並べ、橋畔には花街の一廓約二町に

亘りて長く軒を列ね、燭光點々として川の流を射る。真にや樓上樓下燭花燦かにして、門外房裡景光美なるは今の松原橋上の遠近の夜景なりかし。さて牛若と辨慶とが此橋の上にて闘ひたる時の有様や如何ならん。指折り數ふれば牛若の時代は七百二十餘年前なれば固より夜光燦たる電燈の如きものなくして、暗く寂しかりしなるべし。されど山の姿川の流は七百年の昔も今も變ることなしと思ふにつけても「橋辨慶」の文章が湧然として胸裏に溢れて禁する能はず。

「面白の景色やなごゝる浮き立つ我心、波も玉散る白露の夕顔の花の色、五條の橋の橋板をどゝろ」と踏み鳴らし音も靜かに更くる夜に、通る人を待つ居たるとは牛若が例の薄衣を擔ぎて橋の上に出づる時の形容なるが、其時は春なるか、夏にもや、秋か冬なるや、されど夕顔の花の色といふ所を見れば夏なること疑ひなし。夜は更けたり、風は涼し、兩雄橋上の武者振りは無美事に予ありけん。あゝ七百年の昔を今に復して見るよしもがな。

かく獨語ちつゝ橋の欄干に凭り掛りて、遙かに東山を見れば、真正面なるは音羽山、清水の樓閣は暮れ行く空に模糊として立てり。既に此夜もあけがたの山塔の鐘もすぎ間の雲の光りかゝやく月の夜にこある鐘

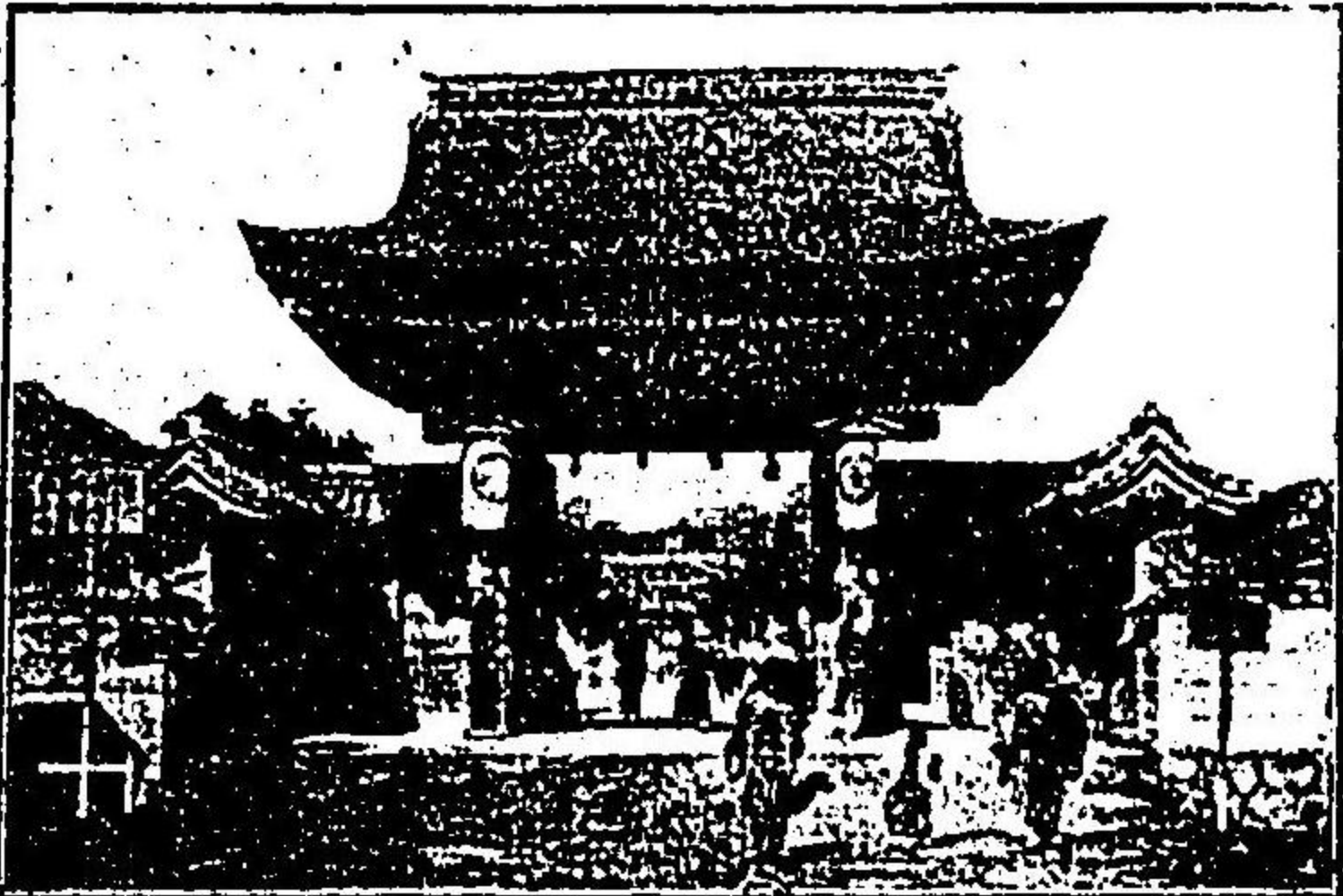
の音も聞えぬ。清水の北隣なる圓山に巍立せる也。阿彌ホテルの高樓も見ゆ。かくて目を北に轉じ、直立四百七十米突の如意嶽を望む時は、自から雄壯の氣起り、又橋下の涼々たる流水に臨む時は、心地暢々として人生の憂を慰むるに足る。茲に於てか直言す、京都市中の最美は加茂川に架する各橋上の眺望なることを。

終に言ふ、觀世流の論には五條天神と云ふ事あれど、實生流などには絶えてさる文句なき代りに、東山十禪寺といふ詞あり。然れども十禪寺は其跡を絶ち今は五條天神のみ残りぬ。

(其二十六) 生田の森

『求塚』 『生田敦盛』

楠公社... 生田神社... 若菜橋...



(門表社神川湊)

見るに求塚は攝州武庫郡住吉村字御田とあれども更に見當とすべき所なし元來求塚といふ語は寶生流には最も重く九番物の中に數へられ金剛喜多には傳はれど觀世にはなし實地にては求塚ならで處女塚又は處女墓と記すに成ん。

巡査に訊くとも往來の車夫に尋るとも何とて斯かる所を知るべきと思ひたれば直ちに榮町六丁目の神戸新聞社を訪ひ齋藤溪舟氏に面會して來遊の目的を語り生田川處女塚を知り給はずやと言へば溪舟氏は流

十六日此日は神戸附近にある生田敦盛「求塚」等の名所を探らんと欲したれば腕車を京都停車場に急がせ午前十一時の西行列車に搭し午後一時に神戸に着く。

生田の森は一度遊びし事あれども生田川は未だ知らず又大日本地名辭書を

石に所の人として委しく教へられしに於て始めて其所在を知り勿々同新聞社を飛出せりさりながら神戸まで來て楠公社に詣らざるは遺憾なりとて元來し道を辿つて香ひめでたき楠の御靈屋に詣つ。

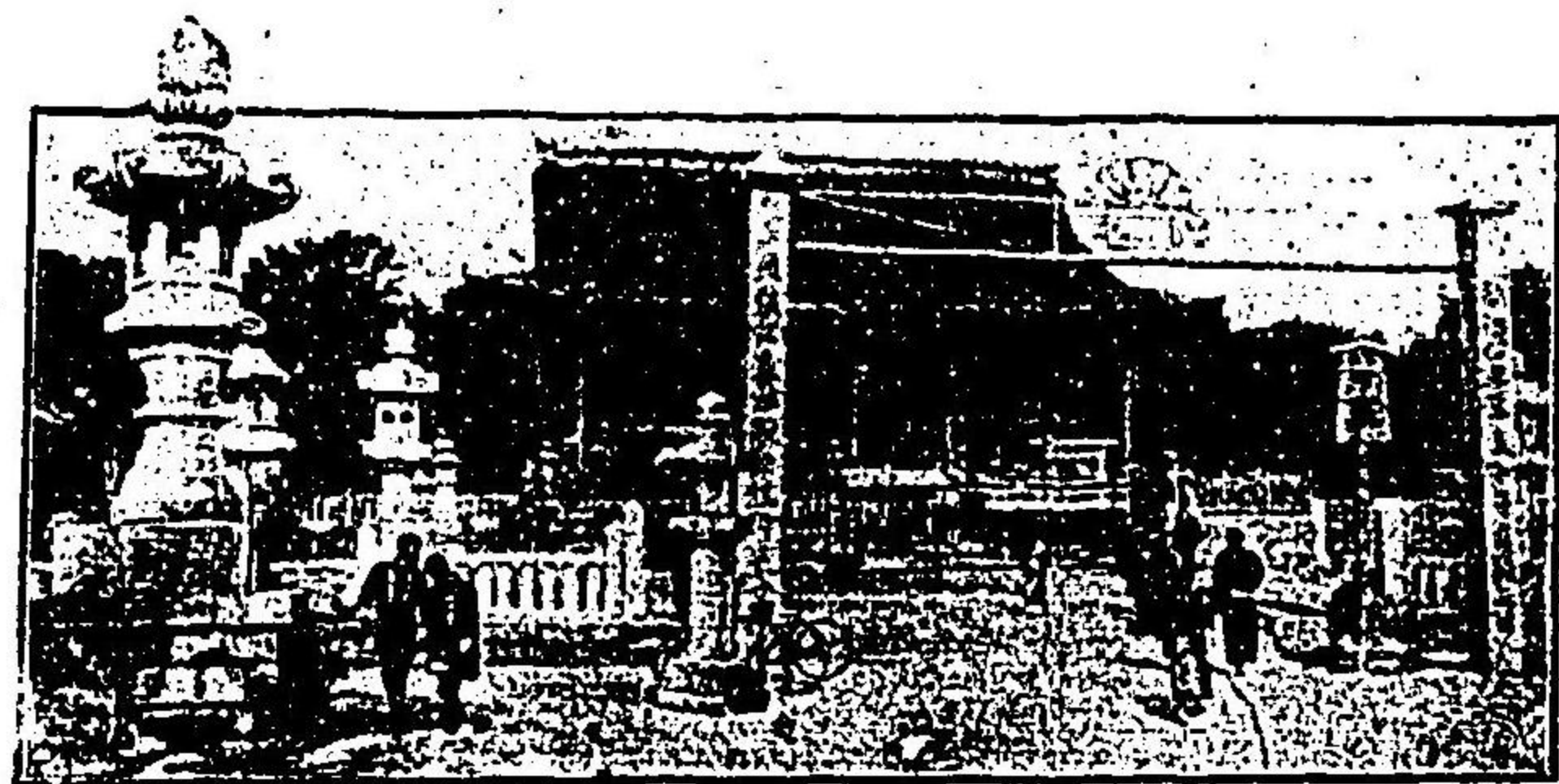
前回新京極誓願寺の項にも記し、如く楠公社は神戸市中の最も賑盛なる巷なり停車場よりは半町もなし。前は多聞町の通にして社前には大黒座といふ劇場あり社の門には白張の菊の提灯が兩側に一個づゝ垂下り是れさへ既に凡ならざるに門を入れば右に當りて楠公石碑道といふ石立て



り其道を進めば一廓を劃して楠公の碑を安置し前には贈正三位楠公碑前とある石を置き別に上に高く嗚呼忠臣楠子之墓の八字を見るあゝ誰か此碑前に於て公の高風を敬慕せざるものやあるべき乎は忽ち拍手をなして暫し碑前に額付きぬ。

人たるものは假令英風萬世の師に値遇せずとも時折は英傑の祠前に詣りて人格を磨するの要あり予今楠公の碑前に跪きて低頭再拜し誠氣虹霓を凌ぎて能く其身を致したる君の清節を思ふに及んで萬感交を至り冥想心機に觸るゝものあり漸くにして碑前を去り

本社の方に向へば例の拜殿ありて皇族下乗の札を立つ石の華表には右に「明治四年辛未十月角辰三日」左に「以鎮祠基因獻石柱聊表寸誠」と刻まれぬ此外石燈籠にも至忠三世厚雄志七生深等の文字あり悼ましきは拜殿の傍に積まれたる銅像の臺石なり是は先年憐和條約公憤の際に人々集りて伊藤公の銅像に繩を付けて市中に引廻せし後を其儘になしたるなり此人生前には兎角の批評ありしかど今や無き數に入りて名を譽世に謳はる吁



(社 神 川 湊)

本社を拜して後境内を一巡せしに樂具玩具飲食物等の露店雜然として散在し此處に一團彼處に一團と人の足を止めぬかゝる中に故熾仁親王の御筆になる忠節紀念之碑なる隸書の文字を刻みたる高き塔あり又水族館あり勸商場あり更に一隅に楠本稻荷大明神の社あり其前に明地ありて神樂殿(能樂堂形)建設地と云ふ杭を立て追つては當社に於ても能樂を催すべき機運と

なるべし西門を出づれば寄席見世物軒を並べて人を招くに忙はしき有様は宛ら大阪の千日前を小規模にしたるの趣あり



茲に又旅客の尤も目を惹くものは此の楠公社の界限至る所に菊水の繪正成子別れの圖の多くある事にて大福餅屋の看板にも菊水あり煎餅屋の看板にも正成が及の蒲團に坐して正行に刀を授くる所の圖あり楠東軒なとゞいふ寫眞屋あり彼れも楠此れも菊水と楠子ならでは夜の明けぬ所なり總じて本尊の名を商工に拘はる人が取つて以て商標若しくは家號とするは日本人の癖にして賞すべくとも答ひる廉はなし須磨の浦には敦盛蕎麥といふ蕎麥屋あり泉岳寺の前にはいろは汁粉あり嵯峨の野宮の界限にては野宮竹杖といふものを賣る皆此例なり

西門は既に出で見たりさらば是より生田に向はんとして東門を橋町通に出づれば此處には神戸地方裁判所あり東京の霞ヶ關の裁判所を其儘の建物にして市内第一の壯觀たり仰げば摩耶山より六甲山鷹取の諸山重疊相起伏して秀麗の氣街衢に滿つ京都の東山

も美なるが神戸市の山も亦愛す可く波が蒲團着て寝たる姿なれば此は六枚折の屏風なり程なく北長狭通に掛り三の宮停車場の所に來り軌道の下を潜りて下山手通二丁目に出づれば正面に生田神社の大華表ありその傍に石ありて三十一文字を刻む。あら床しと立寄りて見れば「秋風に又こそとはめ津の國の生田の森のはるのあけば」とあり。社の前に進めば石にて作りたる永代常夜燈ありて生田太神宮の五文字ありまた勅願所の三字あり菊の紋所ある白張提灯風の爲めにヒラヒラと揺れたる下を潜つて門を入れば右には白馬ありてザクリ／＼と豆を食ふ左には竹を植ゑて塙をしつらひ神功皇后つり竿かうらい竹といふ札を立て。神功皇后にて思ひ出したり抑も本社は官幣中社にて祭神は稚日女尊を祀る其所由は神功皇后が三韓征伐の時稚日女尊を祈りて靈驗ありし故凱旋の折に神慮に任せて此處に一社を設けたるなり稚日女尊は天照皇太神の御妹なりと云ふ。されば高麗竹も朝鮮より持

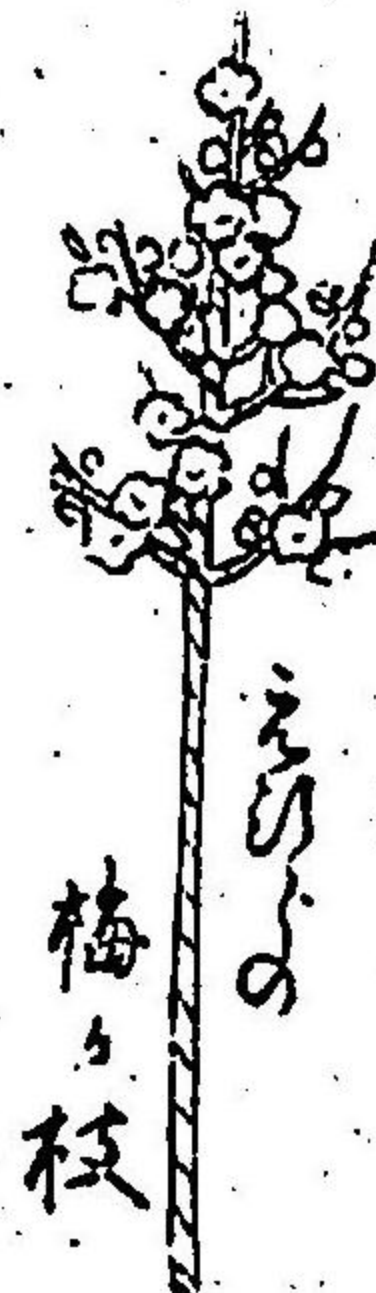


(門表社神田生)



(社神田生)

ち歸り給ひし事は明かなり又先に行けば籠の梅ありかぢはら井あり籠の梅は僅かに形見の枯木を殘すのみなれど有紫に源太景季の風流を偲ふに足るものあり。諸には「ヤキ」如何に申すべき事の候是なる梅は名木にて候か「シテ」さん候是れは籠の梅と申し候「ヤキ」あら面白や籠の梅とはいつの代よりの名木にて候ぞ「シテ」いや名木はどの事は候はねども唯私に申しならはしたる異名にて候とあれど斯くの如き候がりの問答ありては明治の人は困る故今は「えびらの梅」といふ杭を立てたり又傍に石ありて「遊ぶたね」一樹みのこす櫻かな、桃室と言ふ文字あり修繕したる計りの能舞臺あり社殿の後は疎の木立あるが是れを即ち生田の森なり景季奮戦の地なり見るに漸く二十間四方ほどにて是れはくと呆るゝばかりなり先年來りし時には鹿を一二頭放



梅の枝

し飼にしてありしと思ひしが或は記憶の誤りなるべ
きか。

想ふに古の生田の森はよも斯かる小規模にはあるま
じ求塚の諸にまづは生田の名にしおふ是に數ある林
をば生田の森とは知ろし召さずやとあり又生田教盛
の諸にも森のけしき川の流れ都にて承はり及びたる
にもいやまさりて面白き名所にて候ふとわれば古は
當生田神社の背後より森として影暗き森の下道わ



(流引布)

生田の小野は今布引の瀧の南にあれば昔はそこまで
木立の積さしことならんされど今は到底昔の如き生
田の森を見る事はざるに太く失望して漸く當神社
の裏手に出づれば兩角には玩具屋と瀬戸物屋とあり
て同じく下山手通一丁目なり夫れより道を折れて東
へ東へと進めば只ある寂しき町に出でたりこゝは琴
緒町といふ町にて一丁目二丁目三丁目と次第々々に
なりけるが其漸く四丁目に達したる時に南北を横貫

あるべけれ其の
町にも亘りたる
なるべし生田の
森ありてこそ生
田の小野の名も

せる一條の川あり是れ即ち生田川なるが水なくして
壑深く下は神戸の港に續けりされば官線鐵道は此
川に鐵橋を架し阪神の電車も又鐵橋を設け知らざり
き先きに瀟車にて通りし時ガラ／＼と音したるを鐵
橋なりと感ずるばかりにて名所とも舊蹟ともいざ白
真弓矢竹の前にのみ心の
逸りしを憂たてかりける
風雅の人は大阪より神崎
西の宮住吉の三驛を経て
是れより三の宮驛に掛ら
んとする時に車窓を明け
て鐵橋の架りたる水なき
川を見給へかし其れこそ
生田川にして河上の方に
當り麥隨稻畦の見ゆるこ
そ疑ひもなく生田の小野
なれ此川は深けれども幅は漸く二十間もあらんか名
づけて新生田川と云ふ源を摩耶山より發して布引の
瀧となる其より流れに新舊の二筋あれど固より大な
る懸隔のあるべきやうなれば只此川を生田川と思
うて可なり明治四年新たに布引瀧より疏通する水路
を開きたるが故にさてこそ新生田川といふ稱呼は起



生田川

りしなれ、鐵橋より上へくと算ふる時は、橋の数は三つ、四つはともあらんが、先づ第一は若菜橋なり、ゆかしき名ならずや。求塚の諸は多く、若菜といふ文字を以て綴られたるものにて、旅人の道さまたげにつむものは、生田の小野の若菜なりけりといふ、藤原師輔の歌さへ引用せらる。若菜橋の袂に、兵庫縣立神戸中學校あり、其



生田の森
若菜橋の袂
兵庫縣立神戸中學校あり

より先は畑多くして、家少く、所謂前庭の梨花雪よりも白く、春戸の麥穂青々として、緑に匂ふといふ、田園の風致あり、春ならば、嘸と思はれぬ、中學校の所より、猶も先へ先へと歩む頃には、朔風曠野を吹きて、暮色益々迫りたれども、餘人と異りて、諸の名所を探り得たる嬉しさに、寒さも饑れも忘れ果て、いと心地善く歩みと運べり。求塚の諸に、若菜摘む生田の小野の朝風に、猶さえかえる、袂かな、木の芽も春のあは雪に森の下草なほ寒しとあるを思ふ時には、愈々此里の春を偲ばれつ。又同じ諸に曰く、道なしとて、踏み分けて、野澤の

若菜けふ摘まんと、雪間を待つならば、若菜ももしや、老いもせんと、猶同じ諸に、水の緑も春淺き雪間の若菜つむのべに、少なき草の原ならば、小野とはなぞや、知ろし召されぬぞとある。其生田の小野は、實に此處なり。若菜橋も過ぎたり、愉快々々、斯の如き愉快はなしと、前記の文句を大音上げて、論ひ始めしが、固より人なければ、誰あつて笑ふものもなし。

程なく此度は、神若橋といふ橋の所に來りぬ。然れども、第三の橋の名も究めむと思ひて、又先に行けば、貝釦製造所の工場ありて、其の前に、屋臺店の温飽屋あるに、ぞこは屈強なりとて、オイ、温飽屋、カケを熱くして呉れど、立ちながら、温飽を食し、正宗を茶碗にて、煽り漸く満腹したる時、温飽屋の爺に問へば、温飽六杯に、正宗二本なりとは、驚けり。其れも其筈なるべし。此日は午後一時二十分に、神戸驛を下り、其より日の暮るゝまで、手帳と鉛筆とを持ちて、間斷なく運動を繼續したるなりき。此時の子の姿は、山高帽子に、メルトンの背廣に、外套を着て、眼鏡を掛けしが、斯くても、取ぢず、温飽の立食をなすと、は、前代未聞の曲者なり。釦製造所の職工も、皆首を出し、目をパチ／＼して、予の温飽食の姿を見物せり。笑は、ハ、笑へ、天下は己が天下なりと、優然として、又歩み出しぬ。此度は、腹は出來たり、微酔なり、欣然として、進め

ば第三の橋は熊内橋なり其處より橋を渡りて對岸に至りしに熊内橋巡査派出所あり最早此上を究むるの要なしと思ひて岸を傳ひて來し方を望みしが名殘盡きぬは此生田の小野の閑村の景なり仰ぎて見れば摩耶山武庫山等の山脈は此生田の小野に對して恰かも屏風の如き觀あり巒嶽突兀として躍り叫龍虎豹天嬌たり遠く望めば温容の翠黛なれども近く觀れば峰巒崔嵬登る可らずしかも麓は廣野にて西洋館など點々散在する景色言ふ許りなく面白し又布引の瀧の邊は萬木天を刺すが如くなるが嬉しくなつかしきは一際木立繁き間より布引の妙見の五重塔の頭が見ゆる事なりき這般の美景は通常の旅行家の目に觸れぬ所にて諸を知りて生田の小野を尋ねたればこそなれ前に記したる藤原師輔の歌の旅人の道さまたげにつむものは云々より思ふに古此處は若菜の名所にて眉目よき女擧りて野に出でしなる可し求塚に出づる旅僧も一實に目前の所々森をはじめて海川の霞み渡れる小野の景色と言へり斯様に諸曲の文章のみ案じ出す時は只々昔の事のみ思はれつ。

求塚の能は久しき前に梅若にて素人能ありける時子爵前田利徳氏が演せられたる事ありき其時子は同氏のツレ役を勤めて同じ舞臺に出でしが裝束は小面に

白衣衣等にて松風の鹽汲と寸分變らぬ扮装なり是れ取りも直さず生田の小野の若菜を摘む美人なり三井得右衛門氏も予がツレに出るといふ事を聞き込みて頗る評判せられしが扱まづ無事に橋掛の連吟も濟み地の前に坐り小野の朝風まだ森のしづえ松垂れて立ちてスルと樂屋に歸りしに三井元之助氏より忽ち君は舞臺に入つてからシテとの掛合の時にアシラヒを忘れたねと一本極められたり柔らかなりしかども常に能評せし悪口の應報なれば苛らかりき又廊下にて實老人に會へば今のは貴公ですかイヤ結構々々例のお世辭を言へり結構どころにあらす大汗掻きたりき是れにて願ふに梅若實は寶生九郎より人が悪ろし。

斯様に古き事なご思ひ出し又諸を謠ひながら元の道に戻りしがハヤ夜の幕は透間なく下りて彼方の鐵橋の上を阪神通ひの電車が満車電燈を點じて風の如く飛び電光の如く行き通ふ態の奇觀なるに心を引かれ直ちに其方に向ひて新生田川のり場といふ所よりハヤイ動きますチンと駆け出す快速力にて早くも京都に運ばれぬ此日終に求塚は果さざりき。

(其二十七) 枳殼邸

十三景...五輪塔...鹽焼の窟...高さ蔵...

京の六条の珠数屋町



ひたりしに快く承引きて審かに語り給へり其人の談に依つて例の紀行をものすること左の如し。京都市間の町中珠数屋町に東本願寺の別邸にて枳殼邸と稱するものあり是れ融といふ諺にある河原院の跡なり此の諺にワキ僧が夕を重ねあさ毎の宿の名残も重なりて都に早く着にけり急ぎ候程に是ははや都に着きて候ふ此あたりをば六條河原の院とやらん申し候ふと言へる其河原院こそは左大臣源融公の遊園にして五條橋の西鹽釜町より以南八町に亘りたる所なれども今は只其融公が鹽釜を据ゑて鹽を汲みて遊びたる所が枳殼邸の中に存在するのみ他に河原院といふ舊形を示すべき所なし言ふまでもなく枳殼邸は其鹽釜町より以南八町に亘りたる中に位す又六條と



(舎 枕 漱 邸 殼 枳)

枳殼を植ゑしを以て其名起りしなり枳殼とは灌木にて蜜柑に類し夏は白き花を開きて實は干て藥劑とし

は取りも直さず京都の北端を一條として指折り數へ二條三條と順次に橋の名あるにても知るべし六條河原院といふ文字は融の諺に尤も多き故假令京都に遊ばぬ人なりとも其の位置を想像するの要あり此六條通に兩本願寺ある故同寺出入りの人は本願寺法主を稱して六條様といふ敬語を用ゆ枳殼邸より以西本願寺迄の間は珠数屋軒を並べて營業をなす故珠数屋町の稱呼起るなり梅川忠兵衛新口村の段に妾の父さん母さんは京の六條の珠数屋町さだめし今頃は難儀に

あふてゐさんせうといふ其父さん母さんも即ち此枳殼邸の邊に住みしなるべし。抑も當本願寺別邸は寛永年中將軍徳川家光の治世の頃に拜領したるものにて其以前に豊臣秀吉が伏見桃山城の舊稱を移して此河原院の跡を亭館と稱し外圍に

痰病に効あり積殼をば人誤りてからたちを訓するは誤れり。からだちは別に梅橋といふ字あり然れども其積殼は後年滅び當邸亦た元治甲子の亂の時に兵火の爲め灰燼となれり即ち佐久間象山が殺されし年代鳥有に歸せしなり。

まづ邸の中に仕ふる人に導かれて黒き門を入り庭の木戸を開けて見れば満目廣潤池あり鶴遊び天國樂園幽窟仙洞宛然蓬萊宮に入るが如く世にも斯くばかりの所あるかと寧ろ驚嘆するばかりなり先づ第一にあるは雙梅窓と稱して梅樹を多く蓄ふる所なるが是れ當邸十三景の一なり十三景とは滴翠軒傍花閣印月池臥龍堂五松塙侵雪橋縮遠亭紫藤岸偶仙樓雙梅窓漱枕居回棹廊丹楓溪を謂ふ。

雙梅窓を見たる後漱枕居に導かれぬ。こは此庭園の池の汀に作られたる客殿にして疊を敷き池に面したる方は欄干になりて徐ろに水色の融々たるを賞すべく月の夜の風致なぞ思ひ遣らる次に漱枕居を出で、池の前の芝生を傳ひくして行けば此處に二羽の鶴あり白翅を鼓して喧々として池邊に飛び廻る有様是を何にか比ふべき寔に鶴は靈鳥にして仙客は養うて以て其齡を延ぶると云ふ聞くに當邸には鶴四羽あり又小松宮家より送られたる白雁一對ありと池の名を印月

池といふも道理や其形は圓くして中央に浮島あり縁樹蒼々として影を逆に描く其れより橋を渡りて築山に至る迄の間には杜若菖蒲等を水中に蓄ふ又支那の紅葉あり白樹あり彼岸櫻あり皆時來れば陽發すべく養はる橋の名を侵雪橋と名づく此橋を渡りたる所にせいこの蘆せいこの柳と云ふものありいづれも名ある草木なり畢竟此園は四季の草花何一つ具備せざるはなしさて築山に登れば縮遠亭といふ茶亭あり天井の骨は賤ヶ嶽七本鎗の中を三本まで廻附せられて使用せるものなりと云ふ何ぞ夫れ珍奇なるや。

縮遠亭



案内の人は此處にても又室の戸を残らず明け放ちて賞翫に便ならしめしが眼下の池中に一基の五輪塔の立つを指してあれこそ融公の塚にして此庭を作りし石川丈山が其舊跡を證する爲め塚にして遺したるなりと語られぬ。此築山の下に一坪ばかりの岩窟ありしがこれは融公が鹽を焼きたる跡にて形は陸奥の千賀の鹽窟を取りたる由依りて能々見るに中は何やら竹篋にて蓋をせり又池の邊に石燈籠の頭のなきものゝ如き石の臺

を大切に据ゑたるは是れ融の用ゐし鹽燒きの釜なり
と云ふ、あゝ丈山の志あればこそ今の世にも君が心を



れば此鹽籠の前に根が一つにして幹が行儀善く五つ
に別れたる不思議の松あり是れにて十三景もハヤ半
に至りぬ。

融といふ語は人も知る如く河原左大臣源融公が六條
河原にいみじき家を作り池を堀り水を湛へて毎日潮
三十石ばかりを運び入れて海底の魚介を住まじめ陸
奥國鹽籠の浦の眺望を移して海士の鹽屋に煙を立て
て遊びしといふ物語なり遊ぶも事にこそよれ王城の
地にて卑しき賤の業をなして其風雅を喜ぶとは頗る
すねたる人と謂ふ可し史を案するに融大臣は宇多天
皇の朝の寛永七年紀元千五百五十五年に薨せりとあ

ればかゝる奇行ありしは今より千餘年前の事なりさ
ても古人のゆかしさよ。

予は融の語を好むものなるが殊に眞にやいにしへも
月には千賀の鹽籠の浦わの秋も半にて松風も立つな
りや霧の離の島隠れいざ我も立ち渡り昔の跡を陸奥

千賀の浦わを詠めんや
遊趣味の優美なる事譬ふ
るにもなし詠の節も此
邊は諸流共に鎮り返りて
妙言ふ可らず予は毎も此
所を謠ふ時に謠の徳の難
有さに嬉しさに涙零るゝ
なり然れども今は此景色
は全然石川丈山の作れる
庭園と化したるなり謠に
曰くワキ如何に尉殿見え
渡りたる山々は皆名所にてぞ候ふらん御教へ候へし
テ嗣さん候皆名所にて候ふ御尋ね候へ教へ申し候ふ
べしと是れより音羽山今熊野稻荷藤の森深草木幡伏
見竹田淀鳥羽等が皆此所より見ゆるやうに記しわれ
ども現今は當邸の周圍二町四方は黒塚を高く廻し高



(枳殼邸從書)

本環合し、周囲は固より人家稀比し、塚の外には電車が通るといふ有様なれば、漸く音羽山ぐらゐが見ゆるのみにて、其他の名所は全く眼界の外にあり、又西の方を向きてあれこそ、大原や小鹽の山も、今日こそは御覽じそめつらめと諺の文句の如く、其山の景を求めんと欲しても、是又家屋の爲めに隔てられて見るを得ざるなり。

十三景の中を五松塙まですみし所にて鹽竈の舊跡を見たるは忘れんと欲して忘る可らず、其より又回棹廊といふ廊下を辿りしが、これは池に架したる橋にて、形は殿中に掛りたる廊下の如きものなり、強ひて形容せば、瑤臺玉樓とや稱すべき。此廊の對岸に紫藤岸あり、名の如く岸を傳ひて水中に藤棚を設く、五月の候は、嘸な美しかるべし、既にして回棹廊を渡り、此度は元來し方に退かんとする所に、丹楓溪ありしが、こは楓樹のみの一叢なりき、斯くて又十三景の外なる代笠といふ農家の風の亭をも見更に、傍花閣と名づけたる支那の臺閣の如き、兩出口の建物を賞し、其より印月池ならぬ別の小なる泉水に面したる臨池亭にて始めて憩ひ、一椀の茗を啜りて、今來し方を顧みれば、祥雲瑞氣、濃かにして、年三つ三つ若くなりたるが如き心地しぬ、泉水を見れば、金鱗銀鱈、各尺にも餘れるが、波瀾として水中を跳る風

情又なく愛でたし、此臨池亭は八疊六疊四疊の客席なるが、是より折曲りて、滴翠軒と稱する方も同じく八疊六疊三疊の客席なり、以上都合十一景濟みて、残るは臥龍堂と偶仙樓となるが、是れは未だ建築せずにありき、扱一憩したる後、歸路に就かんせしが、其時案内の人は曰く、當邸は先にも申し、如く一度兵火に罹りたれば、融公より傳來のものにては、只彼の高き藏のみなりと指すにぞ見れば、如何さま常のものよりは高き藏の屋根が見えたり、此故に此倉より見渡したる南方の道路を高倉通と云ふ、されば予は不明門通と共に二つの町名の所由を知るに至れり。

是迄は同邸門前に住居する客僧の語物を、予が筆にて文に綴りたるものなるが、さて門前を去りて、今言ふ高倉通に掛り、稚松尋常小學校の前を過ぎ、五條下りたる所に、曹洞宗の宗仙寺に入り、墓地に行けば、此處に寺用の井あり、石の井戸側に、維井の二字を刻む、是れ融公が所謂維ヶ島の舊跡なるよし、此處をも去りて、五條通に出づれば、町の曲角の所に、五條通宮小路西入鹽釜町といふ木の札ありき、其より歸路に向ひ、新京極の熱鬧場裡に入り、融大臣を祭りたる天満宮の神社に詣で、此日の行を終れり、因に此神社は寺町通錦小路に在る故、俗に錦天神と稱して、頗る信者多し。

(其二十八) 雲林院 『雲林院』

……寂びれたる雲林院……大徳寺……
……観阿彌父子の墓……

雲林院はウンリキンと讀む可
きなり子は實に一月十三日の
頗る寒き日を以て此雲林院を
訪ひたりきまづ朝疾く起きて
諸廻國記の初出の吉祥を祈り
其よりポツリ〜と西陣まで
歩み二三の訪問を済まして次第
第に紫野の方へと進みたりし時
はハヤ正午にもなりにけり紫野と
いへば京都の西北隅にして要宕郡
に屬す。



大宮通寺内上ルといふ辻まで來り立ちて前面を見れば船岡山は亭々たる古松千年の翠を疊んで建勳神社の華衣木立の間より微に見え透さぬ山下は一面の廣野にして牧童牛に鞭ちて一條の畦路を傳ひ行く跡より朔風砂を撒き颯々ど鳴り響きては止み又豁然として吹き起る寒がりはこれを見るのみにも慄へて得道まぬ可しものと此街道は金閣寺通の辻返にして春暖

かに櫻花の頃にも至りなば同寺に詣づる地方の人が轆轤として腕車を驅る事夥しく殆んど寧日なしとも稱す可きなり思ひ出すだに京都名所中に於ける金閣寺の勢力は著るしきものなるが其れに引替へて今説き出す雲林院は哀れに物淋しくあるかなきかをさへ辨へぬまで寂れぬ所を問へば即ち此大宮通寺内上るの邊にして船岡山に面し大徳寺の前に當れり古桓武天皇の遷都の頃には此邊は一面の曠野にてもありしにや帝の御獵さへありき其の故にこそ紫野の名もあるにて雲林院大徳寺の在る附近を總稱して紫野と云ふ。

大徳寺の前に粗末なる土堀を繞らし中に二間間口奥行三間の小堂ありて何の風情もなく何の造作もなく寂々寥々たるもの之を雲林院と云ふ堂の鴨居に雲林院の三字なくば村の鎮守の社とも見擬ふ可し否村の鎮守たりとも今少し邊幅を粧へり誰に「誰そやう花折るは今日は朝の霞消えしまゝに夕べの空は春の夜の殊にのどかに詠めやる」とわれど今の雲林院の境界内には櫻の枝はさて置きて一木もなく一葉もなし又「いざよらば木陰の月に臥して見ん暮れなばなげの花衣袖をかたしき臥しにけり」といふ文章の如き詩情は如何にしても思ひ浮べす二足三足歩めばハヤ鼻も支

ゆるばかりの小域なるは返すくも口惜しき次第なり。猶いでくさらば語らんと花の嵐も聲添へて其品を語りけりなほの文句より想ふに其古は境内潤大にして櫻花爛熳たるの時もありしならむ。珠氈玉雷朝の露を含んで旭日に笑みし風致もありしならむ。春風一陣落花繽紛として雅客の玉盞に飄々たるの好景もありしならん。然るに今は萬象霧散して辛うじて行客の足を容るゝに止る忌憚なく評すれば諸廻國記中の名所に於て最も零落したるものなり。

扱又此雲林院の濫觴を尋ねるに人皇五十三代淳和天皇が當時此處に離宮を營み雲林亭と名づけ給ひしが始にて後世離宮を毀ちて寺となし雲林院と稱し千手觀音を安置す彼の所謂六歌仙の一人なる僧正遍昭も此雲林院に住みたりき。斯程の由緒ありながら名は朽ちて守る人のありやなしやをさへ知らぬまでに至れるは嘆すべし。

雲林院の真向ひに有名なる大徳寺あり。此寺に定家の謠の主人公なる式子内親王の墓ありとは豫てより聞きたる事なればいでや詣らんと思ひ門を入りて松籟颯々ど鳴り響く境内を進み行けば程なく山門の所に來りぬ。此山門の傍に浴室といふ名の建物ありしが如何なる時に用ゆべきにや。泉涌寺にも此の建物ありき。

其より本堂の前に行けば釋迦如來は此の亘寒凛々たる中に扉を開きて金色の王體を露し給へり。わら尊と



一拜して法堂の傍を過ぎ本坊に至りて拜觀料を喜捨して案内を請へばハイ、さうか此方へとて腰の曲りたる老人はさも寒さに堪へぬが如くにて先

に進みぬ。此れが探幽の猿廻し此處にござる御木像は織田信長公此中にござらつしやるのが開山の大灯國



師此は後醍醐天皇の御宸筆と種々説明の下に一巡したりしが最も感服せるは後醍醐帝の御手跡の美事なることなり。嵐山の麓の某亭にて古畫のみ多く陳列したるを見たる時にも、帝の水莖の跡に恐縮したりしが今復た御眞筆を拜觀して更に尊崇の念いや増しぬ。恐れ多き申狀ながらそれ人の形見には手跡にまざる物あらじと、一夜討會我の謠の文章にもあるなれば書

は能く書きたきものなり。
 開説大徳寺は後醍醐天皇の草創に係る日本有数の禪寺にして臨濟宗に屬し、開山は即ち大燈國師なるが應仁の兵火のため全焼し、其後奇骨一休和尚亦之れを再興す。



(寺徳大)

一休が事は知る人多ければ語るも管なり。千利休の墓もありと聞く生花遠州流の鼻祖たる小堀遠州の墓も當寺にあり。殊に其遺跡孤茶庵は名高きものなり。此外織田信長、同信雄、小早川隆景、片桐且元、里村紹巴の墓等詮じ來れば限りなけれども予が尋ねるは式子内親王の墓と能樂始祖觀世觀阿彌の墓の二つなり。依りて其の事を本坊に就きて問ひしに、觀阿彌の墓は此の裏の眞珠院にあれども式子内親王の墓は審ならず或は龍光院なるべきか、或は養徳院なるべきか、二者いづれかの中を尋ね給へと言ふ。茲に附記す當寺は末寺十數ヶ所ありて皆院號或は庵號を有し皆な大徳寺境内に存在す。よりにて本坊を出でて又歩み運びしが境内凡そ七萬坪此廣漠たる中を稜々たる朔風と颯ひて眞珠

庵は何處ぢや、龍光院は何處ぢやと尋ね廻る程に、足が草臥れて候え、生憎な復たしても松の風恰も雷の如し。

漸くにして見出したる眞珠庵の門を入り、ガラ〜と戸を開けて頼のも〜と音訪へば、ドーレと應へて一人の雑僧出で來り、予の願意を聞いて頻りに名刺を出されたしと迫るに、予已むなく五號活字の小なる名刺を出せば、忽ちにして、いざとて墓地に案内せり。其後に跟いて往きて見れば、初代清次五百年忌建之といふ新しき墓標を立て之を繞れる石の玉垣の扉には、十二の矢車の紋所あり、觀世家の紋章は十二の矢車にて寶生家の紋章は九つの矢車なり。是れ觀世實生は同家とも言ふべきにて、二代世阿彌の弟の蓮阿彌が別に寶生家を起したるなり。

予は暫く墓の前にて沈吟し、扱一拜して徐ろに去りけるが、思へば君が能樂といふものを始めしより茲に四百餘年其間世運幾度か變轉したりといへども、斯道は一貫して今尚ほ榮え、延いては予の如き曲者現れ、一管の筆を携へて縱横天下に咆哮す。是れも偏に君が賜物なりけり。君は結崎次郎清次と稱し、又觀世觀阿彌と號す。亂舞の道を以て將軍足利義滿に仕へ、其後子孫連綿として以て今日に至る。寔に藝術界の偉人と謂ふ可し。

見るに此墓には塔二つ立てるが、一は親阿彌、一は世阿彌にて親子なり。又此墓地に茶人の元祖珠光の墓あり。珠光は千利休よりも以前の人のにて、我朝の茶道を草創せし人なり。猶石にて造りたる圓き輪を塔の上に載せたるがある故、これは何ぞと雖僧に問ひしに、其は和合塔と稱して多くの人の骨を寄せ集めたるなりと教へぬ。

それより雖僧に厚く禮を述べ辭して龍光院に行き、式子内親王の墓は何處ぞと問ひしに院主留守にして分明ならず、足を勞して尋ねれども見當らず、只だ小堀遠州の好みの茶席のみは美しく清められ、恰かも主人遠州の在すが如し。それより又養徳院に行きしが同じく分明ならず、悄然として歸途に就けば、一天掻き曇り、京都名物の霰は颼々として降り來り、面を打つこと頻りなり。奚ぞ夫れ諸廻國の難行なるや。

(其二十九) 雪の嵐山

嵐山



(山嵐の雪)

二十四日の朝、眼覚めて見れば、雪霏々として窓外を掠め、東山は模糊として、其影を辨へず。只看る満都一面の銀世界なり。窓外亂れ飛ぶ蝴蝶の影客來つ

て都て驚愕の容を帶ふとは先人の吟びたる詞なるが、あゝ斯る日ぞ誰か來れかし。清水寺や如何ならん。圓山の雪も悪しからず、嵐の山ぞ偲ばるゝと、とりく名所を數ふる中に、恰も好し。晝過ぐる頃、玉突の友人、河村菊雨氏來られければ、相伴うて峨嵋に向ひぬ。

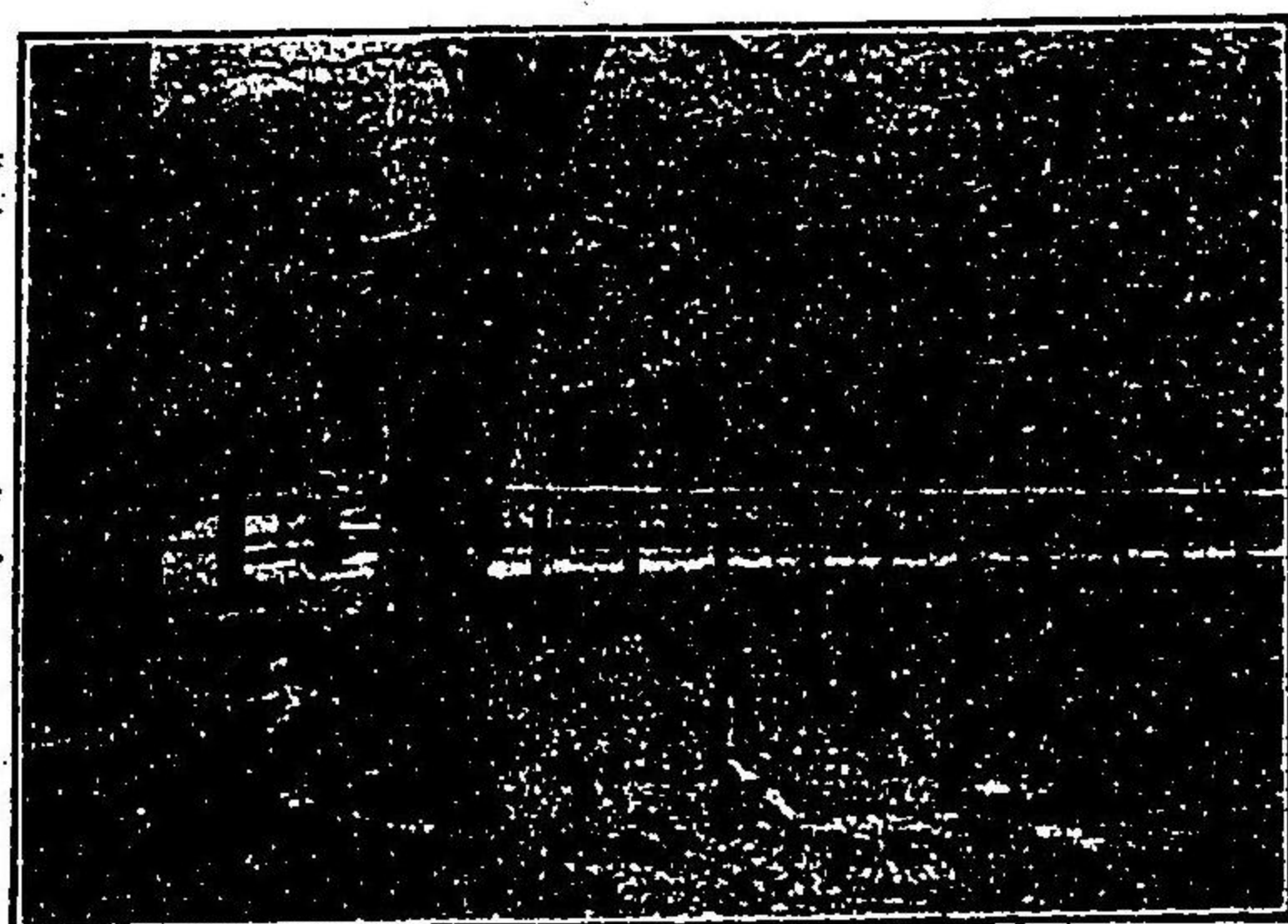
佐野の源左の其れならねど、ちぎれたる具足もなし。錆びたる長刀もなし。飄々として浮世を渡る身、輕さは、オ、車夫二條停車場までと言ふ口の下に、ハヤ動き始めぬ。竹屋町をば真直に、二條の城に來て見れば、雪は益々降りしきるにぞ、外廓一帶、白皚々、御堀の松の吹雪に、惱む景色は、東京の櫻田門にさも似たり。漸くにして、停車場に着きぬ。響くや、轆々、流車の音、唄ふや、啞々、鳥の聲、遠

雪の嵐山

山近峰雪に埋れて花落ち花開く佳景を右視左阿花園
 驛もうち過ぐれば雪の名所ぞ近きぬ嬉し急げ未だか
 と乗客一同の立騒ぐこそ道理なれ玉の礫は窓を打つ
 枯れたる木にも花ぞ咲く野面田面も一様に銀の光を
 放ちて君が代を壽く雪の萬歳樂あら有難や早くも嗟
 峨に着きにけり嵯峨野に早く着きにけり
 予は數年京都に滞在したるも雪の嵐山は今日が始
 てなり只驚くは我等の一行のみならず停車場より出
 づる人の多くはいづれも雪見客にして怪しの者に取
 捲かれたる微醉の紳士あり良家の一族あり又寫眞機
 携帶の人は二三に止まらず是等皆趣を接して次第次
 第に嵐山の方に向ふ停車場より波月橋までは約四町
 もある可し今日は天龍寺納豆の看板もなし野宮の竹
 杖賣る店も出でず嵯峨の町は只風に舞ふ銀沙の中に
 包まれて高樓と言はず雪隠と言はず皆一體に美化し
 て王座又一點の穢もなし程なく波月橋の前に來りぬ
 仰げば銀屑空に満ちて嵐の山は半ば其影を糝糊の間
 に藏め半ば其體を現す見るに雪は簇々として山の常
 磐木を蔽ひ風の渡る毎に翹々として枝をたはむ景色
 之を何にか譬へん吾人庭園の松に雪の積りたるさへ
 棄て難きに況してや此れは屏風の如き山の全面を領
 せる亭々たる古松に玉瑤を彫めたるに於てをや雅客

は松を以て鶴は棲む君子の樹風は拂ふ太夫の枝と稱
 揚す實に今日は此山に銀鶴聚るかと疑はる奚んぞ夫
 れ嵐山の雪の絶景なる哉天下斯の如き美景ありや花
 の嵐山も見たり青葉の嵐山にも遊べり紅葉の嵐山も
 賞しぬ然れども雪の嵐山は是等より數等の上に出で
 ぬ予も柳雨氏も茫然として橋上に佇立する事稍半時
 ばかりす

時に首を回して舊三軒家の方より大堰川の岸邊を見
 れば雪中に寫眞機を立つる雅人あり岸邊に舟を繋ぎ
 て鏡笠着たる人が手に網を持ち何やらん水中を覗ふ



(嵐山渡月橋)
 嵐山渡月橋の茶店は阿波
 點首頻りに客を招く扱又
 大堰の水は玲瓏透徹以て
 水底の石を算すべく而か
 も流れは淙々として山を
 月繞り一曲筏を浮べ末は桂
 川に通す筏の上は鶴毛降
 り積りて一羽の鶴鶴照々

として其間を飛び交ふわ
 わ是等の風景を繪畫にせ

すして又た何をか俟たんや嵐山といふ謠曲に取りわ
 き花の名所とは何とて定め置きけるぞとあれど予は

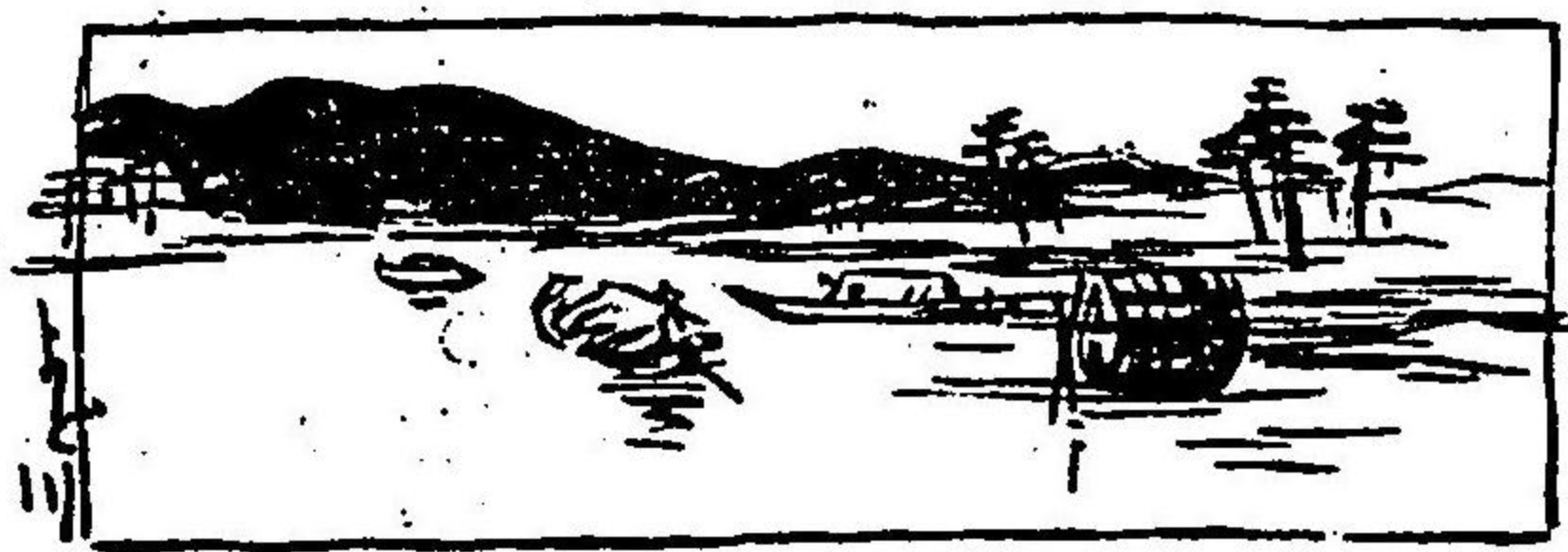
今日よりしては雪の名所と言んのみ須臾にして予も
 掬雨氏も渡月橋を過ぎ櫻林を通り越し、が此邊より
 は山の美も大に遜色あり蓋し嵐山は渡月橋の東端に
 て見るに止る可きか斯くて此度は山の麓をど川の西
 端を歩みしが今日の寒さにて端艇屋はなかりき扱も
 口惜しき哉今の先流車の時間を氣遣ふ餘りに寫真機
 を打忘れたれば切めては勇を奮つて端艇を縦横に漕
 ぎ廻さんものをと悔めども詮方なく掬雨氏共々傘を
 かたげて藏王権現より戸無瀬の瀧を過ぎ千鳥ヶ淵の
 邊は兩人曳々聲して駢け上りぬ千鳥ヶ淵といへば大
 堰川中の深潭にして底は藍を湛へ附近の水面は巖石
 疊々として見るも物凄し此絶壁より更に向ふを見上
 ぐれば龜上の遊一峯開けて一峯懸し是れも又雪景凡
 ならず思はず兩人立止りて興に入りぬ
 程なく嵐山温泉に着きしかば先づ静かなる一室を命
 と一浴して後手帳と鉛筆を側に置きお菊さんといふ
 女中の酌にて兩人して數本を傾け酔後欄に倚りて頻
 りに川の清流を愛す蓋し數日の勞を慰するに足れり
 菊女曰く今日も先刻異人はんが保津川をお下りやし
 どすえと如何様雪の保津川も又妙なるべし折しも二
 階座敷にては客と先斗町の藝子らしき一團が餘り粹
 ならぬ根柢を聞かしぬ唯笑んぞ彼等に負く可きと力

めども此方は六時の流車を氣遣ふ身なれば敢て對抗
 もせず匆卒辭して此度は和船にて川を渡り流車にて
 京都に戻り先の粹ならぬ根柢の忌々しさに四條邊鴨
 水に臨める旗亭に投じ祇園の尤物を捉へて復び献酬
 の中に入る此頃京都の花街にては次の如き唄流行す
 日本の兵士と時計の針はいつもカチ〜進み行く
 チリップ、チャラップ、チャラップ、アツブク、チキリキ、
 アツバツ、パリウセイ、アツブク、チキリキ、チャン
 節は二上りにてチリップの前の文句は數種あり畢竟
 チリップ、チャラップ以下の奇言は滿洲語なる由にて、
 日露戦役の折彼の地より歸れる兵士の創作なりと云
 ふ。

(其三十) 男山八幡宮

『男八幡』
『放生川』

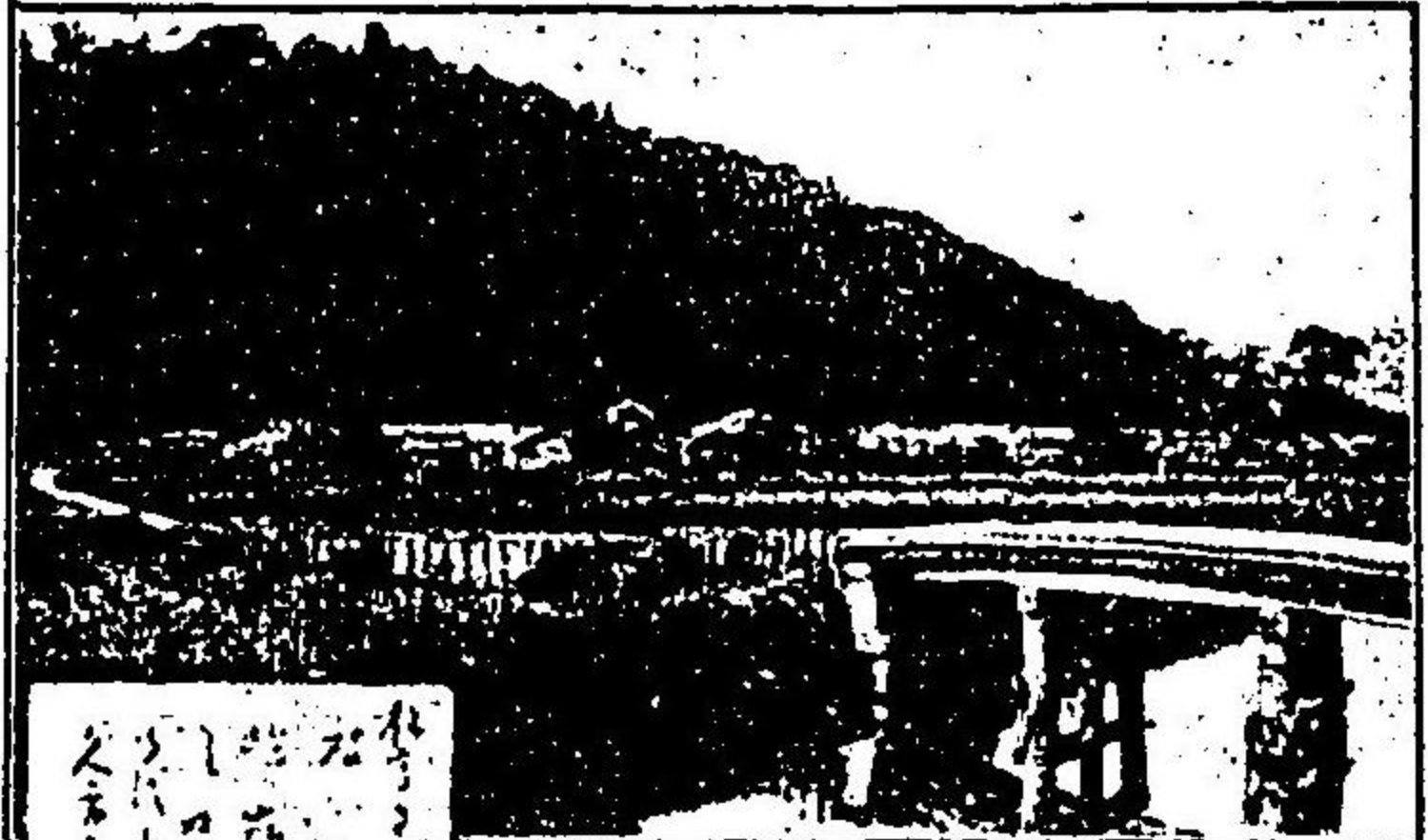
……参詣の途中……黄金の樋……武内宿禰の小社……
……白羽の箭……



二月十八日は男山八幡宮に詣でぬ。まづ午後二時の流車に乗らんとて京都驛に行き山崎までの切符を購入。毎年一月十五日より二十日まで厄除祭を行ふ事とて鐵道院は割引法を設け臨時列車を増發す今日も即ち其例なり別に二月初卯にも神事あり八月には大祭あり又毎月十五日を以て小祭日と定む其度毎に参詣の人出多きは有繁に官幣大社の威嚴なりけり。

車内はギッシリ詰りたることゝて固より身動きも叶はずやがて山崎驛に着けば人波を打ちて肩摩殺撃子は親を呼び親は子を喚ぶ雜鬧は宛然東京にて二十一日の川崎の初大師に詣でたる時の如し停車場を出でて一條の畦路を傳ひ淀川の堤防まで行く間は約三四町もある可し其間漠々たる郊野を寒風に面を撲たれながら歩み行きしに前にも後にも八幡詣の人陸續たり。而も流車の着く度に此等の人を吐き出すれば晝夜を推算する時は何萬といふ數に達すべし矣んぞ夫れ善男善女の多きや程なく堤防を過ぐれば渡船場あり此の附近には癩病跛盲目の世にも憐れの乞丐共が五歩に迎へ十歩に屯し手を合せて旦那様や御新造様や難儀な不具に一文やつてお呉んなさいと泣く聲喧し。渡船場には巡査出張して非常を制す漸くにして舟動くにぞ立ちて四方の山邊を見渡せば男山は盤紆一廓をなして正面に聳ち老松を戴ける景色亦一入の眺めあり弓八幡の謠に松高き枝もつらなる鳩の嶺登らぬ御代は久方の月の桂の男山げにもさやげき影に來て君萬歳と祈るなる神に歩みをはこぶなりとは寔に今日の我身の行を叙るすが如く深く作者の筆致に感服せりあゝ實に今や天下は泰平なり時は正月なり心なき賤の童なりともなほかは大君の萬歳を祝せざらんや祝して神に歩みを運ばざらんや更に眼を轉すれば比叡山は巖として屹立し山城の雄を其の一身に聚めたらん如し又今來し方を願れば天王山は山色蒼々として獨り山崎の一角に陣し長に惟任日向守の千古の怨みを語るに似たり眼を閉づれば枯梗の紋の旗章千なり瓢箪の風に翻へるさまさへ髣髴として浮び出でぬ扱又淀川は長江一帶滾々として水光天に接する

が如く、中流に淺瀬ありて丘を現じ、岸には蘆荻風々として風に戦げり。空を見れば、近きは朔雲一團をなして、忽ち日光を覆ひ、又忽ちにして離散す。遠きは断雲驟霧として漸く其影を小にす。時に何處ともなく流笛一聲、長河の眼を醒す。察するに、淀川通ひの流船が此方に近づくなるべし。此間對岸より歸る船三艘あり、又我等と行を共にする船も四艘あり、いづれも客を満載せり。程なく船對岸に着けば、乗客皆競うて土手に上り、其より上橋を過ぎり、八幡の花街を他所に見て、心は一筋に神の宮居をぞ急ぐなる。予は當所は會遊の地なれば、人に事問ふまでもなく、忽ち道を横に切れて、畑中を過ぎ、山路に懸り、其より數十段の石燈を上りぬ。東京の愛宕山の男坂程の急にはあらざれども、羊腸たる山路に敷かれたるものなれば、一步は一步より峻しく、老人小兒は皆氣息奄々として「オ、辛んど」との聲は、送み代りに交はされたり。さて漸くにして登り果つれば、我も人も皆背に汗を掻きて「ホッ」と口より吐く息は、綿の如く白し。此石



(男山邊)



(男山八幡一橋居)

段の盡くる所に狩尾社といふ小社あり、其よりは一條の山路なるが登りては下り下りては又登る事約七八町に及ぶべく、性急なる者は心焦ちてもどかしく思ふ所なり。漸く宮居近くなれば、神樂の音聞え始む。冬枯の山野に神樂の遠音の聞ゆるは床しきものなり。斯くて愈歩む程に神樂の音は愈近くなり、遂に社頭に達しぬ。石の華表を入れれば、石燈籠兩側に立ち、飲食店其他の露店は手薬煉引いて、客を待ち置く。鳩の家など、稱して客を呼ぶ家あり、是れ男山の異名なる鳩の峯に採りたる名なる可し。先づ入口に石の華表ありて、石燈籠立ち並び、其盡くる所に門ありて、次に神殿となる風景は何とやらん。東京の芝の東照宮の如き、俵あり社頭に石燈籠の多く整列するは、此處と京都の愛宕山との二所なり。門の前は往々來るさの人にて押し合ひ、壓し合ひて、其混雑はすさまじきものなり。門を入れれば、銅の神馬あり、又た神殿は唐破風作りにて、左右に廻廊あり、一見したると

ころはさのみにもあらざれども、拜觀料を納め、内陣に入りて見れば、有紫に其の宮居の凡ならざるが知らる。まづ内陣にて貴重品の黄金の鑄なり、こは神殿の雨樋にて豊田秀吉の寄進に成もの、由何様妙なりと思ひて首を伸して神殿の棟を覗き込み、折から例の案内者は奇なる聲を發して是れなる黄金の鑄は長さが十三間、幅が三尺、厚さが一寸二分あり、ますと耳の側にてガン／＼と叫びぬ、黄金には相違なきも鍍金なる事は明かなり、更に武内宿禰の小社あり、其より廻り廻りて正殿の前に至れば、紫の菊の紋ある幕を張りて、神を立、橋の木一對を置けり、此邊總て瑞籬を以て圍み、籬の腰より上は組格子となり、花鳥の彫刻あるが、就中左甚五郎の作の鳳凰は、太く注意を惹きぬ、是等の花鳥は悉く五色を彩り、金銀を鏤め、燦として目を射るに、愈々東京の芝の東照宮を偲ばれぬ、正殿の中の位は、應神天皇にて、東は神功皇后、西は玉依姫なり。

史を按ずるに、人皇五十六代清和天皇の朝、武内宿禰の後裔に行敷といふ沙門あり、南都大安寺に住ひしが、常に宇佐八幡を信じ、勅許に依りて終に其靈を此山に勸請す。時は貞觀元年、今より千四十七年前の事なり。降つて元祿年間、徳川綱吉又之を修理すと云ふされば、豊前の宇佐八幡春日の手向山八幡と共に人呼んで日本

の三八幡と稱するなり。謠曲の弓八幡の主人公の高良の神と言ふも、武内宿禰の事なり。又放生川のシテも同じく武内なり。故に當社にある武内社は假令末社たりども、大に謠曲の道に關係あり。弓八幡の謠曲に眞如實相のつき弓の八百萬代にいたるまで、動かす絶えず君守る高良の神とは我事なりとあるは、能くも其情を描きたり。前にも記し、如く正面に應神天皇と神功皇后



(社本宮幡八山男)

と玉依姫との神殿ありて、其背後に宿禰の小社設けられぬ。但し同じ内陣の中なり。嗚呼、公は生きては精忠を抽んで、三代の帝に仕へ、死しては靈後に侍して君を守る。寔に人臣の龜鑑と謂ふ可し。

放生川のクセに人の國より我國、他の人よりも我人と誓はせ給ふ御恵みとあるは、外國よりも先づ我國を守らんといふ神の御告なるが、是等の文字は謠曲中の出色なり。弓八幡の後も同じくも、とよりも人の國より我國、他の人よりも我が人と誓ひの末も明らけきと言へり。方今の如く、只泰西に

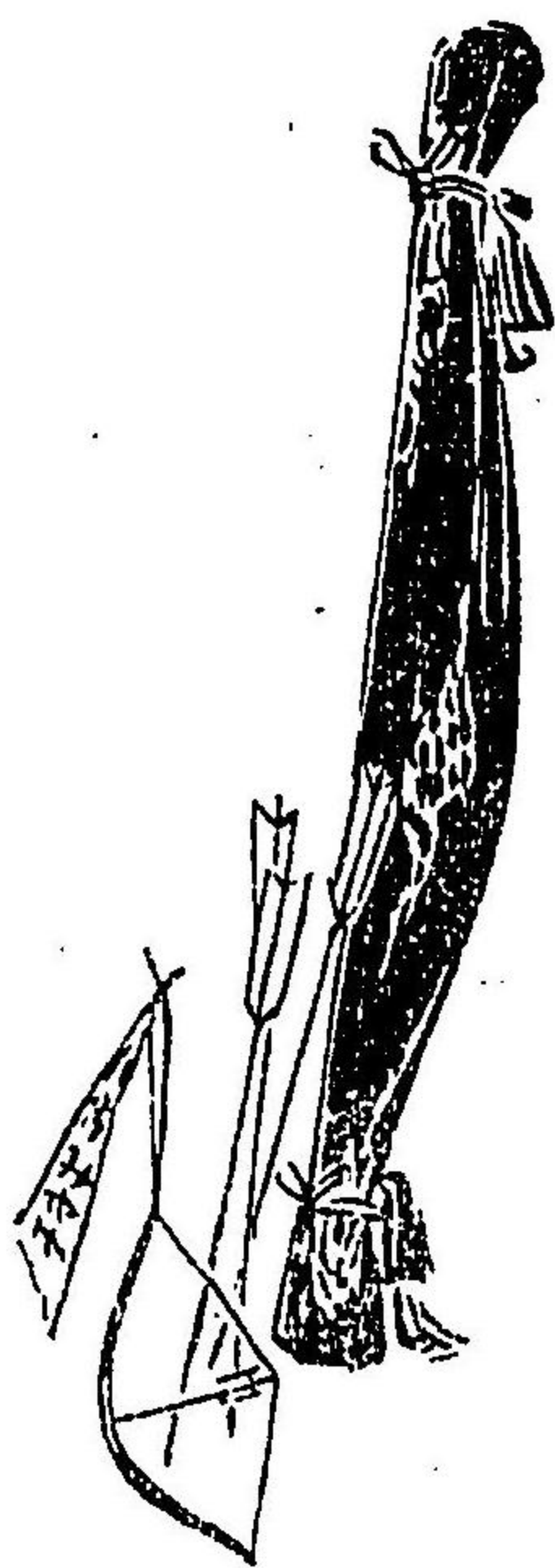
のみ傾きて我國の粹を忘るゝが如き習慣にも善き戒めなり。又他人の非のみを數へて我身の誤りを顧ざる如き人にも天晴の訓戒なり。是れは宇佐八幡の神託なる由。宇佐八幡も、手向山八幡も、男山八幡も、神體同一なれば、其御告も亦等し。寔に日本には三千有餘の神社あり。斯程の神託ありしは、八幡のみなり。豈に夫れ仰がざる可けんや。

神殿の前に神子二人、囃子方三人ありて、五錢以上を納むる時は御神樂を舞ふと聞きければ、何も厄除なり。今年も亦、湯津日の崇りなきやうにとて、墓口を開きて、銀貨を献すれば、忽ちにして神子は舞ひ始めたり。一人は笛吹き、一人は太鼓を打ち、一人は金を摺りて拍子を取るかくて、神子は鈴と矢とを持ちて三遍程グル〜と廻り、其鈴を奉納者の頭の上に持ち來りて、ガシヤ〜とガシヤと戴かしむ。此間實に三分間程なるが、扱々神子と云ふものは善き商賣なり。いろは骨牌にある三遍處つて煙草にしよと云ふ事は、蓋し是よりや始りけむ。又彼方には護符の種類を堆く積める處あり、參詣の人々其前に群集す。なほ其前には、龜末なる白羽の矢をも同じく立て列べたり。此箭は今日の八幡詣の人の多く手にするなれば、己も好奇心に駆られて、幾らと問へば一本五錢なりといふ畏つて候ふと、其より此の箭を其處

此處より買ひ集め、又神殿の前の鳩の餌を一度に十數皿も買ひ上げて、悉く地に撒けば、鳩は矢庭に窓の間より猛然と飛び下り、尖嘴相争うて、忽ちの中に一粒も餘さず、啄み畢りぬ。

先に予は參詣に來る道すがら、歸途に着く人の多くが矢一本づゝ持てるを見たりしが、更に不審なるは、未だ參詣せず、是より予等と同じく詣らんとする人の二三も、既に矢を持參せる事なりき。鳩の餌を賣る老婆を捉へて種々の事ども訊くに及んで、即ち此矢は厄除にて、受けて歸り家に置く時は、惡事災難を遁ると云ふ。斯くて次回に復た八幡に參詣する時に、其當人か或は其家内の者か、先に受け來りたる矢を持參して、元の神前に返すといふ法なりとぞ、されど多くは受くる時は受けて、態々又元に返す人は稀なりと云ふ。昔氣質の人ならば、卒さ如らず、當世には一旦購ひたる矢を元に持ち歸り、又新に購ひて受けて歸るが如き、正直者の少きは、亦是非もなし。白羽の矢の物語を聞きたる後門を出で、石燈籠のある處に引返し、が道の左右に列なる露店の多くは、玩具の弓矢と紙製の鯉とを鬻げり。神前に於て既に矢を受けさする次第なれば、弓矢の玩具こそ道理至極なれ。是にて思ひ出すに、「弓八幡」の謠も前段は弓と矢とを主とし、「神の御代には桑の弓、蓬の矢にて

世を治めしも直なる御代のためしなり、よく〜
 給へどよどあり、續きてツキなる陪從とシテなる老翁
 どの問答にワキに〜
 顯はれたりまづ其弓を取り出だし、神前にて拜み申さ
 ばヤシテ「いや〜」弓を取り出だしては何の御用のわ
 るべきぞツン昔し唐土周の代を治めし國のためしは
 シテ「弓箭をつゝみ干戈を納めし例を以てツン弓を袋



に入れシテ「劍を箱に納むることツン泰平の御代のし
 るしなれどあり即ち此意を究むる時は弓を袋に入れ
 て神前に納めよと言ふ事なり弓を納むるも矢を納む
 るも納むるに變りはなし、扱は一旦五錢にて受けて歸
 りたる矢を次回に又持參して神前に捧ぐるが謡曲の
 弓八幡より考ふるも神慮に適ひたる業なりかし、猶歸
 宅して後謠本を開き見るに今日は當社の御神事とて
 參詣の人々多き中には是れなる翁錦の袋に入れて持ち
 たるは弓と見えたり、そも何處より參詣の人ぞどあり、
 さすれば受けて歸るは、畢竟次回に神前に捧ぐる爲め

にこそあれ、あゝ白羽の箭一本にて復た新に謡曲の趣
 味を益す、あゝ面白哉斯くて箭の所由を會得したれ
 ば、社を辭し間道を下りて女郎花塚にと急ぎぬ。

(其三十一) 女郎花塚 『女郎花』

……長者の別荘……放生川……



(塚花郎女)

男山八幡より直ちに志水行
 きの間道を下りたるは可
 れど道教ゆる人の言葉に伴
 わりたる爲め多くの時間を
 費し漸く其の方面に向ひた
 る時には、最早暮色迫りて刻
 刻暗くなりしも折角此處ま
 で來りて引返すも残念なり
 ど思ひて、強いて歩行を續けつ、漸くにして十町餘も南
 に進み、町端に來りし頃、不圖見れば志水の町に響きた
 る豪家の別荘あり、其前に一叢の笹藪ありて、中に石塔
 立ち、石の塔の繞れるもの即ち女郎花塚なりけり、此を
 ば彼の眞偽定かならぬ嵐山の前の小督塚に比ぶれば
 石の塔だけ添加なり、見渡せば其別荘に積きたる野外
 は一面の圃圃にて、滿目寂寥、一木一草の目を喜ばすに
 足るものなし、女郎花の謠に、「扱も男山麓の野邊に來

て見れば千草の花盛んにして、色を飾り露を含みて、虫の音までも心有り顔なりとある故子は今少しく野趣に富みたる所と想像しけるが、来て見れば色も香もなく、荒烟孤村を籠め、草枯れ蓬は断え、風悲み、鳥愛ひぬるといふ状態なり。猶同じ謠に泣くく死骸を取り上げ、て此山本の土中にこめしに、其墳より女郎花一本生ひ出でたりとさへあれば、假令女郎花はなくとも、色ある木もて取繕はれたるなるべしと



(小野頼風塚)

察せしに實際は大に異れり、月は断碑を照らして、鴟梟叫け、ひ風は荒壘を渡りて、狐狸驚くとは蓋し此邊の情致に適切なり。あゝ女郎花抑も御身が小野頼風を怨みて放生川に身を投げし時の思ひは如何にぞや、夫れ貞節氷霜を凌ぎ、操守蓮菊を壓するは女の世に處する道なり。長安一片の月、萬戸衣を掃つての夜に當つて、恨然として、遠人を思ふは、淑女の情なり。御身遙々都より八幡に來て見れば、契りし頼風はあだし女に心を移して再び俱に語るべくもあらず。茲に於て、恂然一躍身を殺して以て憤を舒ぶ、女郎花の生ずるも道理なり。斯く

て千有餘年の後までも、諸物語となりて、人口に膾炙す。頼風の罪亦大なる哉。ざるにても戀に敗れし麗しき乙女の女郎花こそ憐れなれど、沈吟時を久うしたる後、此處を去りて、長者の別荘を一巡し、さて引返せしに、早や全く夜に入りて、志水の街は紅燈點々、風寒くして行人稀なり。ならく、此處より山崎のステーションまでは幾町ばかり候ふぞと、所の人に問へば二十町餘り候ふと答ふ。扱も夥しきこと哉。日暮れて途遠しとはいへ、左のみ急ぐことかとはと、又例の謠を誦ひながら、悠々として夜道を辿りしに、一條の小河ありて、名もなき橋架りぬ。願れば女郎花塚とは十數町も隔たりたるが、是こそ放生川なりけれ、然れども川は古とは趣變り、謠曲家が相像するが如き美は失はれて、僻村に通ずる田用の水と異なる所なし。猶塚の上の方に當りて、涙川といふ流れありしといへども、是亦今は只だ溝の如きものになりたりと云ふ。其より淀川の堤を傳ひ、渡船に乗り、停車場に着けば、憎くや、瀟車の出たる後、次の發車までは未だ二時間の餘あるに、ぞ予と同一八幡詣の客は皆な泣顔になりて、口惜しがりぬ。

一月十八日の寒夜に三時間足らずも火の氣のなき所に佇立せらる可きや、是非もなしと旗亭に入りて酒に寒さを凌ぎつゝ、次の氣車の來るを待つ。

(其三十二)

尾張熱田神社

『源太夫』
『草薙』

神域……堀川の筏……

昔は旅は憂
きものと言
ひつれど明
治の今日は
面白き事な
りされど又
た憂きこと
無きにしも
あらじ扱も
三月八日の



(松本五内境社神田熱)

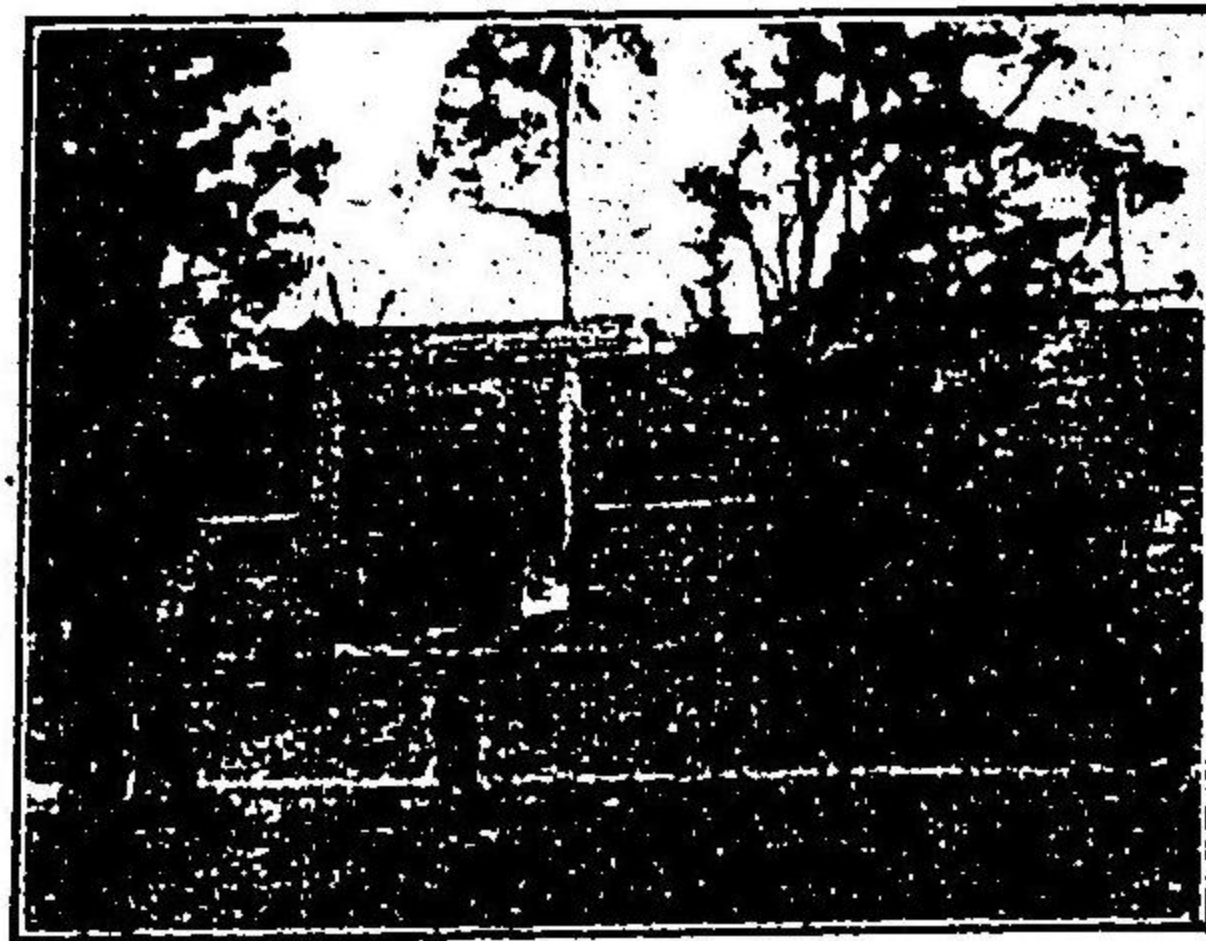
夜は名古屋の客舎にて一睡の夢を結び漸く二三時
も身體を休ませしかと思ふ間もなく旦那さん〜と
襖の間より子を呼ぶ聲聞ゆ是れ前夜に明日は一番の
上りにて熱田に参詣する旨申開かせしが故なりされ
ば今更疲れたるとて否みもならず勇を鼓して起き上
り窓外を見れば未だ夜は明けなく小雨そぼ降りぬ
いなしたりと思へども詮方なく倉皇旅宿を立ちて電
燈の光煌々たる大路を停車場の方に急ぎ午前五時幾
分といふ瀛車に乗りたり斯くて熱田驛に近付し頃は

全く夜も明けしが雨は更に止む可くもあらず空は依
然として墨を流すが如し。
夫れ六十餘州廣しと雖も國と所との名は皆夫れ〜
異れり京都と言ふも東京と云ふも日本橋と云ふも京
橋と云ふも乃至新橋横濱静岡等いづれも其名稱の淵
源に溯りて研究すれば必ず一の根據ありコハ昔に日
本のみならず世界萬邦皆等しかる可し恰かも米國に
て我が東郷大將の武名を慕ひ東郷停車場といふ名稱
を附せしなど最も近き一例なり是れは尙も旅する者
の漫然看過すべからざる事にて之が爲めに尠からぬ
趣味を感じる事あり人も知る如く熱田神社は日本武
尊を祭りしものにて委しくば平家物語開卷第一劍卷
の條にあり所詮諸曲の「小鍛冶」「草薙」の文を讀む者は
此劍の巻を細かすんばある可らず今同巻の條を見る
に日本武尊は天叢雲劍を帶して東國に下り尾張國松
子の島といふ所にて源太夫といふ者の家に泊り給ひ
しに此家に一人の娘あり名を岩戸姫と云ひて眉目貌
好かりければ尊是を召して幸ひし給ひけり其後尊は
近江の千の松原にて薨御し給ひけるが臨終の時まで
も岩戸姫を愛せられいと御契深かりけり茲に又同じ
松子の島に紀太夫と云ふものゝ田が一夜の中に森と
なりし事あり此森の中に小社ありて杉の叢立茂かり

ければ姫は尊の剣をば其杉の木に掛け置きしに夜な
 夜な剣より光を發し其光にて杉は焼けて倒れたり田
 に杉の焼けて倒れれば田も熱かりけるといふ事に
 て終に熱田といふ名起りし旨を記されぬ是等は附會
 も甚だしけれども又顧みれば其古の思はれて興を催
 す種ぞかし猶此條に醒ヶ井又東國を吾妻と呼び初め
 たる所由などを引證せり。

閑話休題やがて熱田の停車場に着きしが此處は名古
 屋驛の宏壯なるに比して幾分讓る所あるが如し僅か
 驛一つの隔りなれども交通の繁閑に依りて忽ち停車
 場の外容に其面影を偲ばるゝは亦た是非もなし熱田
 の停車場を出で二町程行けば早や既に熱田神宮な
 り實にも伊勢の大廟に次ぐ宮所とて境内樹木繁茂し
 て神々しさ云はん方なく華表を潜るからに神威の赫
 赫たるを覺ゆ而も千木高知れる社殿の壯嚴なるを仰
 ぎ見ては肅然容を改めて襟を正さざるを得ず先づ正
 殿並びに草薙の寶劍を祀れる土用殿を拜し境内を一
 巡して攝社なる八劍神社に詣で其より復た元來し道
 に引返さんとする所に日露戦争の紀念として南山の
 戦の繪を大なる額にもしたるを見き海東郡中島郡
 西春日井郡其他の有志者の寄附なるが善き考へなり
 猶野戰歩兵第六聯隊第十一中隊第二小隊などの加書

もわりき兎角して雨中を辿りて二十五挺橋をも
 過ぎしが誠に朝の神詣ほど爽かなる事はなし源太夫
 の謠曲の文の「朝清め落葉を掃ふ程ならし風をも松
 の木陰かなの如く繪に書ける高砂の爺の如き人が何
 處よりか現れもやせんと思はるゝばかりなり聞く所



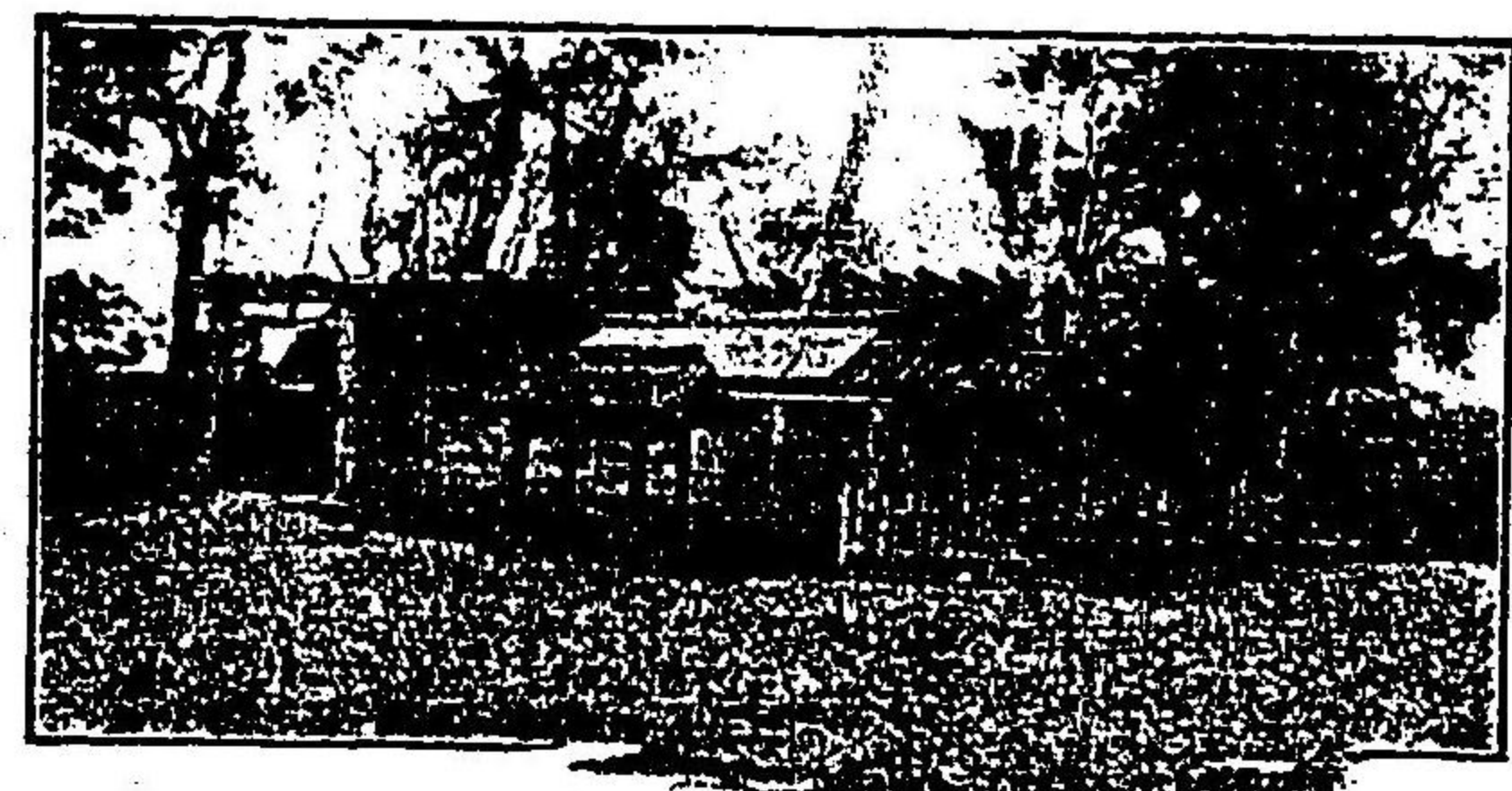
(社 神 田 熱)

に依れば明治二十六年に
 社殿の改造と共に規模を
 も廣めたりとの事なるが
 道理こそわれ本社に附屬
 したる清泉あり池塘又大
 に雅趣を帯び樹木の配置
 其宜ろしきを致せり此邊
 の一部を熱田公園と稱す

る由にて見るに櫻樹多く花の頃は嘸な面白かるらん
 其時にもならば名古屋邊よりも杖を曳く人多しとい
 ふ更に正殿近くなりたれば名残惜しさに又つくづく
 と打見成れり此正殿に續きて渡殿釣殿祭文殿廻廊拜
 殿勅使殿透牆左右樂所神樂所神與舍神庫等の建物わ
 り四邊杉の木立物古りて神境愈々清し日も夕陽に傾
 きて時あらさず群の數も知らず梢に集ふ有様や如
 何ならん三日四日逗留して心の行くまゝに遊び度さ
 念の起らざるにもわらざりや又本社には祭事甚だ多

しといふ古正月元日には神官が神饌の櫃を早きて神
 殿の廊に置けば尾張氏之を盤上に奠めて雉、兔、藻、魚等
 の物を奉り、祝師祝詞を讀み、權内人太玉串を取り、伶人
 樂を奏す、又千竈八劍松姫日割南新宮に農人農具の模
 形を奉り、酒飯を供ふ、二月祈年祭、五月軍神の事を行ひ
 神輿西門に幸す、十一月新嘗祭ありと傳ふ、現今とても
 是れと大差あるべき筈なし。
 茲に又珍妙不思議なる傳説
 あり、天文十三年にもこのされ
 たる宗收記行といふ書には、
 昔唐の代に當りて日本を傾
 けんせし折柄熱田の神
 は楊貴妃に生れ給ひて彼の
 國を亂したり、白樂天の長恨
 歌の中にある太眞殿は此熱
 田の春敲門の事なり云々と
 あり、されば熱田の神宮は唐
 人の所謂蓬萊宮となりたりぬ、其れかあらぬか、草雜の
 謠曲には「又は蓬が鳥とかや、常世の木の実の名を留め
 て、斷を延ぶる仙女となる」といふ文句あり、暫く此處に
 抄出す、更に益々奇しきは天文より弘治となり、永祿と
 なり、其永祿十年にもこのされたる紹巴紀行なる書には、

(宮の銀八宮別社神田熱)



熱田神宮より聊か西の方に楊貴妃の證なりとて五輪
 の石塔の苔に蒸したるがありと記せり、是等に至りて
 は最早言句を費すの暇もなし、如何に予の如き好事家
 なりとて何とてさま／＼と西の方を向ひて楊貴妃の
 證を探らる可きぞ、然れども書は多く見る可し、多く讀
 む可し、讀めば斯の如き奇々怪々たる物語を知る、謠曲
 家、唐の物、日本の物と區別して謠ふ勿れ、熱田神社が
 楊貴妃に關すといふ、豈夫れ鑑みざる可けんや。
 さて古人が附會したる熱田の蓬萊宮を出でたる後は、
 最早腕車に乗りて名古屋へ戻るより、外に詮方なき故
 イザとて車夫を促したり、そは熱田より發する次の流
 車は餘程の間ありて、機を失する故已むを得ず、先づ名
 古屋にと急ぎしなり。
 斯くて熱田の町を過ぎしかと思へば、車は横道に入り
 て堀川といふ河の縁に沿ひて行けり、聞くに名古屋城
 より熱田の海岸まで二里が間を掘り抜きしもの、由
 にて長河至る所に材木の筏を浮べ、河岸には材木の商
 賈軒を列べ、各自の家に亦た無數の材木を貯ふ、恰かも
 東京の深川の木場と異なる事なし、否、深川の木場より大
 規模なり、知らずや、是れ海内第一の材木場にて、或は木
 曾の山中、或は遠く紀州より材木を伐り出して、此處ま
 で流すなり、楢の材の高貴なるは童子も知る、更に其楢

の出所は多く木曾山中なる事は少しく物知る人は辨ふ可し。眞原益軒が岐蘇路の記に曰く木曾山中に材木多き事いふに及ばず、檜、杉、松、真木、柳多し、杉なし、槻は重くして水に浮ばず、故に下す事なりがたし。御嶽は眞木殊に多し。材木を切る和泉州より和泉紀伊近江の人を雇ふて遣はさる、毎年春の雪消二三月に山に入りて十月に出づ、凡そ幾千人といふ事を知らず。此和泉山の中に家ありて居住し、木を伐り材木に削る、あるは樽に削りて長さ四尺ばかりなる小さい木を川に流せば、いくらともなく水に随ひて流れ下る、河中の石にかかりて止りたるは、筏に乗りたるもの來りて落すといふ。舟はもとより水早くして石の高ければ通はず、此流るゝ木ども木曾を過ぎて美濃の内太田の四里川上に錦織といふ所に至る、其處に大網を張りて、ひとつも下に流さず堰き止むるにて、筏に作り桑名熱田へ下す。と、嗚呼斯の如くにして、檜の材は遙々の山を下り、此處に來て、更に全國に販路を擴め、延いて檜舞臺檜の床柱ともなる畢竟、謠廻國にて熱田に來ればこそ、是等の



事も知りたるなれ、扱も旅はす可きものなりと感に堪えて、車の中より覗ふに行けども、河に筏浮びて、又陸には巨多の材木累々と積み重ねられたりしかも、雨は蕭條として、點滴の音止む時なく、對岸の柳を拂ふ光景は宛然煙の如し、漸くにして堀川をも出離れて、名古屋停車場に着しければ、頻りに車夫を劬はりて、又汽車中の人となり、雨窓の山河を賞して、京に歸る。熱田を俗に呼んで宮の宿と云ひ、又寢覺の里といふ、さればこそ源太夫の謠にも、熱田の宮路浦傳ひ近く、鳴海の磯の波松風、の聲寢覺の里聞くにも、心涼しくといへり。想ふに古くよりの稱呼なるべし。

(其三十三) 鬼界ヶ島行 『俊寛』

道順……談合嶺……松虫鈴虫の墓……



實は未だ鬼界ヶ島に行きたるに
 は非ず前調べなり扱も謠曲中に
 て最も傑作の一つに數へらるゝ
 ものは何ぞ是れ即ち俊寛なり其
 俊寛の流されし鬼界ヶ島には是
 迄脚を容れたる人少し其の道順
 を聞くに山陽鐵道より九州線に
 乗換へ更に新開の鹿兒島線に依りて鹿兒島まで行き
 其より便船を求めて同島に行く可しとなり俊寛の謠
 にもとより此島は鬼界ヶ島とさくなれば鬼ある所
 にて今生よりの冥途なりたといひかなる鬼なりと此
 哀などか知らざらんとあるを見れば如何にも恐ろし
 き所なるが如し然れども昨今は鹿兒島灣より一週間
 毎に便船ある程なれば豈乎に鬼も住むまじ大島より
 は少し跡の由にて畢竟大島通ひの便船に少し寄り道
 を頼むなりと云ふ地圖にて見るも彼の邊は島ばかり
 にて遠き海上の孤島とも思はれざるが去りどて鹿兒
 島よりは船にて一晝夜を要すといふ又大阪より鹿兒
 島灣までの直航の船あるが時間は二晝夜を要すとい

ふ幸ひにして願望満たば或は瀛車にせんか或は船に
 せんかと思案中なり。

猶鹿兒島人に就きて委しく調べしに同市御看屋とい
 ふ所に俊寛堀なるものありて碑さへ保存せらると云
 ふ是れ古俊寛が鬼界ヶ島へ船出する時に本土を離る
 るを悲みていやが上にも泣き潰れたる地なり今其船
 出せし海邊は埋地となりて人家建ちしも市人は舊跡
 を思ひて其處だけ堀になし名づけて俊寛堀と云ふと
 ぞ又鹿兒島縣廳にて實査せし島嶼細見記には鬼界ヶ
 島の俊寛の遺跡を説明すること極めて精密なりと云
 ふ。

其は扱て措き先づ俊寛僧都の舊跡なる談合嶺に赴か
 んど岡崎の町を過ぎりやがて鹿ヶ谷の平野に出づれ
 ば前面は今初夏の緑を帯びて脈々たる東山には翠滴
 垂るゝが如し折から春を擔ぎ來れる農夫に向ひねえ
 僕は談合谷に行きたいと思ふのだが何う往つたらば
 可いかねと問へばさうぞすな談合は道が幾つにも分
 れてゐますさかいに此處で教へて上げました所が逆
 も六かしう御座いませうと辭色甚だ鈍し此時予は忽
 ち言葉をや和げ只管に頼み終に若干の案内料を遣して
 山に向へり此麓に靈鑑寺御殿とて僻村に似合はぬ寺
 院あり聞くに古堯然法親王の御母靈鑑院尼公の閑居

せられし跡なる由さてこそ増壁に白線入りて尋常の
 廢寺にてはなかりけれ此の寺の裾を傳ひて崔嵬たる
 山路を上れば次第に幽邃となり深林の空氣頻に俗客
 の魂を洗滌す次第に登る程に溪勢左右に分れて中に
 湍聲あり雨上りの後とて涼々たる水音の脚下に響く
 につけ窺ひ見んと欲すれども如何にせん榛莽深くし
 て路は僅かに足の通ふだけの細徑なり案内の爺は鎌
 にて草とも言はず萱とも言はず薙ぎ拂ひくして東
 道に立てり須臾にして下り道になりし處に丸木橋あ
 り寔に名の如く杉の木三四本を束ねて溪を渡すのみ
 橋の畔に山脚躡點々と咲きて景致を添へたるは愛ら
 し此處にて始めて溪勢を知しが要するに山澗の細流
 に過ぎず亦以て幽壑の潜蛟の恐るべき者にあらず
 其より行く程に今迄は稀に聞たる時鳥の聲が漸く多
 くなり雨溪の間にて相呼應する嬌音は頻に予が吟胸
 を促せりあゝ時鳥汝如何なればさばかり美しき聲を
 揚げて何事を語るぞナニ俊寛僧都の昔を語るとやお
 お囁めるべし予も僧都が此山の奥にて平家を滅さん
 謀計を語りひたる談合谷の舊跡を尋ぬるなり平家物
 語鹿谷の條に東山鹿の谷といふ處はうしろは三井寺
 に續きてゆゝしき城郭にぞわりけるそれに俊寛の山
 莊わりとあるを知らずやされども其山莊は今は無し

猶其條を趁ひ行けば法勝寺の執行俊寛平判官康頼多
 田崩人等皆與力せり實に是等文武の大官も七百年の
 昔には今わが辿る此鹿ヶ谷にて順悲の煙を燃したる
 なり其時の有様や如何なりしぞ別けて痛はしきは俊
 寛僧都の身の上なり一度捕へられたる後は鳥も通は
 ぬ鬼界ヶ島に流人となり白月黒月にて日數を偲ふる
 絶境に沈みたり惟ふに僧都は此の短き生涯の中に盛
 衰の甚しきは稀ならむ其因は此鹿ヶ谷なり果は九州
 薩摩の鬼界ヶ島にて身を終る奚んぞ輪廻のめぐりの
 早くして刻なるや斯くて謠物語にまでなりて後世に
 傳はる時鳥汝も聲惜ますと絶えずに語れ予も盡きぬ
 平家を偲ばまし



たり獨り案内の爺のみは事の次第を知らずして此山
 の奥で俊寛が悪い事を畫まはつたのぞすさうなどや

斯くて時鳥と予と
 は互に懷舊の念止
 み難くわれ思へば
 鳥が唄ひ鳥が唄へ
 ばわれ又思ふ心な
 き草木も風無きに
 枝を垂れ鹿ヶ谷の
 野山零露愈々穰々

ハリ鎌にて道を開きつゝ前に立てり。此爺は何故に悪逆清盛の味方をするかと少し佛然としたれども素より相手にすべくもわらず歳は幾つかと尋ねしに七十年りとは驚けり。うち見たる所にては漸く五十過ばかりなるに實にも山間の農夫の命目出度さよと思ひ子は爺に向ひて斯の如き僻村に暮らすは嘸ず淋しかる可し。町に暮らす人は山を喜び山に暮らす人は町を喜ぶが習ひにて予とて稀に町より此山に來りて杜鵑の聲を聞くは得も言はれざるなり。併し汝は又町を好むべきやと聞きしに否とよ私は町の騒がしき處よりも山の静かなる處にて瓢箪の口を傾けて休むこそ此上なき樂しみなれと答へたり。是にて考ふるに長壽の法は多く働いて清らかなる空氣を呼吸するにあり。時に山上の木の間より松薪の束を頭に載せたる女が二三人下り來ると見えしが倏忽として又林の中に姿を没せりと思ふ中に其女は又忽ちに予の行手の道に姿を見せ案内の爺を見て「やあ、おすさアん談合へ行くかね」と聲を掛くれば「あ、此旦那の案内によ」と迷かはりなり。此邊の山稼ぎの女は八潮の大原女の如き態度にて男と擬ふべき屈強の骨格なり。殊に松薪を頭に載せて縷の如き山道を駆け下る勢は驚くに堪へたり。あゝ同じ人界に生れながら風にも堪へぬ柳の如き腰

して奥様と呼ぶるゝもあり又曰の如き腰を振りて權衡を提げ頭に物を載せて終日粒々として働く女もありと予は何事に就けても感慨深かりき。東京にて老人に會ひてお父つさん叔さんといふ詞を京都にてはおすさあんと呼ぶ素より労働世界の俗語なり。

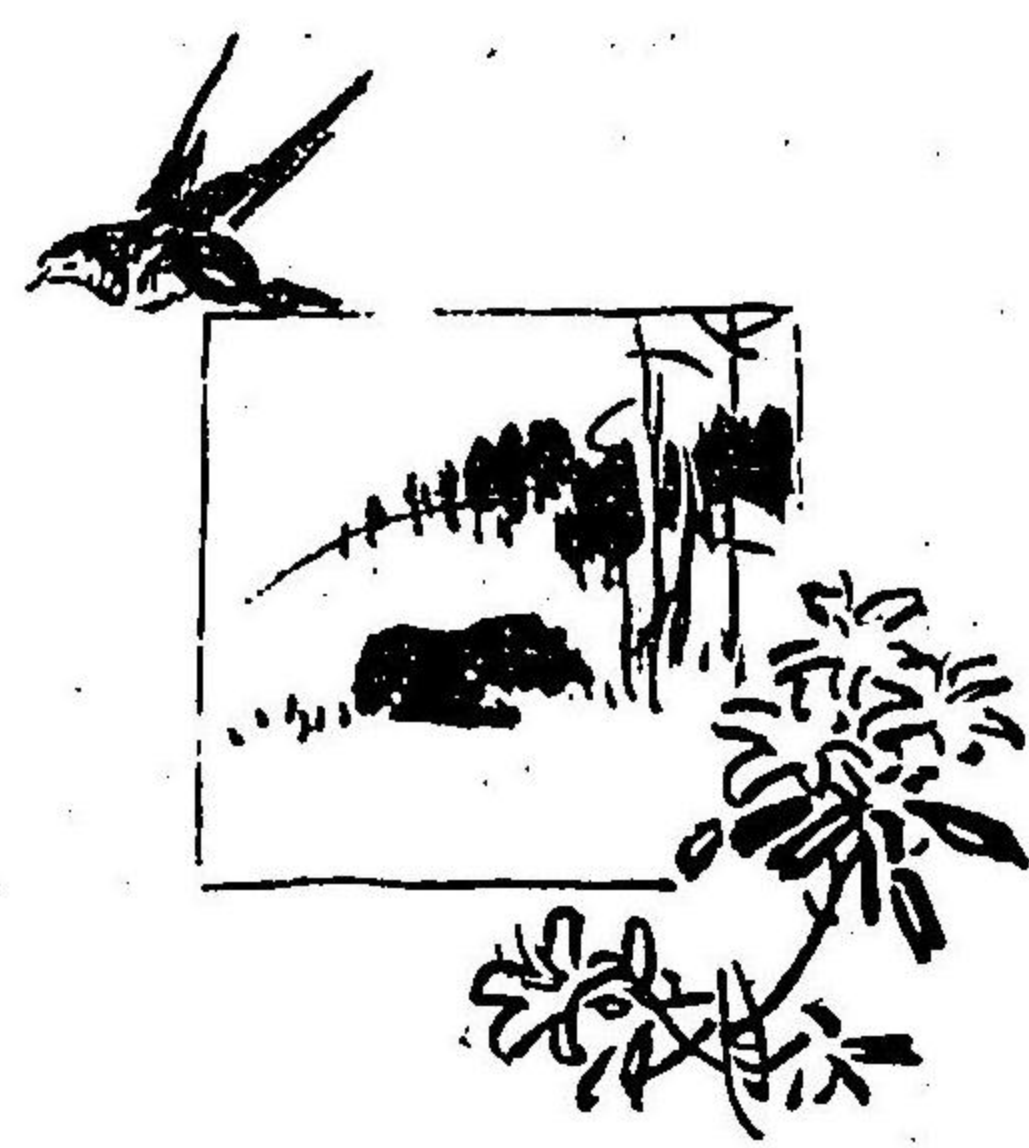


おすさあんと呼ぶ素より労働世界の俗語なり。

何を言ふにも道狭ければ山稼ぎの男女に遭ふ毎に先づ此方より避けざるべからざるに至る。其度毎に爺は談合かねと聲を掛けらる。畢竟予のみならず文にたづさはる人の多く談合谷を究むる者あるならむ。其中に左へくと行行りて十町も登りしかと思ふ頃には山は益々深くなりガサ／＼と笹原又は葛などの生ひ茂りたるを尙ほも分けて進み行けり。此時爺は最早直ぐに談合谷なるが見る物としては只一つの腰掛の石のみにて何物もなく却つて悔まる可しなぞいふ。予は又其は固より覺悟の事なりと答へぬ。

此問答の終るや終らぬに爺は早くも先に行きて彌繁

木立の中を潜り抜けて當の古跡に着きたり予も積
 いて其跡に従ひ終に談合の談合たる處に來りぬいか
 にも爺の再三言ふ如く何一つ見處も無き山懐の窪み
 にて木立の疎なる處なりけり案の如く腰掛の石あり
 見るに青苔蒸してそも幾百年を経たるかを知る可ら
 ず是れぞこれ俊寛其他の大官が腰を掛けて平家を滅
 さん謀議を凝したるものなりと聞きては假令其事の



縹渺たるにも拘らず坐る
 に其古の思ひやられて想
 懐は早くも日本外史平家物
 語などの上に走りぬ達者
 なりといへども爺は流石
 に老人なり己れまづ其草
 原に唇を下ろしてさて予

に向ひ頻りに其談合石の上には腰を掛けて休めよと言
 ふ予は亦元來痔疾なれば石の上には腰を掛くる能は
 ずと答へばソハ難儀なる事なりとて頻りに予が痢疾
 を案じけり斯くて足を休むる事もならず立ちて此邊
 を徘徊するに桐栗松など生ひたる間には又脚躑の草
 に纏る風情など山路の奥の趣の別なる事よ更に東の
 方を見れば盆の如き峰の一際高く聳えたるが有りけ
 る故爺に問ひしに近頃山を伐採したる跡の由にて彼

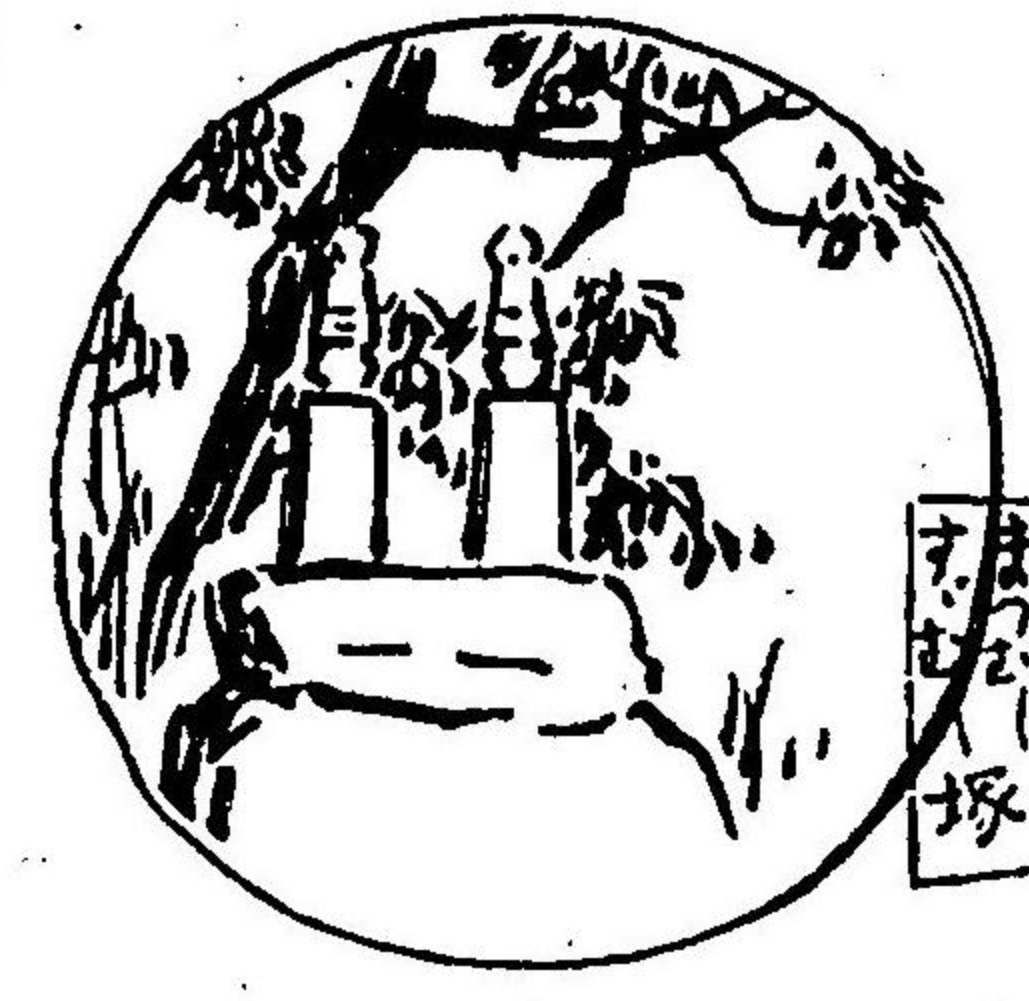
の峰を傳ひて下れば山科の里に通ずといふ思へば今
 し里より上り來りたるに早や斯の如き深山に來りけ
 るや實に此處にては最早時鳥の聲も聞えず軟風颯々
 と來りて桐栗の葉にわたるさても幽遠の境なる哉
 すら猶ほ斯の如し月靡るに風荒き夜の間など果して
 如何なるべき髪おどろに振り亂し瘦せはらばひて海
 松など身に纏ひ杖に縋りたる俊寛の幽靈もや現れや
 せん面色血に塗れ怒髪逆立ちたる西光の姿など現は
 れなば抑も何とすべき斯くて是等の亡者の成ひは怒
 り或は笑ひて長へに此の山の古き昔を語る可きか實
 に世の中は逆を許さず善に善報あり惡に惡果あり清
 盛如何ばかり横暴を逞入すと雖どもいかで末途ぐる
 事のあるべきぞ畢竟俊寛西光の輩は種子を園に蒔き
 たるものと謂ふ可し而して朝頼義經善く之に培ひ終
 に平家姿みて源氏榮ゆ誠に因果は車輪の廻るが如し
 斯くて沈吟時を換ゆる間も折々は爺と話を交へしが
 頭惱の異りたるは又致方なきものにて爺は予に頻り
 に犬の時雨焼の事を話し掛けたり其は痔疾には犬の
 肉を時雨焼にして其れを食すれば根治する由を語り
 望みどあらば賣り申さんといふ家の肉さへ心地悪し
 くて食し兼ねる身が何とて犬の肉など食はるべきぞ
 ワンども返事に窮したり爺は猶壘み掛けて犬の肉の

美味を語りて曰く、犬の膽は癪に大効あり、曾て男にて癪に苦しむ人ありし故、早速犬の膽を勸めしに忘るゝが如く治したりとあり、余は如何にしても此爺の案内の勞として、フン君の肉を賞翫せざる可らざるに至らんとす。一人は頻りに歴史物語に耽り、一人は犬の時雨焼を主張す、到底相容るゝ能はず故に、勿々歸路を促し、踵を廻せば、爺は相替らず先に立ち、鎌もて頻りに藪を開く、予は又唯々として其後に従ひぬ、斯くて時々振返り見れば、談合石の邊淡雲模糊として次第に遠ざかりぬ、爺も今は時雨焼の事を忘れたる如く、此山は五反宛にして十四枚の面積あり、所有者各自に薪を伐採して里に下すなど、田圃の趣味を語り出でぬ。

幾程もなく麓に下りて、案内の爺と別れ、半町も北に行きし頃、不圖住蓮山安樂寺といふを見出で、つ入口に瀟洒たる冠木門ありて、圓光大師靈場浄土禮讚根元地と刻みたる石立てり、隣には私立浄土宗大學あり、界限は森と田圃とを以て限る。佛信徒が結界清淨の靈場と喜ぶも宜なり、巡禮に馴れたる予は、衝と門を入りに、這は又比類なき絶景の寺なりけり、西を見れば前は廣漠たる原野にて、近く吉田山を眺め、遠くは愛宕の峰の夕陽に映じ、蹊として空に盤したるも見えて、いと眺望佳し、後には青綠蒼鬱たる鹿谷の山登え、絶頂に當

りて赤肌の松の矗々たる姿は、恰も樓閣を築きたるが如し。あゝ安樂寺は實に此秀麗なる山間に一字を營む、寔に名詮自稱なり。

予は例に依りて案内を乞ひ、先づ本堂に行きて見るに、正面に觀世音を安置し、左には法然上人の木像あり、厨子に入れて衣を垂ぐ、其側に上人が諸國を行脚し給ひし時に用ゐたりといふ傘と杖とあり、又右の方の少し離れたる處に、安樂坊と住蓮坊と松虫と鈴虫との木像あり、安樂は杖を突き、裾を端折りて衆生濟度に忙はしく、住蓮は安心を得たり、鈴虫も又手を合せて彌陀の來迎を仰がんとするの形なり、是等堂内の有様に對して、華麗壯嚴などの文字を冠する能はずと雖も、境の幽なるは容易に他に求むべからず、又其



昔禮讚の勤の盛なりし事、杯思出る時は、何とやらん此御堂の尋常に異りて、利益無量なる心地こそすれ、更に別室に行きしに、此處は當時松虫と鈴虫とが剃髮せし室なりと云ふ如何にも、其れに因みたる一幅の軸あり、白練に緋の袴を着けたる女、薔が合掌して正座せる、後に墨染の法衣着けたる僧が、髪を剃す所にて見るから

に殊勝なり此松虫鈴虫に就きていと哀れなる物語の
 り讀む人暫く耳を貸し給へかし昔鎌倉の世に法然上人
 人おはし、が其弟子に住蓮坊安樂坊といふ二人の高
 足ありいづれも素は武士にして安樂坊は俗名阿部判
 官盛久住蓮坊は清原次郎左衛門信國といひしが出家
 得度の其後は道心いと堅固にして上人も此上なる
 頼みとし給へり茲に又以前に鹿ヶ谷に法勝寺とて俊
 寛僧都居住の寺ありしが僧都流罪の後は誰願るもの
 もなく舊院に瓦堆く空堂に夜怪しの音など聞えしを
 ば住蓮安樂いたく嘆きて此寺に來り取繕ひて念佛修
 行に怠りなかりき後法然上人此寺に來りて別時念佛
 を行ひしかば洛中の老若男女吾もくと集ひ來て念
 佛の聲いと賑しかりしが其中に後鳥羽天皇の寵姫
 松虫鈴虫といふ二人の局も交りけり女性の身の心直
 ぐなるため法然の説法に深くも歸依し愛慾の心失せ
 て未來の佛果を願ふ心頻りなりされど仙洞御所に歸
 りても心は法然の念佛に走せて剃髮得度の念止まざ
 りき斯かりければ建永の元年師走十九日風いと寒く
 月黒き真夜中に仙洞御所の高塚に沿うたる松の梢に
 籠り忍びて出づる二人の女人あり是れぞ即ち松虫鈴
 虫なりしが一念凝つたる雄々しさは未だ其外の堀を
 も渡り六字の名號唱へつゝ此安樂寺に來りて止むる

も肯かず髪を下ろしたり然れども此事後に露顯して
 住蓮安樂は打首となり法然は土佐に流さる又た是れ
 を餘所にて傳へ聞きたる松虫鈴虫は驚く事限りなく
 ハタとばかり泣き沈みしが斯うなる上は鈴虫様オ、
 合點でござりますと二人手に手を取りて此寺に來り
 未來は同じ一蓮托生護らせ給へ南無ほとけと我から
 消ゆる夏虫の涼しき聲も出でばこそ共に及に伏した
 りけり語り出づるだに哀れさ限なき事なるよかし。
 噫其時の兩女の心の中や如何がありけむと返らぬ事
 など思ひ浮べ仔細に此室を見廻りて更に此度は庭に
 出で裏道を傳ひて行けば茲に又兩女の墓あり五輪の
 塔二つ立ちて櫻と杉と要冬青の樹とを植う要冬青は
 高さ二三丈もありつらん葉は楕に似て狭く小さくし
 て面滑かなりき此樹は夏の初めに五瓣の小なる白き
 花を結び秋に至りて果熟すと云ふ庭に草木心なしと
 は申せども花實の時を違へず兩女とても其如し天皇
 の御心に背きたる罪大なりとは言へども元是れ佛果
 を得んの願なればやがて實の生る秋の來て幾百年の
 後の世までも朝夕に御僧の弔を受け又參詣の人々に
 依つて菩提を弔はる是に就けても人は後生こそ大事
 なれ此所を辭して元の庭に歸れば住蓮坊安樂坊兩上
 人の墓ありて二つの石塔立てり周圍は石の玉垣を繞

らしいとく 莊嚴なり高野松と藪柑子とを植う。流石に安樂寺の開山なり側にはまた振り面白き枝垂櫻あり。此櫻こそ兩女が忍びて此寺に來り強ひて髪を下ろしたる折着馴れし錦の衣を脱ぎて懸けたる樹なれ。故に衣懸櫻といふ名あり。一首の歌を認む。

みになれし錦の裾をぬきすて、

みだの御國へすみぞめの袖



は程近し。來ん春には人々此山里に訪ひ來て兩女の跡を尋ぬるも亦一興ならずや。當に此名木のみならず庭内に池あり池邊に阜月多く其他園藝の風致勝れて妙なり。單に行樂の地と稱するも不可なし。例月九日を以て命日とす。

(其三十四) 攝津國處女塚 『求塚』

……處女塚……小山田高家の碑……



(塚女處國津攝)

……處女塚……小山田高家の碑……
 謠曲に求塚と云ふものありて頗る斯道に重んぜらる。こは難波に住みける女が二人の男に戀せられて、否まん術のあらざるに、生田川に身を投げたりといふ物語なり。出所は大和物語にある話なり。此女の墓は處女塚とて攝津武庫郡御影村にありて所にては名高き由洩れ聞さし故去年の冬一度用はんとせしが果さずして漸く此程遠げたり。此墓のある處は阪神電氣鐵道の東明と石屋川との間にて電車の軌道に沿ひたる地なり。此阪神の電車道は多く謠曲の名處なり。次は大物、大物お知らせがないと止めませんよと言はれて考へ見れば是は船辨慶の謠に係す。次は蘆屋、蘆屋お知らせがないと止めませんよ。こは是れ藤原の謠に係る。或は西宮は狂言の蛭子大黒天に縁あり。或は生田川あり。其他此界限には謠曲の名處數々あり。

車堂は予を石屋川にて下し此處より程遠からぬ處に小高き山の候て松ども多く生ひたるが其處女塚にて候と言ふを聞きて、一町程行きしに、果して小丘ありて松籟般々として聞えぬ予は之を見て莞爾として、スタスタと駆け上がりしに、松釵堆積したる處に、二基の石碑あり。一は小山田高家之碑として長文の碑銘あるが、一は石の面古りて文字埋滅し、僅に「古の小」の三字のみ見えつ、歸宅の後に調べしに是れぞ萬葉集にある「古の小竹田男のつまとひしうなひ處女のおくつきぞこれ」といふ歌にて即ち當の生田川に身を投げし女の塚なりける。

茲に又此處女を戀せし二人の男の名こそ天變不思議なれ、一人は姓を菟原と云ひ名を小竹田男と云ふ、津の國の人なり。また一人は姓を血沼と言ひ名を大丈夫と言ふ、和泉の國の人なり。耳の遠き翁は半分聞かずに、ナニ狎が嘘をして鼻で笹を擦て菟原々々と泣たりけり。なぞ、早合點すべし、どにかく此小説の作者は餘程ヒネリたり。謠に昔此所に菟名日處女のありしに、又其頃小竹田男血沼の大丈夫と申し、者彼うなひに心を懸け、同じ日の同じ時にわりなき思ひの玉章を贈る、とある其の血沼は「ちぬ」と云ふ國音なれど、さて人の謠ふを聞く時は如何にしてもチンのマストラと聞ゆるぞ可

笑し。

予はちんのますらをの謠の名處發見したるに歡喜感嘆限りなかりしが、をりしも小雨降り出して雲行きいと、荒ふるにぞ、四邊にありたる小祠に憩ひて晴間を待ちけり。求塚の後段は此菟名日處女の幽靈の物語なるが、其文に「わふ曠野人稀なり。我古墳ならで又何者ぞとあるを見れば、今こそ電車など通りたれ、其古は廣漠たる野なりしことは明なり、幾くもなく雨小歇みとなりける故、又出で、徘徊せしに、此小丘の周圍は總て隴圃にて、全く處女塚の爲めに殊更に地を遺したるなりけり。傍らなる小山田高家の碑は弘化三年に縣令竹垣三右衛門何某其他して建てしもの、由道理こそ碑文も明瞭なりけれ。此高家の事は太平記にもなされたり。今其條を擧ぐれば、延元元年兵庫合戦の時、新田義貞追撃に會ひ、求塚に止り、之を拒ぐ、賊兵競ひ至り、太だ危急なりければ、小山田高家其身代りとなり、戦死すとあり。是に依りて見る時は、此處女塚は後醍醐の朝に於て既に歴然たる名處の中に加はりたるものと覺ゆ。是れを思ひ、彼れを考ふる時は、愈處女塚の昔ゆかしくて、猶立ちも得去らず、幾度も謠曲の「求塚」を案じて、「聞さばくらしわなを尋ね、こなたを求塚、いづくやらんと求め求めたどり行けば」など謠へど、今は此の塚の下をば電車

と云ふものが空に架したる針金を傳はりて倏忽にして走り、アト云ふ間もあらばこそ、早くも一二町を掠め去る。世に時代の變遷は恐ろしきものはあらじ。此時復たも雨益降り出して、摩耶山の邊黒雲頻りに騒ぐ景色見ゆるにぞ長居は恐れありと先に登り來りたる道を池り、松の嵐を名残として東明の方に向ひぬ。此邊後には摩耶山六甲山蜿蜒として起伏し、前は渺茫たる攝津の海に臨む。故に「求塚」にも行かんとすれば前は海後は火焔と云ふ文句あり。

東明に行き、只ある飲食店に入りて晚餐を喫し終りたるに夏の雨の晴るゝも早く、忽ち東の方に雲の隙間見ゆるにぞ又とぼくと歩み運びて石屋川より東行の電車に乗りぬ。

(其三十五)

須磨の浦物語

「敦盛」「知草」「須磨源氏」「忠度」

敦盛の塚……一の谷舊跡……須磨寺……村雨堂……

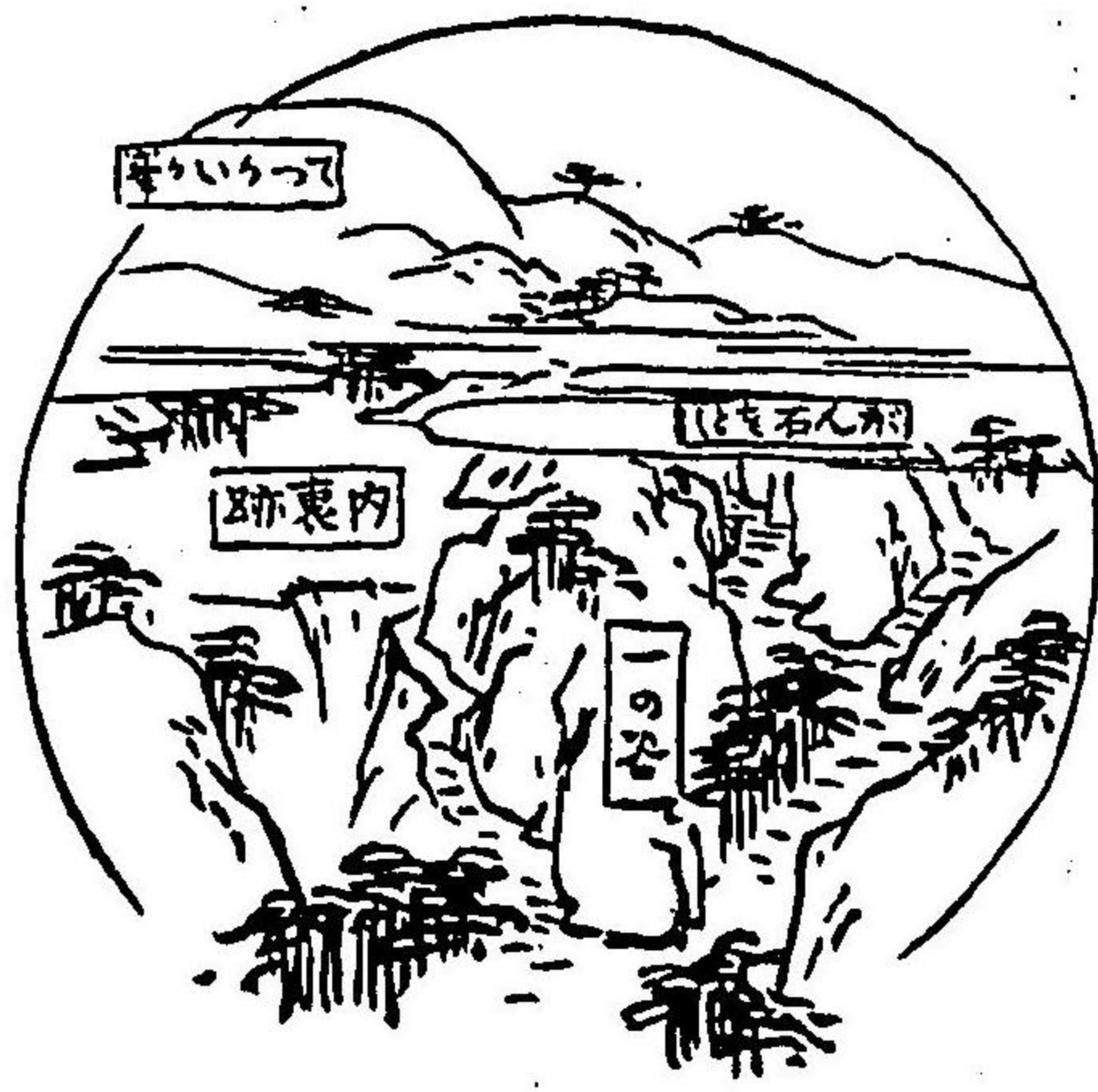


(塚の盛敦)

ば當日の午後須磨停車場に着くや否や、道案内兼車夫といふ調法なるものを備ひて近間の名所を一巡したり、聞くに須磨には須磨寺若木の櫻等二十四ヶ所の名所ある山なるが予が第一に弔ひたるは敦盛の塚なり。き停車場の前を左に行けば忽にして一條の驛路あり、左には蒼鬱たる小丘を控へ、右は渺々たる大洋に面す、白砂青松は言ふまでもなく、遠く紀伊の山々を眺め、近く淡路島を望む風景比ぶものもなくして坐るに胸の開くる心地す。斯くて大凡七八町も浦傳ひしきと思ふ頃、路の右手に殊更に窪みたる處あるが、是なん敦盛の塚にて候ぞやとの車夫の物語に、さらば暫くは弔はん」と倉皇車を下りて塚の前に膝を折り、一枝の花を手向

去る七日の事なり
きをりからなる満
月を賞さばやとて
津の國須磨の浦に
向ひたり元より不
知案内の土地なれ

けぬ。やがて塚を出づれば前に敦盛蔭蔭といふ蔭蔭あり。固より海邊の一ツ家なれど表口一面を朱塗になしたるは驛路の人の注意を惹かんとてなるべし。此處を過ぎて復た前の道に戻り塚より一町も離れさと思ふ處に一の谷の舊跡あり。見上ぐれども別に懸崖絶壁とてはなく、只小丘に樹木の鬱蒼と茂りたるのみなり。尤も其の上を次第に二里餘も登れば彼の鶉越の難處ある由にて、又平家の守備したる大手門も今に神戸市にわりといふ敦盛の諸にうしろの山風ふきおちて、野もさへ返る海きはに舟の夜となく晝となき千鳥の聲もわが袖も波にしをる、磯杖といふ文は寔に此邊の景色を叙したるものにて、殊に同好者には一層の興味を覺ゆるぞかし。再び停車場の前まで來り行過ぎて此度は右手の方を迂回する事凡そ三町程にして忽ち須磨寺と記したる石の榜示を見出したり。此處にて車は島道に曲り又行



く事三町ばかりにして寺門に入りたり。依つて車を下り徒歩して石磴を登り、本堂に入りて四邊を見廻し、に、コハそも如何に不思議なるは能狂士田中泰太郎氏に邂逅せし事なり。餘りの奇遇に彼是等しく啞然たるばかりなりしが、予の脚絆草鞋穿きなるに引替へて、田中氏は妻女と共に金の指環時計といふ粧ひにて、一



(門山寺磨須)

廉の紳士になり濟し給へり互に久淵を述べたる後氏は忽ち腰なる瓢箪其れは親譲りとも見ゆる頗る古風なるもの、口を開きて、予に一杯の酒を

わかちしが相變らず大氣焔なりき。曰く見られよ、遠くは須磨の浦近きは村雨堂行平の杉若木の柳其他萬木千草皆能樂にあらざるはなしと、流石に能狂士の言と謂ふ可し。

既にして予は田中氏に向つて某は是れより猶探賈する所多きが、お事は最早済みたるべし、さらば御遠慮なくお先へと會釋したるに、然らば是にて別るべしとて

同氏夫妻は本堂の下を右に見て行かれしが、予は猶堂に残りて雑僧を捉へて種々の故實を聞糺しながらも、塲所柄のことゝて田中氏との名残を惜みて互に見交はす顔と顔とは宛然彼の逢坂山に逆髪と蟬丸とが泣く泣く別れおはしましたるが如くなりき。

抑も此須磨寺は上野山福祥寺と申して仁和二年光孝天皇の御代に圓鏡上人勅を受けて建立したるものにて、現世にては諸々の所求を成就し、未來にては所願の本懐を開き給ふ靈地なり。東を望めば行平の月見の松村雨堂西には鐵拐ヶ峰、明石の浦もほの見え山下には源平互に鎬を削りし一の谷の巷あり。南を見れば紀陽淡山漫々たる蒼海目前に遮りて、九紫萬里の船を泛べ、北は鶺鴒越の山嶺き峨々として聳え、寔に海内有數の勝地なり。例の寶物拜觀を請ひて、敦盛の青葉の笛高麗笛などを見たりしが、孰れも皆謠曲に關せざるはなし。堂を下りて若木の櫻といふを見たりしが、實に其名の如く丈低くして枝細く、彼の京の御室の櫻の若木とも見ゆべきなり。此櫻源氏時代に植ゑしなりといへど、果して如何にや、薩摩守忠度の歌に、

ゆきくれて木の下蔭を宿とせば
花やこよひのあるじならまし

とあるは同好者の普く知らるゝ所なるべし。夫れより

又畔道に出で、腕車に乗りて村雨堂に向ひたりしが、此處は彼の伊勢の阿漕平治の塚と同じく畑の中央に十餘坪の土を盛りたるものにして、名ばかりの小堂なり。これが謠曲に名高き松風村雨二人の海士の舊蹟かと思へば、餘りに痛はしく、さぞや二人の姉妹も怨めしく思ふならむと、暫しは瞑目して掌を合はしたりき。然れども堂後の松は流石に尋常の物とは異りて、其蟠屈せる形状は正に一顧の値あり。謠曲家が松風を謠はんとする時は、先づ威儀を正しさては、此松は古松風村雨とて二人の海士の舊蹟かや、いたはしや、其身は土中にうづれもれぬれどもと、恰も松を見たる心持にならるゝが常なれども、予は今其真物に接して感慨深し。



須磨の浦にて予の尤も渴仰したるは敦盛の塚と村雨堂となり。今其二つは見れば、さのみ時を費やすべき所にあらずと思ひて、車を急がせ行平の衣掛松も僅かに一瞥と興へたるのみにて、元の濱邊に歸り、車を辭し、久し振りにて海水浴に赴きたり。まづ濱邊の小舎に衣服を預けて、陶然とばかり海水に入れば、素より水は清冽にして、底には藍を湛へ、爽快云ふべくもあらず。俯向

きて水に浸りたる己が足を見れば宛然白足袋を穿ちたるが如くにて、小石までも明と讀まれぬ。



(浦の磨須)

大阪の淀川あり又西は同じく十二里の外に播州の加古川あるのみにて其間に汚水の注入するなければ海水浴場としては屈強の地なるぞかし。

浦は東は十二里の外に始めて嘉すべきものにあらざる由なるがざる詭向きの海水浴は甚だ少しといふ然るに此須磨の

(其三十六) 鞍馬山

「鞍馬天狗」

……鞍神社の火祭……涙の瀧……多聞天……
……背比石……天狗杉……僧正ヶ谷の奇石……



(口馬鞍)

十二日の朝は何気なく鞍馬見たし、僧正ヶ谷廻りたしとの思ひ禁せられざる儘に急ぎ脚絆草鞋等の用意をなしたれども、多用の身は中々に捗らず宿を出でしは午前九時に、ハヤ射らるゝほどの暑さなりき。

丸太町より出町橋まで電鐵に乗り其より松原を一筋に上加茂の方へと歩みたり右を見れば比叡の山嶺翠の色を帯びて重疊起伏するさま、一幅の畫帖の如く、又脚下なる加茂の河原は連日の早にて水全く涸れ果て、只小砂利のみ隙間もなく列りぬ、兎角する中にやがて御國橋を渡りて鞍馬口に著きたり鞍馬口より二軒茶屋まで十八町、二軒茶屋より鞍馬山までを一里と定めあるが此間は兩側とも畑にて暑といふもの更になく、九十八度の熱度を而も正午に近き時刻に歩みたるな

れば宛然赤道直下を進むが如き心地にて幾度か目眩
きて逡巡する事さへありき。

山の麓の茶屋に休らひて案内者を需めたるに應じた
るは六十ばかりの屈強なる老婆にて杖を携へて行手
に進めり此山は多聞天まで十六町僧正ヶ谷まで十町
と聞きさらば心して登らざるべからずと思ひて膝を

前の方に折り腰を入れて
上りたれども嶮路なれば
足許辿々しく喘ぐ息の
みせはし程なく地藏堂に
至り鞍神社に詣り鞍神社
は大己貴命を祀りたるに
て鞍馬村の産土神なり九
月九日の例祭には火祭と
稱へて里の男の子が夥し



く松明を振り騒いで山に登れば神社よりも又里の女
許して御輿を昇ぎ其より山中を駆け廻る習慣なりと
の事なり此神社の前には拜殿あれども其形他と異り
て舞臺の如しこれをに堂と稱へて全國に二つよ
り無しといふ舞臺に登りて暫し氣息を休むるに四邊
には櫻の老木松杉など鬱々として茂り冷風膚を衝い
て心地よし諺の文の花さかばつげんといひし山里の

使は來り馬にくら鞍馬の山のうづ櫻など想ひ出で昔
の春の名残を偲びたりしが程なく此處を下りて廣く
もあらぬ社内を歩みたりしに片隅には牛若の籠りた
る東光坊の舊跡ありて涙の漣といふ小さき漣あり牛
若子は夜なく僧正ヶ谷に通ひ寺に歸りて夜明けま
で學問修業をなしたりしが思はずも眠氣を催しウト
ウトとしては又漣の音に目覺めたる由にて其の時の
詠歌に、

吹きまよふみやま風に夢さめて
涙もよほす漣の音かな

とあり源九郎の鍛錬思ひ出されていとい感に迫りた
りしがやがて辭して猶十町ほどの峻路を登り漸く本
山の多聞天に著けり。

寔に此處はうき世に遠き鞍馬寺本尊は大慈多聞天と
ある如く塵寰を隔てし高燥の地なれば森閑として鳥
の聲も聞えず況してや人の影だにもなし思はざりき。
久しく俗塵に晦まされて長へに没し了らんとしたり
しに今日は如何なる吉日にて斯かる別天地に人生の
苦艱を遁れんとはと立ちたる儘に稍暫し茫然たりさ
りながら此處まで來りし間に餘りに多くの水を喫せ
したため腹工合悪く覺えければ這は叶はじと思ひ懐中
より持薬を取り出して少しく休らひぬ鞍馬山は一名

關山といふ程にて登り十六町の間は喬木鬱然として茂り眼界を遮るにぞ過ぎ來し方も見えす又行手も分かぬなり多

聞天の處より
双眼鏡を
取りてピン
トを合はし



しかども前面に山多くして京洛中は更に見えざりき其より汗に濡れたる衣を脱ぎ棄てて傍の樹の枝に掛け其の乾くを待つ間本堂の右手の御茶處に入り女夫巡禮どものいぎたなく寝轉べる状を見更に本堂を廻りしが有繫に見る處のなきにしもあらず天津の作と藤戸の作と二振の寶劔の外に三條小鍛冶宗近の作になれるものもありき此外に鞍馬大僧正の御影をば狩野法眼元信の書きたるがありき固より鑑定之處までは行き届き難し

斯くて衣の干たる頃本堂の右手なる奥の院道に登りぬ登れば忽ちにして屏風坂あり此坂は六枚折の形にて見上る限り巖石峨々として聳え峻嶮言ふべくもあらず幾抱へとも思はるべき喬木蒼鬱として叢猶は關し山姥の謠に伐木丁々として山更に幽なりと云ふ事あれ此の山は官林なればさる音だも聞えず只森々

たる林の中に案内の老婆と予との喘ぐ息のみ忙はし屏風坂の上こそ此山の頂上なれといへども見上ぐる限り鬱蒼として中々に攀ぢ登らんやうもなし此坂に源義經公背比石といふ石あり見るに五尺より低く少年牛若が背を比べたるも宜なり此石に牆を設けいと鄭重に保存せらる此背比石と同じ林中に天狗杉あり幹に注連を張り棚を設け數々の供物を手向けあり此は天狗の住み給ふ杉なる由にて一つの根元よりして枝は八方に裂け其間に人の座したる跡の如き處見ゆ此時案内の老婆は兩手を合せて頻りに此の杉を拜むゆゑ予は何故さばかり祈誓を凝らすやと問ひしに此天狗杉を祈る時は諸願成就百病退散の効ありといふわゝ京都に至る處に此種の老人多し是等の迷信の全く跡を絶つは果して幾百年の後なるべきや天狗杉よりは下り坂にて急坂なり不動坂といふ彼の高野山の其れと同じ名なり坂を下れば平地にして牛若に縁ある不動堂あり又其前に御供水あり此の御供水は牛若が此の山にて行をなしし時の池の跡なりと云程なく僧正ヶ谷に至りて見るに方一町にも餘るべき地域は悉く巖石にして中に一つの祠立てり謠曲にある大天狗が此祠の内にあるやと思へばなつかしきは又一入なりされば先づ心を鎮めて犬牙參差たる巖

石を踏み分け、祠前に立ちて見るに、唯だ木造の建物あるのみにて、是ぞと取立つる箇處もなし。然れども祠の後に廻りて見れば、杉のむら立ち繁くして、奇石怪巖、狼藉たり。而も此岩に種々の名あり。先づ正面の祠前にあるをすべし。石と云ふ。如何



佐々木次郎の所

さま天狗の迂りたる痕と覺しく尋常の者の足痕とは思はれぬなり。其の側に腰掛石あり。牛若が腰を掛けたる石なりと云ふ。また祠の後にあるを切込岩と云ふ。太刀の跡明かに見ゆ。これは牛若が刀を揮つて切り込みたるなりと其れより程遠からぬ處に月待石あり。是れは牛若が此石の上にて行をなし、月の出づるを待ちて、僧正に教を乞ひたるなりと、其傍に硯石あり。其形硯の如し。是ぞ牛若が此處にて習字を稽古せしにて、更に其石に隣りて薬研石あり。形薬研の如くにして中に水あり、一年三百六十五日此薬研石の水は減りもせず、満ちもせずと聞きては、又しても例の臆説かと含笑まれき。更に牛若が此薬研石の水を汲みて硯石に注げりと言ふに至りては、附會の説も漸く真に近きが如

し。なるにても實に面白の岩の名やな。謠の文章には月鞍馬の僧正が地谷に満ちく峰をうごかし、風こがらし瀧の音天狗だふしはおびたしやとあり。此邊の文は僧正ヶ谷の真景を寫して遺憾なしと謂ふ可し。夜も深更になり、月色皎々として、杉の木の間を射る時に、峰より吹きまくる嵐の音は、さこそ凄まじき事なるべけれ。天狗だふしと名づくるも道理なり。此奇怪なる谷を一巡したる後、道を貴船の方に取りしに、是は又森々たる林にして、天日全く閉し、暫しは足を拾ふて歩む程なり。少し行けば、此度は一方は薄生ひ茂りて人の丈よりも高く、又一方は足もたすらぬばかりなる隙間に幾千の巨杉の行儀正しく駢列するを見る。此邊を一のくらがりと名けて、當山の難所の中に數へらる。漸くにして此薄を極分つ、山を下れば一の野橋ありて、鞍馬川に架す流を覗へば、濁水怒號して岩に當り激して霧となり、珠となりて、景狀甚だ奇なり。而も亦餘流は股々たる響きをなし、渦を巻いて走る事、矢の如く頗る凄じければ、暫く橋畔に佇立して、心ゆくまで涼を貪りぬ。鐵輪の謠曲にある「月おそき夜の鞍馬川橋を渡ればは、どもなく、貴船の宮に着にけり」の三句は、此邊の景を叙したるものなり。同好者の中に、京に來りなば、第一に鞍馬に遊び給へかし。此處は謠曲の名所として、最趣味多し。

(其三十七) 貴船神社

本社...奥宮...



(社神船貴)

「鐵輪」の謠曲は嫉妬の一念凝つて、鬼の形をなし、口に松火を咬へ、頭に鐵輪を戴きて、捨てられし夫を祈り殺さんとせしを、安倍晴明に祈り伏せられて立

ち去る事を作りしものにして、謠曲としても能くして最も多く行はるゝものゝ一つなり。又河東節にも丑の時参りといふ曲あり。「ふた道かくる仇人を思ふもつらし思はぬも、あゝもの憂しの時参り」とて斯道の人濁仰する所なるが、斯程の名所に我身は今も來れるなり。橋を渡れば程もなく、貴船にこそは着きたるなれ。仰いで見れば、翠巒環合して、身は宛然摺鉢の底にあり。が如き思ひす。峰に木傳ふ鳥の聲、袖を潤す草の露も、何れか旅の友ならぬはなし。例の如く神宮の前には鳥居あり、其を入れば、些かなる門ありて、皇族の下馬札立ち、菊の紋の提灯垂る。問はでも知るは、是れ官幣中社なり。

祭神は太古に伊弉諾尊が軻遇突智を斬りて三段となし、其一を高籠神と稱せしを、此處に祀りたるにて、雨の祈の司なりと云ふ。見るに社殿は名ほどもなく、規模小なり。社の背後は鬱蒼たる杉林にて、涼氣頓に加はる。末社の神二三ありて、朱の王垣など繞らし、あれど取り立つるほどの事もなし。されば是れより奥宮に行かん。と裏門を出で、山路を七八町登るに、多くは杉林にて、固より暑なく、露露瀼々として、凄愴の氣磅礴す。茲に至りては暑さも何れにか退き去りぬ。行く程に道漸く細くなりて、一入寂しさを加へしが、忽ち行手に當りて、朱の鳥居立ちたり。其を入れば、拜殿もあり、社殿もありき。然れども此は又本社よりは更に略式にして、且つ人の多く訪ひ來ぬ處とて、落葉風に散りて、色も形もなく、一片の雲の過ぎ行きし後は、蟬の聲さへかれかれに吹く風も、生温かく、真に寂寞無聲の境なり。されば長居もならざるに、忽ち引返して、疲れし足を休め、もせず、京の方にと歸りたり。



我は、奥宮の、寺火

(其三十八) 攝州幸壽院

『仲光』

……三個の木像……稀代の阿彌陀如來……



(寺林昌)

さきの日、われは攝州武庫郡の幸壽院に行きて仲光の舊跡を弔ひたり。幸壽院は俗稱にて昌林寺が通名なり。淨土宗の寺にて智恩院派に屬す。住職河北圓良師は豫て知る間なれば、案内を頼みて先づ左手の堂に行き幸壽丸の像を拜す。此堂には別に不動の像と頼光の像とあり。昔物語にもある如く、頼光は四天王を率ゐて大江山の鬼神を討ちに行き、門出に敵は名に高き鬼なれば、生還は期し難しとて、我と我が像を木像に刻みて、此寺に納めたるもの是なりといふ。又不動の像は頼光の父多田滿仲が我子の武運を護らせ給へど、自から尊像を刻みて頼光に渡しけるに、忝しと押戴き笈に入れて大江山に登り、首尾能く退じ了せたる後、此の寺に納めたるなりと傳ふ。されども此の不動像は尺にも満たぬ程の小なるものにて、唯だ形ばかりの火焰を添へ

たり。兎に角、此等の作は其頃の武士の多伎多能なるを證するに足る。又幸壽丸の像は誰が作とも知れざれど、幼なき童子の姿は見るも中々憐れなり。

斯くて此堂を出で、裏の藪の細道を傳ひて行けば、其一隅に石塔六基立てり。曰く源頼光渡邊綱平井保昌卜部季武藤原仲光幸壽丸と僧は一つに指せり。見るに青苔蒸したる石塔にて、文字の刻みたる跡だにもなし。故に此の墓に就て根據ありや、如何にと問ひしに、圓良師は頭を搔きて其仰せこそ物憂けれ。某も傳記だにあらば、勇ましく名乗り出でんとすれど、僅に口碑のみなるを如何にせんと辭色更に振はず。折柄秋風颯々と來り、婆娑として四邊を拂ひ、石塔の影に黄葉二ツ三ツ落ち初めたり。

やがて又た本堂に戻り、正面の御本尊を能く見奉れば、木像ながらも稀代の阿彌陀如來にて、其燦りたる色に無量の光澤あり。故に國寶の中に加へらるるとも、あるべし。なほ遊近き兜山の神呪寺にも弘法大師の木像あり。是も逸品にして國寶の中に數へらる。此二寶を以て攝州武庫郡の珍となすとす。旅行家は一度音訪れ給へかし。

此寺は天延二年、恰も九百三十二年の昔、美女丸事圓覺坊源賢僧都が比叡山より下る時に、伴の阿彌陀如來を

荷ひ來り始めて基を開きしなり斯くても忘れぬは己が身代りに立ちし幸壽丸の身の上なるにぞ其善提を弔ふ爲めに別堂を立て木像を安置したるなりと云ふ。美女丸が事は能樂に演じ謡曲に詠ひて其名高し流儀によりて仲光とも稱へ満仲とも言ふ。シテは仲光にてシテ運を満仲とす。シテは何と申すぞ美女御前の御命に代らうすると申すか。さすが仲光が子にて候ふといふ所の邊は、仲光舞臺の真中に立ちて兩側には美女と幸壽とを坐らす。此二人いづれも十二三ばかりの小童を用ふ斯くて美女は美女は餘りの悲しさに仲光が袂にすがりつゝと詠ひ又幸壽はなうお主の命に代る事弓矢取る身の習なりと互ひに掛合にて詠ふなり。曾て一歳梅若の老人が己が家の舞臺にて此の仲光を演ぜし時に恰かも此處にて満場の觀客皆膝を潤し鼻涙る聲のみ聞えたるを見て予は梅若の老人の絶妙なる伎倆に驚きたり。此時と故人山本東が歿する少し前に寶生會にて靱猿の猿引にて例の愁嘆の語りをなし、時とばかりは見物が皆一同に涕泣せし事を記憶せり。斯程まで情の溢るゝ所にてシテの仲光は終に刀をば幸壽の坐する前にハタリと落せば幸壽は死したる事となりて、ツイと立ちて切戸より樂屋に入る斯くて後に仲光は男舞を舞ふ三段の事もあり五段の事もあれど

何とて快く舞はるべきぞさればにや觀世流にては愁傷の舞と小書を附けて舞の途中にて橋掛の一の松に行き満仲に知れぬやうにシオルなり。此時笛の音も呂になり愁雲漠々として満場を襲ふ。誰か美妙の感に打たれざるべき其時の仲光の装束は侍烏帽子に掛直垂に白の大口を穿きたるが其優美なる姿が橋掛の松と照應し宛然一幅の能畫を見るが如し。暫くして笛の調子元に返れば仲光は又舞臺に歸り此處を先途と舞ひ歩む。蓋し仲光の心中にすまじきものはみや仕へといふ所存ありしならむ。果然仲光は是れよりして世を厭ひ出家す。其仲光の邸跡は八町四面もありし由なるが其れが即ち今の幸壽院なり。仲光の邸跡に昌林寺を建立せしなり。幸壽丸亦以て嘆すべき哉。

(其三十九) 大和當麻寺

附 石光寺

……中將姫の木像……染井堂と古池……糸懸櫻……
佛畫……東塔西塔……

るま寺



去る八日には當麻に行きたり午
前九時三十分七條發の急行列車
に搭じ奈良王子を経て下田驛に
向ひぬ此線路の沿道は名にし負
ふ大和の名所のみなれば山野田
園の眺望は自ら旅客の目を娛ま
しむるものあり殊に此の頃は金
風音づれて賤が伏屋の垣の根に
も葉鶏頭などの真紅の色の時を
得顔なるは愛でたし法隆寺驛よ
り郡山までの間は梨子の棚至る
所に在り果實熟して其形頗る大
なり。

此梨下に黄なる冠を戴ける向日葵の風にも堪へ得ず
してなよ／＼としたる風情是等皆な秋の田園の趣味
深き眺めなりかし。
やがて下田驛に着きしかば瀟車を下りて先づ當麻寺

への道を問ふに向に見ゆる小橋を渡り地藏堂の横を
畑道に出づれば其れより先は一筋道なり寺まで程は
卅町なりといふさらば左のみの事あるまじと思ひて
教へられたる如く行きぬ秋とはいへど今は午下一點
鐘なり傘も持たずして炎天に照りつけられたれば忽
ちにして流汗淋漓となりぬ漸くにして離落を過ぎ山
路に掛り道に荷車を置きて休める農夫に當麻の事を
語ればそは御身誤てり此方に來りなば非常なる迂回
なり斯々の方角を取られよとの事にさては一筋道の
畏に掛りたりと更に同じ道を數町も引返し先に過ぎ
りし村落の處まで來り其より人毎に問ひて漸く正路
を踏むを得たり旅の苦勞は斯かる時の事にもや此邊
を奈良縣北葛城郡磯壁村と云ふ程なく行手に當つて
瀟洒たる一寺を見る石光寺と稱す中將姫は此處に籠
りて朝夕佛道に心を寄せし由畢竟當麻寺の屬寺なり
まづ入りて縁起繪圖面等を殘さず購ひ靜に本尊を拜
するに寺の規模とは異りて阿彌陀如來の像の光明赫
奕として結構莊嚴なるには意外の感をなしたり別堂
に中將姫が頭巾を冠りて袈裟を掛けて端座する木像
あり其形餘りに可憐なれば暫し寫生に時を移しぬ然
れども彌勒菩薩の厨子の堅く錠を下ろされたるを案
内者の指して此厨子は尊きなり若し早天續きて百姓

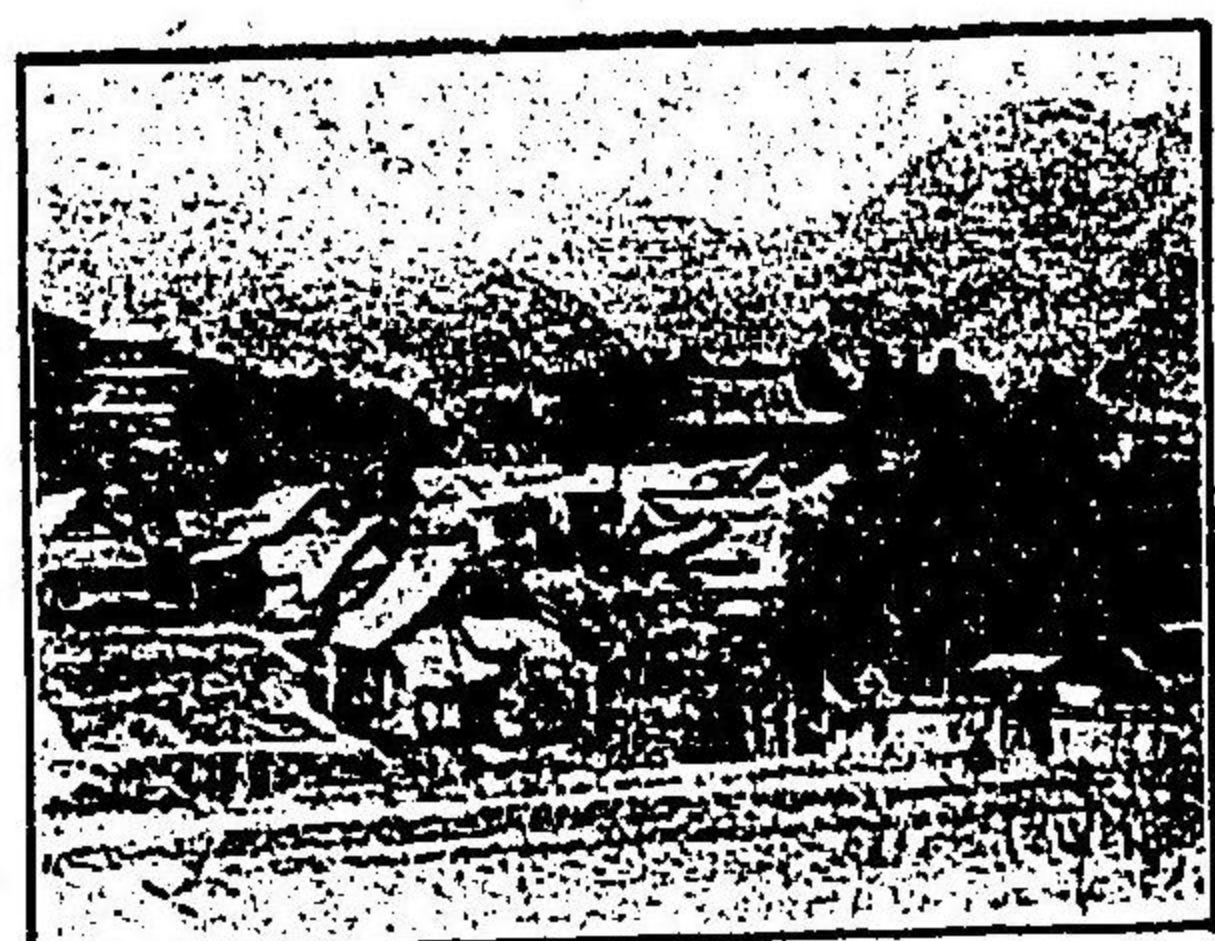
の難儀に及ぶときは此厨子を開く。さすれば忽ちにして雨降ると奇怪の説を吐きぬ。扱又庭を見れば念佛再建の文字ある大なる石碑立ち。碑文は例の寶丹流にて數百の文字を刻みたり。裏には奇進主の守田治兵衛守田重兵衛氏等すべて同家一族の名を列記す。東京の眞ッ只中の商家が斯かる大和の片山里の石光寺に心を寄するも妙なりと首を傾けぬ。

此石碑の前に染井堂あり。又寺の門前の石段を下りたる處に古池ありて池中に一木の松を植う。此染井堂と古池こそ當寺の舊跡なれ。否當麻一村の名所なり。聞説、中將姫は蓮莖を折りて糸を操り、此井戸に濯ぎて五色の糸として曼陀羅を織りたりと、其故に當寺を染寺とも云ふ。是に依て見ても天平時代には佛道の盛なりしことを察するに足る。

諸曲當麻の文章を見れば中將姫は當麻寺に籠りたるが如くなるが、又此染寺に於ての問答の如くにも思はる。是は當麻の御寺にて候か」と、ツキが言へば「さん候、當麻の御寺とも申し、又當麻寺とも申し候」と云ふ。此文句よりする時は全然當麻寺にての問答の如くなるが、又直に其下に斯の如き文字あり。

「是なる池は蓮の糸をすゝきて清めし其故に、染殿の井とも申すとかや」ツキあれは當麻寺ッレ是

は染寺シテ又此池は染殿の二入いろく様々としてあり。是より究むる時は全然此染寺よりして當麻寺を物語りたるが如し。志ある人は實地の旅をし給へかし。此染寺と當麻寺とは約四町も距離ありて、中に一村を挟みたる道か彼方の森の間に當麻寺有名の五重塔が見ゆるにあらすや。染寺は一の門にて當麻寺は奥の院とも言ふべき地勢なり。されば、是なる池はと言ひて今も現在する古池を指し、遙か離れて塔の見ゆる邊一廊の伽藍



を望みてあれは當麻寺と附けたる事は明なり。要するに當麻の作者は當麻寺と石光寺と兩方掛合はせたるものと覺ゆ。中將姫が此寺に籠りしは確なる事實なれど、元來當麻寺も同じく本願なれば素より兩寺を掛合せても然るべきなり。

染殿染井の舊跡なぞうち見たる後、庫裏に行きて冷水を一椀賜はれかしと望むに、奥より老婆一人出で來りて予が前に捧げたり。依りて之を受けながら椀に腰を掛くるに軒こそ古びたれ、庭より見渡したる二上山の

翠巒は此處まで清風を送りて忽ち心氣爽快となり。今の今まで背に瀧を流して炎熱と戦ひ來たりし其苦をば頓に忘れ終んぬ同じく當麻の謠曲に「此草庵を出で」と誓ひて一向に念佛三昧の定に入りたまふ所は山陰の松吹く風も涼しくてさながら夏を忘れ水の音もたえなく心に耳を澄ます夜もすがらとあるは此寺の境を叙して遺憾なく流暢なる運筆と稱すべし。若し夫れさながら夏を忘れ水の一句の次の掛りを取り去らば寔に我が今瀧を癒やしつゝある一椀を指すにあらすや。天平時代は今より殆んど千五十年前なり。其頃の山の姿寺の有様や如何夜も更け月清く秋風颯と來りて庭の木の間を音訪るゝ時中將姫の道心果して如何なりしか。思ひ遣るだも床しき事にこそ。

一憩したる後又立ち出でしが猶境内に糸掛櫻と名づくる古木あるを見たり。是は中將姫が遊より取りたる糸を掛けし木なりとの事なるにぞ謠曲の掛けし蓮の糸櫻花の錦の經緯に雲のたへまにはれくもるといふ文章を思ひ出でぬ。

石光寺の舊跡残りなく一見して當麻村の籬落に入り頻りに道を急ぎしに忽ちにして當の大伽藍に着きぬ。予は知人の添書を持参したれば先づ當寺の津田實英師を訪ひしに雜僧出で來りて答へて曰く師は今朝大

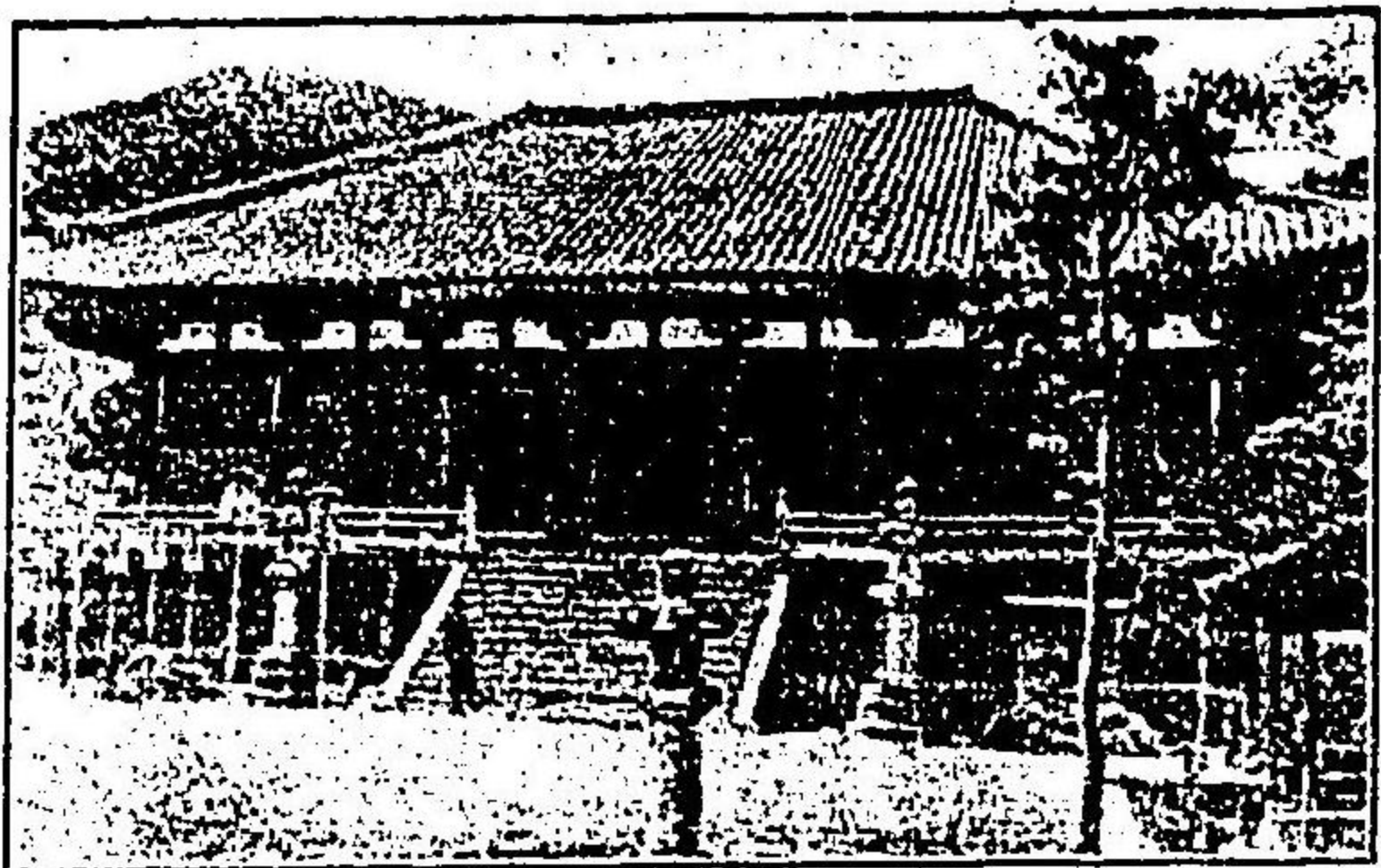
阪に往かれし故今晚の歸院は計られ難しと是れを聞きたる予は愕然として嘆じ頼みの綱も切れ果て暫しは言句も出でざりき切めても思ひて津田氏の師なりと云ふ中の院の老衲を訪ひて仔細を話しに是は又多く語るを好まず到底材料を捉へ難きにいたく失望して遙るゝ

此處まで來りたるものと思へども不在とわれば詮方なしと諦めぬ時を計れば早や午下五點鐘なり。今宵泊どらんにも淋しき山里なれば宿はなし下田の停車場まで引き返へさずんばあるべからず財囊亦た生憎輕し如かず今日は深く断念して歸り更に再遊を企て仔細に見聞せんと思ひ案内者は附けられたれども流車の時間を憂ひたれば大急ぎにて伽藍を一巡しぬ。さて見て行くに金堂には不動明王あるが頗る年を経たり。是れ當時の本堂なり其より有名の曼陀羅堂に行きて曼陀羅を見たり。是は畢竟佛畫の大軸とも見る可し。



(門山寺麻當)

謠曲にも抑も此當麻の曼陀羅と申すはとある程にて、當寺に取りては貴重の寶物なり。中將姫が蓮の莖より



(堂羅陀曼寺麻當)

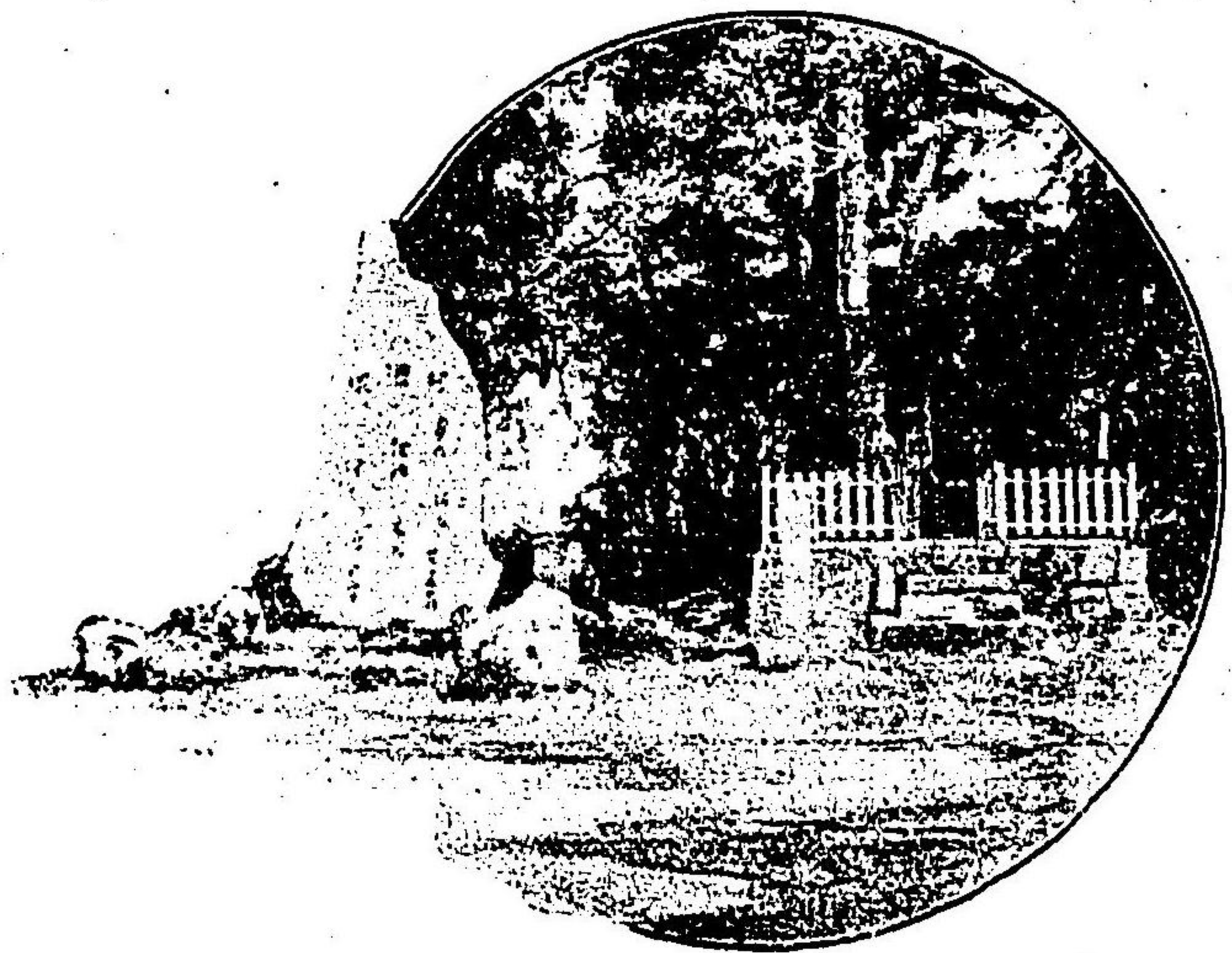
得たる五色の糸にて精緻なる佛畫の大軸を織りたりと云ふは即ち是なり。姫は十七歳にして此里に籠り二十九歳にして天死せり。然れども斯かる作物を後世に遺せば又憾みなかるべきか。

此曼陀羅の軸の掛りたる臺は鎌倉塗なりと云ふ見るに青貝を鏤めたる珍奇の品なり。其他種々案内者の説明ありしかど歸途を急ぐため耳に入らず直に駈け出で、三十町の道を腕車を驅りて終然に下田の停車場に向ひぬ。

當寺は謠曲の道行の文の如く二上山の麓にありて東塔西塔の二基立てり。此は古代美術史上の珍品にて、恐らく佛寺に二塔揃ひたるは稀ならん予は車上ながらも幾度か振り返りて木の間隠れに見ゆる此塔に名残を惜みたり。

(其四十) 伊勢阿漕ヶ浦 『阿漕』

平治の塚……安濃の松原……



(塚漕阿)

去る頃予は伊勢の阿漕ヶ浦に遊べり。津の停車場を出で岩田橋を渡り切りて直ちに左に入る時は津興大字船頭町なり。名の如く此邊漁師町にて顔の色黒く髪の亂れたる船頭の

み多く見ゆ。いづれも阿漕の平治然として網の綱手に一生を送る優しの心とぞ覺えける。其より畑道を傳ひて行けば忽ちにして四面茫茫たる野の中に一叢の木立あり。其木蔭に石碑二つ立ち阿漕平治の塚と刻みたり。又芭蕉の句あり曰く。「闇の夜になるをあこぎになく千鳥と翁の足止めなる事實に感ずるに餘あり。凡そ

予の旅行する處其行く先々にて必ず弘法大師と芭蕉翁の足跡を發見す。現今ならば容易きが昔の交通不便なる時代に能くも斯く至る處に證の跡を發しけることよと暫くは碑に刻みたる十七文字を打ち眺めたり。此森は漸く十五坪許りの狭き處にて全く平治の塚の爲めに殊更に地を割きたるものと覺ゆ。平治たるもの身は此の浦の波の底に沈みたりと雖も魂は永く弔らるはる亦慰むる所ありて可なり。尙ほ別に結城神社ありまた津の公園ありていづれも雅客の巡覽すべき名所なり。塚を出で、畑道を傳ひて海岸に行かんとする處に旗亭あり千鳥館と云ふ。此處に至れば前は早や一面の伊勢の海にして澎湃たる波濤の音は長に此の浦のありし昔を語るが如く打ち寄する貝を一ツ二ツと拾ふ間も漁夫平治の物語は忘るべくもあらざりき。況してや時は秋なり雲のたゞすまひも松吹く風も苦屋の景色も總て浦寂しく又遙かの沖に當りて一艘の汽船の煙を吐くは宛然一艘の糸の如く、いづれ

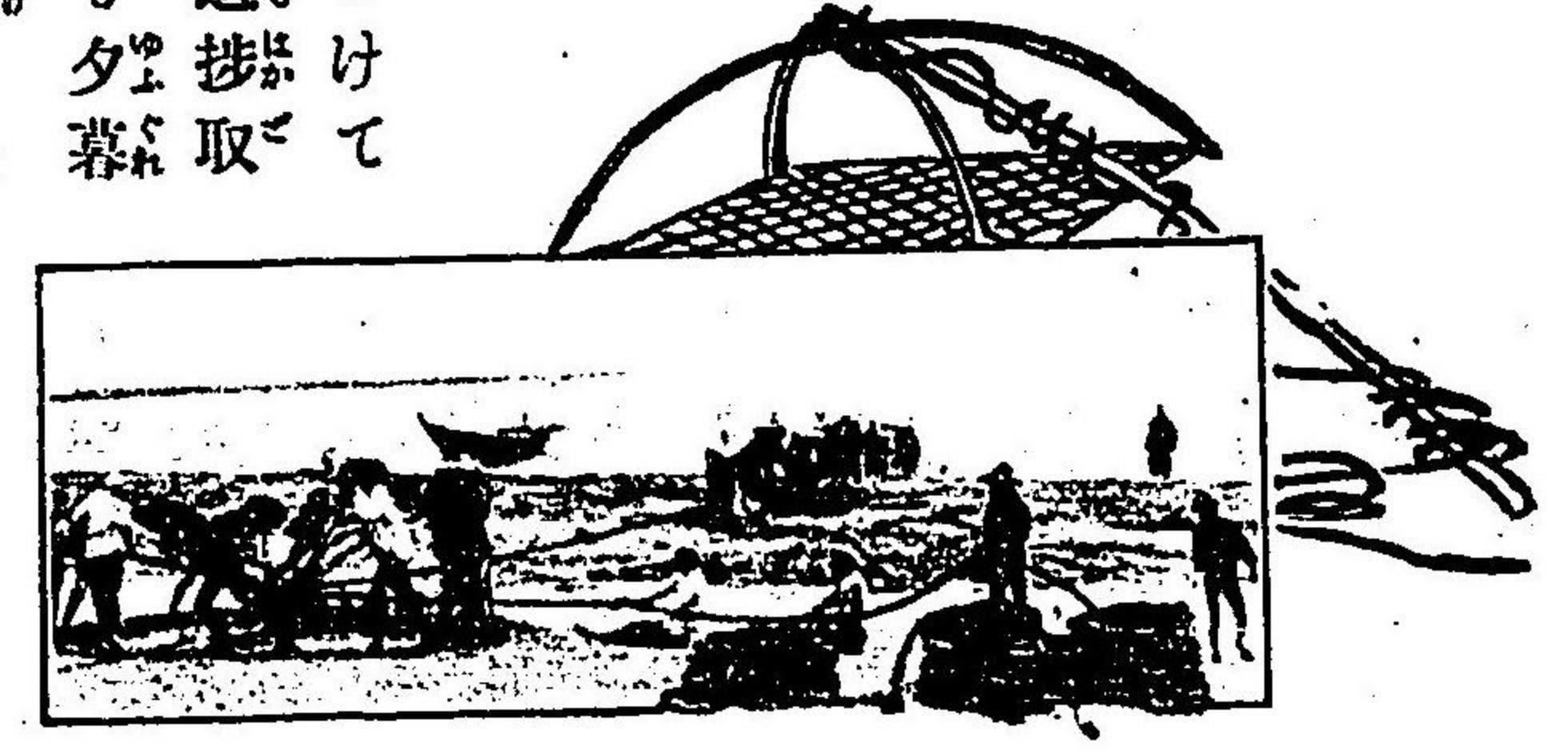


(原松の漕安)

も悲しき秋をかこち顔なり。此邊一帶を阿漕ヶ浦といひ市に斗入する川を隔てたる對岸を贊崎の浦と云ふ。此浦は絃歌の巷にて夏となく冬となく遊客の絶ゆる事なし。同じ伊勢の濱なれど向は銷金窩にて其名高く此方は哀れなる漁夫の昔譚にて謠にも謠はれ淨瑠璃にも語られて文人墨客の杖を曳く亦面白き對照ならずや。

阿漕の謠の道行は九州より出で、明石須磨を過ぎ鈴鹿の關を越えて此國に出でたるが如く旅の寢覺を須磨の浦關の戸ともに明け暮れて、阿漕が浦に着きにけり。美しく運びたり。是れを謠ふにつけても古の旅行の有様の佗しく道抄取らざりし事を偲ばれけり。日も夕暮の鹽煙たち添ふ方や漁火の影もほのかに見えそめて海邊も晴る、村霧に「といふ句は寢に此浦の夜の景色を叙述して遺憾なく恰も今日の前に見るが如き心地す。古今和歌六帖にも

あふことを阿漕が浦に引くあみの



(引網の浦漕阿)

たびかさなればあらはれやせん
とありて詞の種のいと多き所なりかし。更に此浦に數
十町にも及ぶが如き長堤あり松籟颯々として波と共
に不斷の樂を奏す。景狀頗る佳なり。これを安濃の松原
と云ひ、田村の謠に引かれたり。津の事を一名安濃津と
も云ひ喜多流の謠流行す。

(其四十一) 駿州三島神社 「春祭」

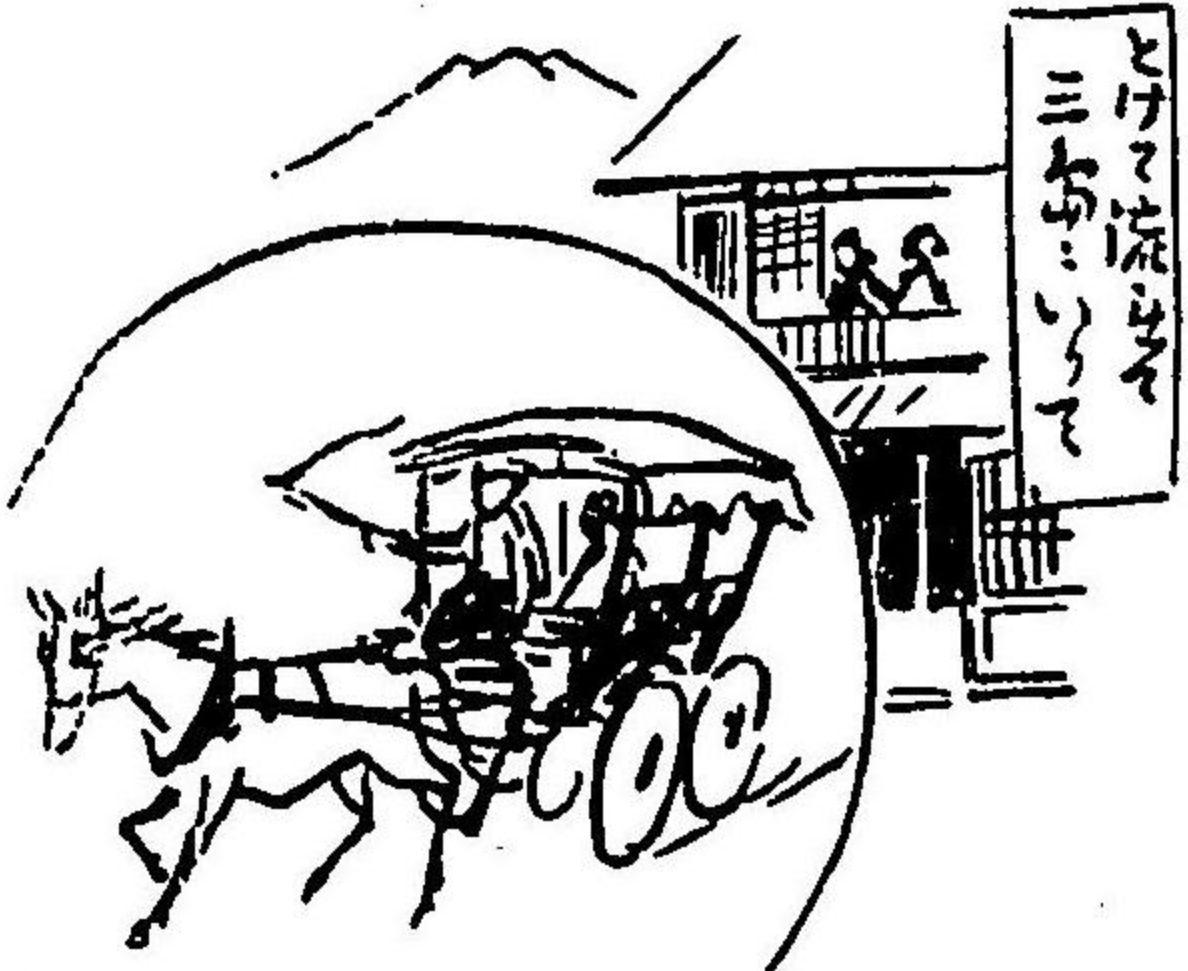


(三島神社)

二十五日京都を立ちて東に下
り名古屋豊橋を經焼津静岡を
過ぎ三島驛にて流車を見捨て、
其處より三十町ばかりなる三
島神社へと車を走らし
たり。

三島の宿は彌次喜多兩
君の滑稽話にて其名高
し。此處は西北に富士、愛
鷹東に足柄箱根、さては
金時の諸山を以て圍ま
れたれば、何れを向きても山岳我を迎へて遠來の情を
慰むるが如し。漸くにして宿場の前を過ぐ、飯盛女郎は
かばく、いさ粧ひをして二階より往來を見下ろして、

喃喃として語る。是等皆風俗に害ある者心ある人はな
どか眉を蹙めざるべき。此宿場を過ぐれば程なく三島
神社に著きぬ。如何に鄙の里
とはいへ流石に官幣大社な
れば其規模の大なる事侮る
可からず。社前に池ありて多
く鯉魚を養ふ。附近に駄菓子
果物など賣る店ありて、里の
子たち多く徘徊す。又有栖川
宮の御手跡を刻したる日清
戦役の記念碑高く立ちて長
に當時の戦役を偲ばしめぬ。察するに此地は第三師團
の兵士の出でしところなれば、故熾仁親王も厚く御心
を掛けさせ給ひしなるべし。社頭の有様は別に取り立
て記すまでもなく尋常と異なるどころなかりしが、變
りしは此の神をば彼の「春祭」の能に出づる増尾種直と、
子方の春祭とが最後の際までも念じたることにて、故
郷を去つて伊豆の國府南無や三島の明神本地大通智
勝佛の文句は謠ひうたふ人の能く記憶する所なりか
し。此處にて兩人が手を合はすれば高橋權頭は一刀を
引抜きて上段に振上ぐ。寔に危機一髪といふべきな
り。

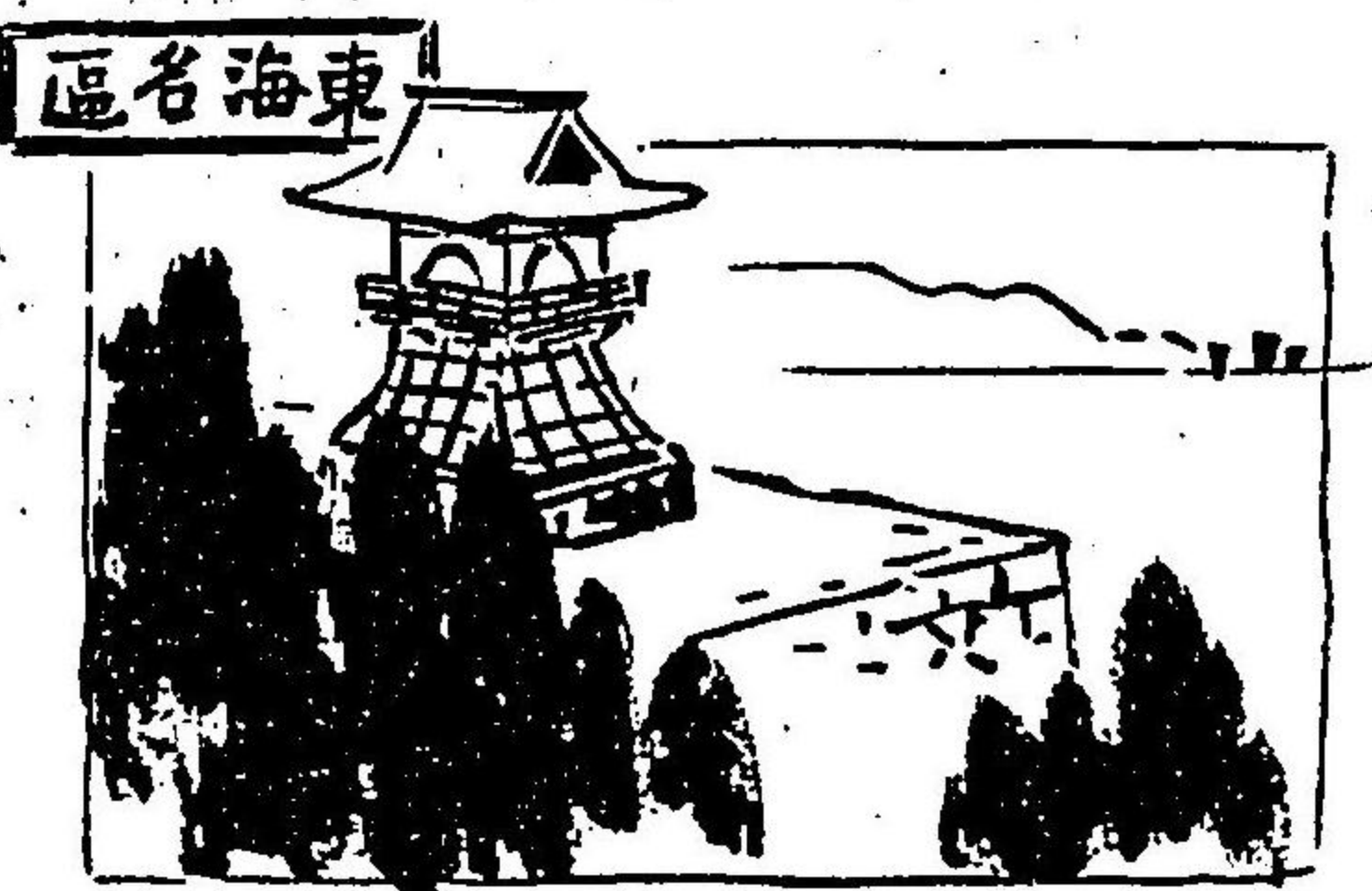


三島流車

其より境内を此處彼處と逍遙せしが固より偏士なれば是れどと思ふ事もなき故急ぎ神社を出で、前の停車場に引き返さんとせしが斯くては餘りに曲なしと思ひて此度は社前の乗合馬車に乗りたり沼津までの賃錢を問へば十五錢なりといふ。されど車掌は客を待たして容易に手綱を取らざるなり。此方は又沼津の發車時刻に間に合はせたとしと思ふ心の急かるゝゆゑ早く早く追りけるが横着なる彼等は更に其氣配なし。漸くにして手綱を取れば此度は又一町往きては休み、二町走りては止り頻りに客を勧む。此時今一人己ど同じく沼津發車の時刻を氣遣ふ客ありしが車掌は早くも其れと見てとりて足元を付け込み且那方四拾錢奮發して下さいさうすれば急ぎます、ナニ此馬ならば間に合はない事はありませんといふ何處も同じ此輩の奸策なるよと打ち吐きしが詮方なく終に其の如くにして走らせたり斯くて沼津に着き其より興津まで汽車に乗り停車場前の旅宿に投じぬ。

(其四十二) 駿州清見寺 羽衣

東海名區……鐘樓……



興津停車場前の旅宿は身延山の定宿にて宿料も安く食物もよく室も清潔にて大に心地よかりき斯くて一睡の夢を結び明くれば早々草鞋を引締めて凡そ十町ばかりと聞く清見寺にと急ぎたり。程なく到り着けば町の右側に高き石段あり其れを上れば惣門ありて東海名區とい

ふ額を掲ぐ頗る名筆なり門を入れば流車の軌道の上に乗したる橋あり此橋を渡り復た門を入れば即ち寺内にて其庭の瀟洒たる事掃除の善く行届きたる事皆眼を喜ばすに足る本堂の正面には釋迦牟尼佛を安置し軒には朝鮮正使翠屏と署して興國の二字を刻みたる額あり此堂の傍に皇太子殿下御手植の百日紅あり。又有栖川宮殿下御手植の力木あり更に一本の芭蕉を植う庭内を一周して東の方を眺むれば興津の海は穩波紋を織り真帆片帆の明滅する有様の長閑なる況し

てや、謠の羽衣の名所なる三保の松原は長く其岬を海中に斗出して呼べば將に應へんとす南を見れば清水港ありて帆橋林立す其に續いては龍華寺鐵舟寺皆子が双眼鏡の中に入りぬ北には薩陀嶺の翠嵐あり下り



(田子の浦)

ては田子の浦を一陣の下に集む、あゝ此絶景を獨り眺むる事のいと惜しさよ。總門に掲げたる東海名區の贊亦宜なる哉と、暫くは佇立したる儘にて四邊の光景を賞しけり寔に心凝り形釋けて萬化と冥合すとは蓋し這般の事をやいふべき。

斯くて又境内を逍遙せしに臥龍橋あり丈低く地を這へり之に對して招魂碑あり食人之食者死人之事從二位板本武揚書と筆太に認めたり。

清見寺は謠曲に多く引き出されぬ羽衣に月清みがた富士のゆき、いづれや春のあけはのどあるは今向ふに見ゆる三保の松原より此寺の崖下の清見瀉を見渡したる景なり又三井寺に「おもしろの鐘のねやなわが故郷にては清見寺の鐘をこそ常はきゝなれしに」と謠ふからには鐘こそあらめいでや其鐘樓をも究めむと思

ひ更に心を配りしに果せるかな此寺の北隅の海に面したる處に如何にも雅致ある鐘樓ありけり廻りて見るに軒に瓊瑤世界といふ額ありて、一つの釣鐘を吊したり。さても風情ある樓のさまかな同じくは月明の夜に此處に來り鐘樓と海と月とを賞せしならば如何ばかり樂しかるべきとこれも怨みの種なり。

折柄崖下に轟々たる響きして流車の通る音聞ゆ。然は斯かる時にも起るものにて、あな惜しかりき彼の流車に乗らんにはと返らぬ事を思ひぬ其より急に心急きて名残は盡さねと元來し道に引返し總門より下りて町に出で興津停車場に來り西下の流車に乗り其次の江尻に下り十町ほど歩めば是こそ駿州にて名高き清水港なりけれ。

(其四十三) 三保之松原 『羽衣』

渡船……三種神社……松原土手……



清水港は人家も櫛比し船相接し漁夫のざはめく聲なきいと賑しやがて渡場に辿り行きて三保行きの舟を命せしに船頭は乗合なき故人の來るまで御待ちあるか或は買ひ切り給ふかと言ふ故詮方なく一艘を占せしが後に聞

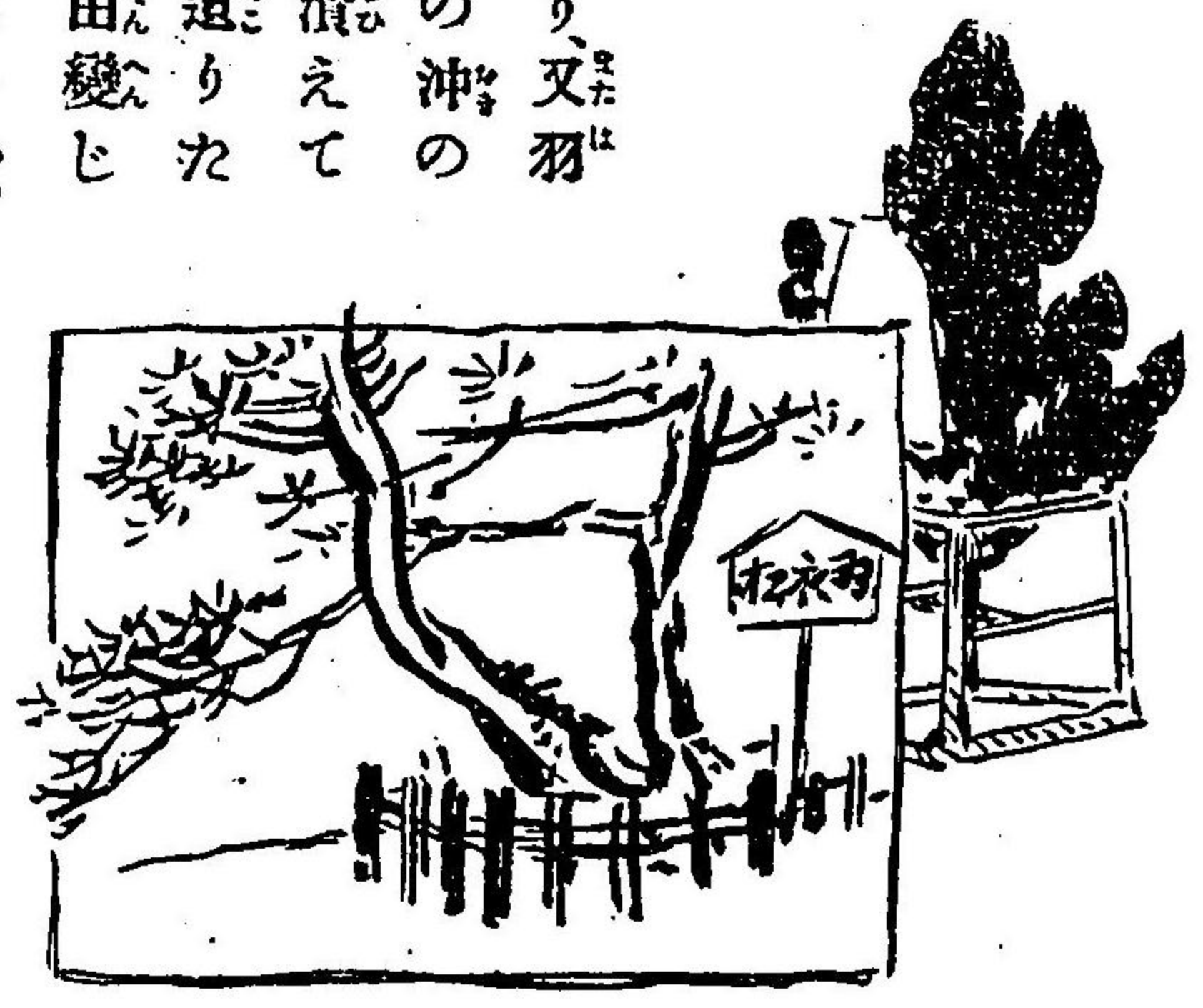
く此の渡船は華表前と村役場との二道ありて華表前は則ち三種神社の華表前までにて此方は多く松原探賞の遊客に止り村役場の方は三保村の町に用ゐる人の便なりしと云ふ。既にして櫓聲緩かに汀を離れば處は素より入江なり水は油の如くにして一波起らず一瀾立たず船頭の櫓を押す度に頻に船縁を叩く音は恰かも人の舌舐すりをするが如く静逸言ふべくもあらず斯くて徐ろに

彼方を見れば三國一の富士の山は巖々として天を限り近く見ゆるは愛鷹山續いては蒲原時薩陀嶺蜿蜒として起伏し、聖駿州の粹を聚む此入江の間は實に五六町あり。

既にして渚に着き丘に上らんとする處に石の華表あるが是れは三種神社の一の華表とも言ふべきなり。此處を過ぐれば茅屋軒を並べ又畑もあり多くは甘藷と砂糖とを植う稀に麥畑も見えたり。予は全村を究めしにはあられされど此三保村は一體に砂地にて漁夫の片手間に農業を營むが如く思はれたり斯くて六七町も歩みさしと思ふ處に一つの榜示杭立ちぬ見るに縣社三種神社とある故さては最早來れるかと思ひて華表を潜りたるに境内左して廣からず漸く名のみ拜殿を存しぬ恰も村の鎮守社と見て可なり。やんごとなき邊の御遊賞は此邊土にも洩れずして常宮殿下御手植の松といふものありき。又家康の寄附なりといふ石燈籠の半ば缺けて落ちたるをば大切に保存せんとて塙を廻らしたるなど鄙人の優しき心も見えていたく嬉し。此社を過ぎて少し歩めば又一帯の松原ありて兩側は渺茫たる畑なりやがて此の松原を過ぐれば前面に當つて高き土手ありて松疎に立つ若し此の邊をば田園の趣味に憧憬るゝ人に見せしならば如何ばかり歎

ふべき聞くに病者などの態々此村に來りて攝養するものありといふ。

斯くて其松疎なる土手を超て、ダラ〜と下れば眺望益々面白く、前は一面の興津の海にて遠く富士が根を望み、海波穏かに砂は白く松は海風に吹かれて、茲に不斷の樂を奏す故乙羽子が此處にて金玉の文字を生み出したるも道理なり、羽衣の松は幹二つに割れて増を作りたり、此時案内の男の語るを聞くに、素と此邊は一面の松林にて狐の穴のみ多かりしを、明治の世になりて刈り開きたるなり、又羽衣の松は其古は遙かの沖の方にありしを、後年地潰えて海となり、今は此處に遺りたるなりと云ふ所謂桑田變じて海となりたるの類なるか。



今にして思ひめぐらすに予が旅行したる中にて、此松原の如く深くも記憶に遺りたるは稀なり、見よや、此海邊の一體に輪をなし、砂は日光に映じて燦として、光を放ち、幹細き松の數幾百となく、土手に生ひて、海風に吹

かれてそよ〜としたる風情、又遙かに十八里の海路を隔てたる彼方に脈々として起伏したる伊豆の連山に雲の掛りて、臙氣なる更に近く七里の海路を越したる石廊といふ岬の髣髴として、眼界の裏に現はるゝ景色を況してや、波は白く、洋々として、寔に吾人の吟懐を感ずるに堪る。あゝ、此邊の月の夜の有様や如何ならむ、澄みわたたりたる蒼穹に一輪滯てる清光の影を、松吹く風に誘はれて、只一人逍遙せしならば、自から心の雲も拂ひ去られて、身は幽冥の人となり、伯良ならねど容姿妙なる天人を夢みる事もありぬべし、羽衣の謠に曰く「千鳥嶋の沖津浪、行くかかへるか春風の、そらに吹くまでなつかしや」と此の文章能く叙したりといふべし、知らず、謠曲家が此處を味ふ時の本意は如何に。

「月さよみがた富士の雪、いづれや春のわけほの」とあるは、天人も次第に舞ひ進みて、此汀の土手に上り、漸く天に登らんとする所と覺ゆ、地勢としても汀にては富士を見る事を得ず、土手に上り、松の木の間より小手を翳して始めて芙蓉八朶の靈容を拜すべきなり、斯の如く、予は此松原にて心適くまで致景を賞したる後、いざとて案内の漁夫の袂を引く儘に踵を廻らして來し方に引返しけるが、道すがら其語る所を聞くに、此松原は長

を用ゐず冬も暖かにして布子を着る事稀なり又如何なる海嘯ありとも此里のみは犯さるゝ氣遣なし其は外ならず三種の明神の御加護に依るなりといふ是等は島人の思想を現したるものと言ふべしざる信仰あればこそ年に幾度となく祭事を行ひて肝膽を照すなれ其れより程近き龍華寺に詣でつ。

明治四十四年六月七日印刷
明治四十四年六月十日發行

定價金壹圓八拾錢

著者 廣田花月

東京市本郷區本郷臺町十三番地

發行者 小島金平

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 木村龜作

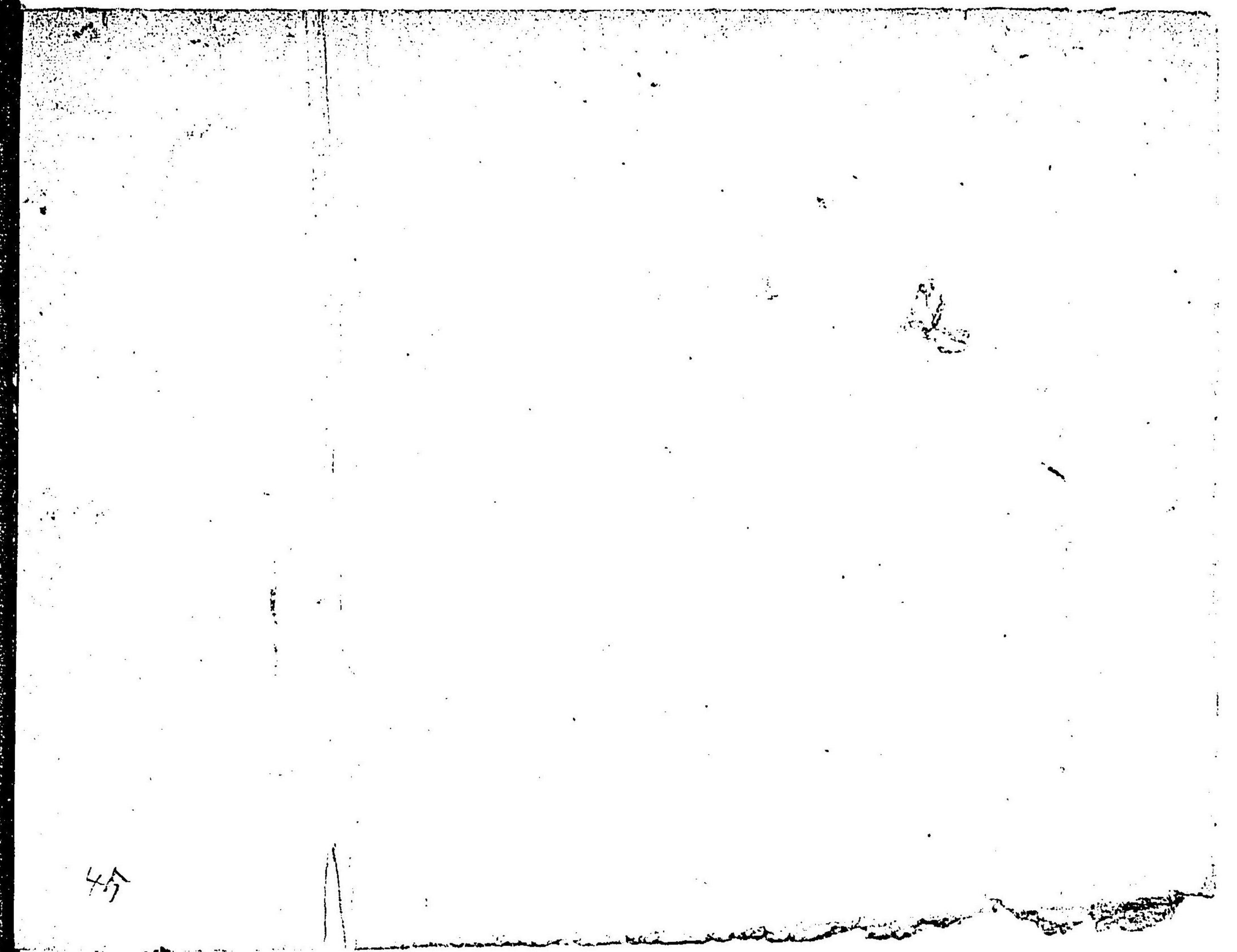
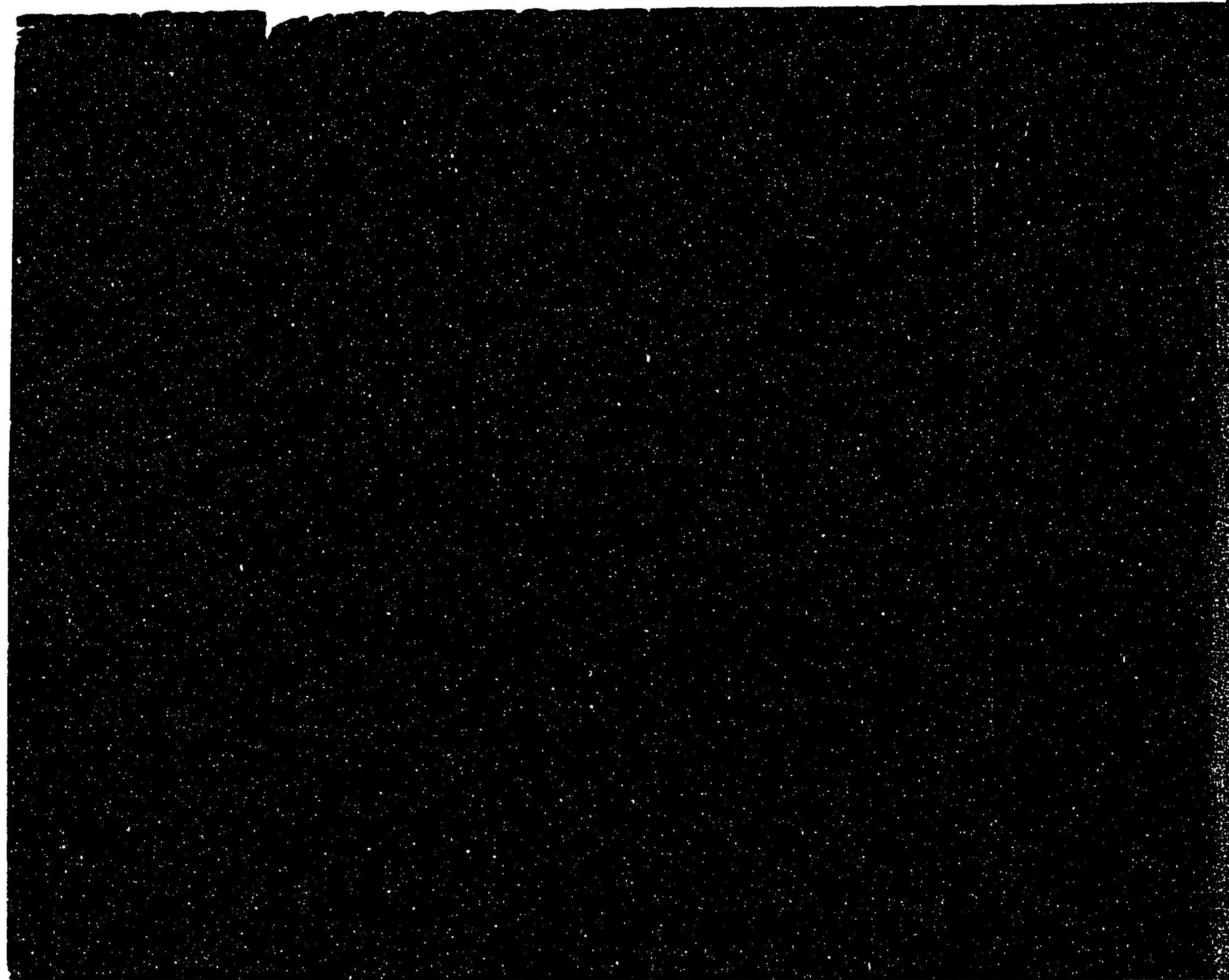
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

東京市日本橋區北島町一丁目三十六番地

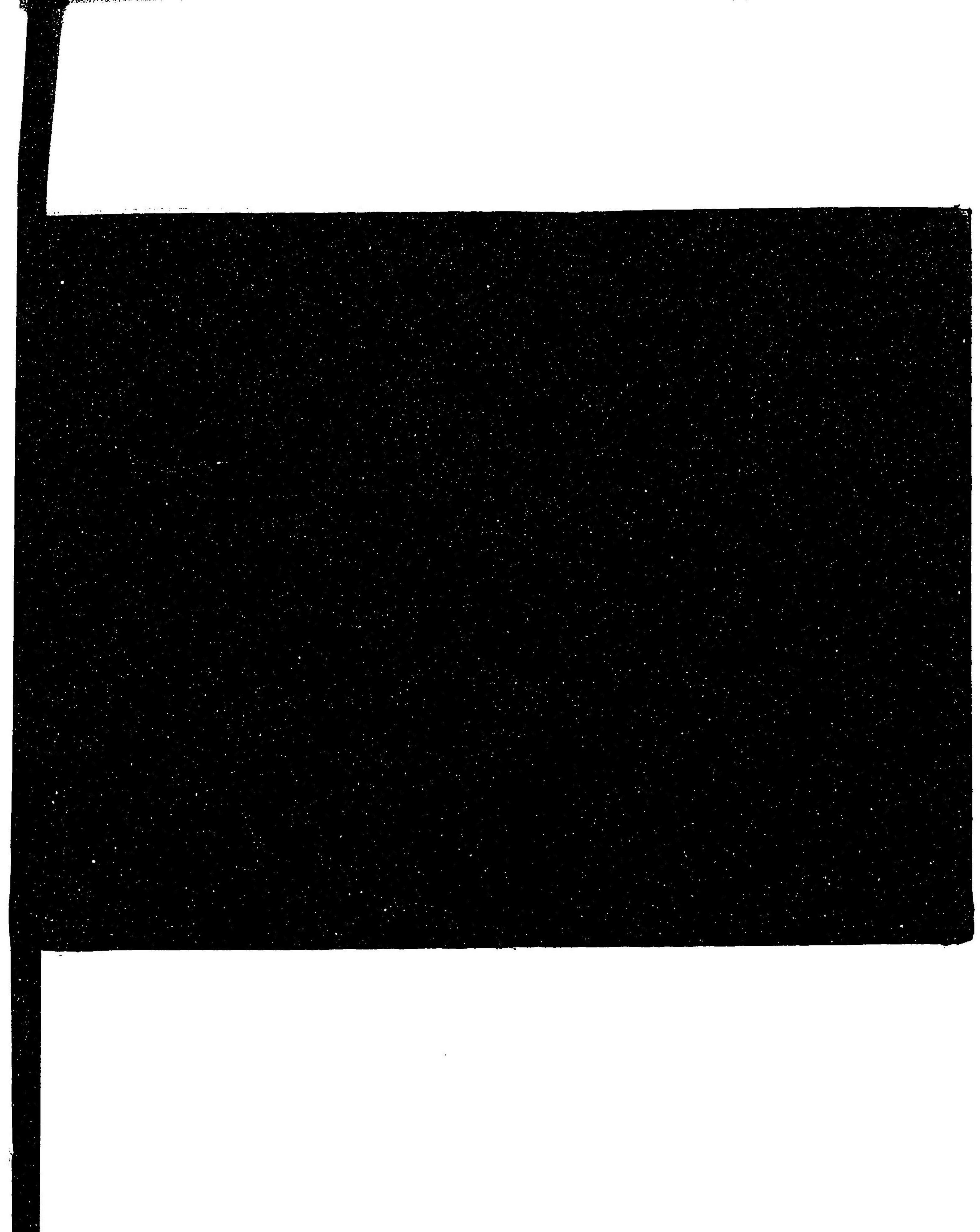
發行所 中外商業新報社

電話 浪花一四五番
同 五〇三三番
振替貯金五五五番



45

94
133



202486-000-5

94-733

謡廻国記

広田 花月/著

M44

EDE-0007

